

平成 24 年 度

群馬大学大学教育・学生支援機構
報 告 書



群馬大学大学教育・学生支援機構

目 次

1	教育基盤センター	1
1.1	教養教育部会	1
1.1.1	はじめに	1
1.1.2	平成 24 年度活動概要	1
1.1.3	平成 24 年度活動内容	2
1.2	外国語教育部会	4
1.2.1	はじめに	4
1.2.2	英語習熟度別クラス編成, および英語アチーブメントテスト	4
1.2.3	TOEIC IP	4
1.2.4	TOEFL ITP	4
1.2.5	e- ラーニングの推進	5
1.2.6	ドイツ語技能検定試験・フランス語技能検定試験	5
1.2.7	ドイツ語・フランス語の共通アチーブメントテスト	5
1.2.8	工学部の英語教育カリキュラム改変	6
1.2.9	その他	6
1.3	教育推進部会	7
1.3.1	はじめに	7
1.3.2	全学 F D	7
1.3.3	ベストティーチャー賞	7
1.3.4	教養教育授業評価	7
2	学生支援センター	74
2.1	入学料免除及び徴収猶予	74
2.1.1	免除申請者数, 免除者数	74
2.1.2	徴収猶予申請者数, 徴収猶予者数	74
2.2	授業料免除及び徴収猶予	74
2.2.1	免除申請者数, 免除者数	74
2.2.2	徴収猶予申請者数, 徴収猶予者数	74
2.3	寄宿料免除	75
2.3.1	免除申請者数, 免除者数	75
2.4	奨学金	75
2.4.1	日本学生支援機構第一種奨学生数 (平成 24 年 10 月 1 日現在)	75
2.4.2	日本学生支援機構第二種奨学生数 (平成 24 年 10 月 1 日現在)	75
2.4.3	日本学生支援機構以外の奨学生数 (平成 24 年 10 月 1 日現在)	75
2.5	学生相談体制及び学生相談	75
2.5.1	学生相談体制	75
2.5.2	主な相談事項	75
2.5.3	学生相談アンケートの実施及び活用	75
2.6	授業欠席状況調査	76

2.6.1	授業欠席者数及び主な欠席理由	76
2.6.2	実施方法, 時期	76
2. 7	障害学生への支援	76
2.7.1	障害学生数	76
2.7.2	支援内容	77
2. 8	学生教育研究災害傷害保険, 学研災付帯賠償責任保険	77
2.8.1	加入者数	77
2.8.2	請求種別保険金請求件数	77
2. 9	通学証明書, 旅客運賃割引証	77
2.9.1	発行枚数及び主な発行理由	77
2. 10	学生寮	78
2.10.1	養心寮入寮者数	78
2.10.2	啓真寮入寮者数	78
2. 11	生活支援施設	78
2.11.1	食堂	78
2.11.2	売店	78
2. 12	課外活動施設	79
2.12.1	体育施設	79
2.12.2	文化施設	81
2.12.3	課外活動共用施設	81
2.12.4	合宿所	81
2. 13	学生団体及び主な活動	82
2.13.1	学生団体	82
2.13.2	大学祭	82
2.13.3	関東甲信越大学体育大会	82
2.13.4	クラブ・サークルリーダーシップ研修会	82
2. 14	研修施設	83
2.14.1	北軽井沢研修所	83
2.14.2	草津セミナーハウス	83
2. 15	学生の就職支援	84
2.15.1	進路状況及び主な就職先	84
2.15.2	全学就職ガイダンス・セミナーの開催	84
2.15.3	キャリアカウンセリングの充実	84
2.15.4	キャリアサポート室における情報収集環境の充実	84
2.15.5	就職支援の体制強化の充実	85
2.15.6	就職活動のための実践的支援の充実	85
2.15.7	就職支援BOOKの作成・配付	85
2. 16	就業力育成支援室	85
2. 17	アルバイトの紹介体制の充実	85
2.17.1	主な紹介等件数	86

2. 18	学生生活実態調査	86
2. 19	キャンパスニュース群の発行	86
2. 20	学生支援センター資料集	86
3	学生受入センター	106
3. 1	はじめに	106
3. 2	オープンキャンパス等	106
3. 3	入学者の追跡調査	107
3. 4	その他	107
4	健康支援総合センター	108
	はじめに	108
4. 1	平成 24 年度年間業務実施概要	108
4. 2	学生定期健康診断	110
4.2.1 及び 4.2.2	学生の定期健康診断状況	110
4.2.3 及び 4.2.4	学生定期健康診断受検状況	110
4.2.5	学生定期健康診断における疾患別要観察者数（前橋地区）	111
4.2.6	学生定期健康診断時に発見された異常者数と事後指導結果（前橋地区）	111
4.2.7	健康診断時における精神保健調査	112
4. 3	外国人留学生健康診断状況	113
4. 4	ウイルス性疾患抗体検査	113
4. 5	健康支援総合センター利用者等	114
4.5.1	利用者数	114
4.5.2	利用件数	114
4.5.3	疾病領域別利用者数	114
4.5.4	医療機関紹介の診療科分類	115
4.5.5	薬剤別処方日数	115
4.5.6	常備薬使用数	115
4. 6	健康相談・精神保健相談	115
4.6.1	健康相談・精神保健相談の対応内容	115
4.6.2	精神保健相談者数	116
4.6.3	精神保健相談内容	116
4. 7	カウンセリング状況	117
4.7.1	学外臨床心理士による心理カウンセリング数	117
4. 8	教員による教養教育への参加等教育への参加状況	117
4. 9	教員による健康管理に関する調査研究業務	119
4. 10	健康支援総合センター所属教職員等	120
4. 11	健康支援総合センター主催の委員会等	120
4. 12	平成 24 年度健康支援総合センター運営委員会委員	120
4. 13	健康支援総合センターでの全国委員会等出席	121
4. 14	学内諸会議への教職員の出席	121
4. 15	学内行事実施に伴う救護業務	121

4. 16	出版・広報活動	121
4. 17	社会貢献活動	122
4. 18	その他の活動	122
4. 19	キャンパス・ソーシャルケースワーカーの活動	122
4. 20	健康維持・向上相談員活動	122
4. 21	健康支援総合センターの抱える問題点と改善の方向性	123
4. 22	健康支援総合センター資料集	125
	平成 24 年度 業務	125
	平成 24 年度 前橋地区学生定期健康診断日程表	128
	平成 24 年度 桐生・太田地区学生定期健康診断日程表	129
	平成 24 年度 学生定期健康診断受検状況（荒牧・昭和地区）	130
	平成 24 年度 学生定期健康診断受検状況（桐生・太田地区）	131
	平成 24 年度 学生定期健康診断における疾患別要観察者	132
	平成 24 年度 学生定期健康診断結果	133
	平成 24 年度 外国人留学生健康診断結果	135
	平成 24 年度 医学部 1 年ウイルス性疾患 （麻疹、風疹、水痘、流行性耳下腺炎）抗体価検査	136
	平成 24 年度 医学部 1 年クオンティフェロンTBゴールド検査	136
	平成 24 年度 医学部 1 年B型肝炎ワクチン接種状況	136
	平成 24 年度 利用人数	137
	平成 24 年度 利用件数	137
	平成 24 年度 健康相談・精神保健相談の対応内容	137
	平成 24 年度 疾病領域別利用者数	137
	平成 24 年度 医療機関紹介の診療科分類	138
	平成 24 年度 精神保健相談者数	138
	平成 24 年度 精神保健相談内容	138
	平成 24 年度 薬剤別使用数（処方日数による）	139
	平成 24 年度 常備薬使用数	139
	平成 24 年度 精神保健調査	140
	平成 24 年度 学外臨床心理士による心理カウンセリング数	141
	群馬大学保健管理センター規程	142
	保健管理センターの設置について	143
	平成 24 年度 学校医・カウンセラー	144
	第 14 回（平成 24 年度第 1 回）健康支援総合センター運営委員会次第	145
	第 15 回（平成 24 年度第 2 回）健康支援総合センター運営委員会次第	145
	第 16 回（平成 24 年度第 3 回）健康支援総合センター運営委員会次第	146
	第二期中期目標・中期計画にかかる 6 年間の実施予定計画	147
	平成 24 年度 健康支援総合センター運営委員会委員名簿	148
	健康支援総合センター規程	149

1 教育基盤センター

機構改革に伴い、教育基盤センターは大学教育センターを引き継ぐ形で 23 年度に発足した組織で、今年度は 2 年目に当たる。センターにはセンター長（教学担当理事・副学長）と副センター長の 2 名の兼任教員と 6 名の専任教員がいる。センターには教育企画室のほかに教養教育部会、外国語教育部会、教育推進部会の 3 つの部会があり、教養教育を中心とした全学の共通教育を企画し、運営、そしてその教育効果の評価を行なっている。

また教育基盤センターでは、初年次学生に向けて、新入生オリエンテーションやウォークラリー、文化講演会など、キャンパス生活を有意義に送るために必要な様々な行事を企画・運営・実施している。

1.1 教養教育部会

1.1.1 はじめに

教養教育部会は大学教育センター共通教育企画部が機構改革で発足した組織である。これまでの共通教育企画部は初年次の共通・教養教育に関する企画・立案も担ってきたが、新組織の教養教育部会は、新組織の教育企画室が企画・立案したものを実施・運営するための調整など、実務的な役割を主として担う組織になった。構成メンバーは部会長、副部会長、教育基盤センター副センター長、外国語教育部会長、科目委員会（学修原論、情報処理、健康科学、総合科目、人文・社会科学、自然科学）の各委員長（6 名）、学生支援センター（就業力育成支援室）、国際教育・研究センター、生体調節研究所からそれぞれ 1 名、各学部教務委員（教育学部及び社会情報学部はそれぞれ 1 名、医学部及び工学部はそれぞれ 2 名）からなる 19 名である。メンバーは 2 年任期の 2 年目にあたるため、一部の変更（人文・社会科学科目委員長）はあったが大部分は昨年度に引き続き同じ構成員である。

1.1.2 平成 24 年度活動概要

教養教育部会は毎月 1 回の定例会をもち、教養教育実施のための諸問題について討議している。平成 24 年度は 4 月に第一回の部会をもち、8 月の休会を除き、平成 24 年 3 月まで計 11 回の定例会議をもった。

通常業務以外に、今年度の大きな課題は 25 年度から実施予定の教養教育カリキュラム実現に向けて現行カリキュラム改訂の作業を昨年に引き続き進め、実施計画を策定し、最終的に具体的な実施内容を確定することであった。

平成 24 年度教養教育部会の主な通常業務は下記の通りであった。ただし、下記の 1) 及び 2) は新カリキュラムに対応したコマ数の確定、担当教員の確定作業でもあった。

- 1) 次年度教養教育科目開講コマ数の確定
- 2) 次年度教養教育実施体制（担当教員などの確定）について承認
- 3) 次年度教養教養科目等の時間割の確定
- 4) 次年度学年暦の作成・承認
- 5) 非常勤講師（ゲスト講師を含む）採用のための審査
- 6) 教養教育科目の授業に係わる経費などの承認
- 7) 合宿研修費要求に関する審査
- 8) TA の採用に関する審査
- 9) 障害を有する入学志願者との事前相談についての報告
- 10) 放送大学との単位互換科目（追加・変更分）についての報告

- 11) 協定を結ぶ他大学との単位互換科目（追加・変更分）についての報告
- 12) 交換留学生の教養教育科目履修についての報告

これらの通常業務に関係した主な項目及びそれ以外の例年実施の項目を月別に示した。

- 4月 新入生のオリエンテーションの実施
- 5月 「ウォークラリー」を実施
- 6月 教養教育関係予算案の承認
新カリキュラムに対応した学部別担当コマ数に関する基本方針を承認
- 7月 文化講演会の開催
前期期末試験の実施
次年度学年暦案の提示
- 9月 次年度学年暦案の決定
- 10月 次年度教養教育実施体制について承認
- 11月 次年度学年暦を再度審議して最終決定
- 1月 平成 24 年度教養教育科目等授業時間割の確定
- 2月 後期期末試験の実施
- 3月 次年度新入生オリエンテーション計画の作成

1.1.3 平成 24 年度活動内容

通常の活動は例年通り行ない、1 件を除きとくに大きく問題になったことはなく、報告及び審議を進めた。ただし、学年暦については一度承認した案に問題ありとする声があり、再度審議して 11 月に決まるという変則的な経過をたどった。

学年暦で毎年問題になるのは、祝祭日が多い月曜日の授業日数をいかに確保するかである。当初の案は祝祭日の月曜日に授業を行なうものであったが、反対の意見が出され、授業日数に余裕のある火曜日～金曜日に月曜日の振り替え授業を行なうことになった。

通常の報告及び審議事項以外では平成 25 年度に予定されている教養教育カリキュラムの改訂についての作業を昨年を引き続いて行なった。

1) 平成 24 年度での「学びのリテラシー」の試行授業

教育基盤センターでは平成 25 年度の教養教育のカリキュラム改訂を目指している。大きな変更点は学修原論を廃止して平成 25 年度から日本語リテラシー科目（最終的に「学びのリテラシー」との名称になる）を実施するである。そのため、その試行授業を平成 24 年度に行なった。試行授業の規模は各学部や学科の実情に合せ、前期あるいは後期に授業を計 10 コマ実施した。そのまとめの FD を平成 25 年 3 月 18 日に行なった。

2) 平成 25 年度実施の教養教育カリキュラム改訂のための作業

改訂のための作業は 23 年度から始められたが、実質的な作業は 24 年度に入ってから本格的に始まった。共通教育の区分も見直しが行なわれ、教養教育に相当する全学共通科目は教養基盤科目（学士力育成）と教養育成科目からなり、前者はほとんど必修、後者は選択必修となった。大きな変更点は学修原論を止めて教養基盤科目（学士力育成）として「学びのリテラシー (1)」および「学びのリテラシー (2)」を実施することである。「学びのリテラシー (1)」は前期に各学部でそれぞれの専任教員が対応することになり、「学びのリテラシー (2)」は「学びのリテラシー (1)」の履修を踏まえて、従来の学修原論の形を取り入れながら、さらに「学びのリテラシー (1)」の学習効果を高められるように工夫することで、従来の担当教員（及びさらに必要数の教員）が担当することになった。

このカリキュラム変更に伴い、「学びのリテラシー (2)」について必要な教員数の確保が難

しくなるなどの問題が生じたが、各部局の協力で必要数を確保し、実施の目途をつけることが出来た。

また英語の授業は習熟度別クラス編成と少人数教育を進め、すでに実施している工学部以外に、医学部と社会情報学部でも来年度から実施することになった。そのための時間割の変更作業などを行なった。さらに情報教育も従来の教育内容を改め、科目名も「情報処理」から「情報」に改めて実施することになった。

3) 理工学部のためのカリキュラム編成作業

25 年度から工学部が従来の 7 学科を 4 学科に再編した理工学部になることに伴い、カリキュラムと時間割の大きな変更を行なった。工学部（共通講座）の尾崎広明教授に協力を仰ぎ、作成した原案を基に、英語担当教員及び工学部（桐生）教員との話し合いを重ねて時間割を最終的に確定した。

4) ウォークラリーについて

ウォークラリーは 5 月 2 日に実施、1 年生約 1,100 名が参加した。

5) 平成 24 年度文化講演会について

7 月 24 日（火）ミューズホールにおいて、群馬大学元副学長稲葉清毅氏による講演（演題：偏った情報で動く社会と行政）が行なわれた。参加者は、本学学生、教職員等 150 名程の参加者であった。

6) 平成 24 年度防災訓練

10 月 24 日午後 1 時 30 分から、自然災害（大規模地震）の発生を想定して防災訓練が行なわれた。教室からの避難とともに、校庭では実際に学生が消火器を使って消火する作業も行なわれた。またテント内に煙を充満させ、学生教職員がその中をくぐる体験も出来るなど、従来にない内容の防災訓練だった。

1.2 外国語教育部会

1.2.1 はじめに

平成 24 年度、外国語教育部会は、前年度同様、全学の外国語教育の改善に取り組んだ。4 月には新入生を対象に英語プレイスメントテストを実施し、工学部、社会情報学部 of 学生について、英語習熟度別クラス編成を行なった。また同学部学生には前期・後期終了時期に英語アチーブメントテストを行ない、授業効果・学生の英語力向上の度合いを計測した。例年同様、TOEIC IP の実施、TOEFL ITP の実施、e-ラーニングの推進も行なった。さらに、ドイツ語およびフランス語の技能検定試験、年度末共通テスト、アチーブメントテストを実施し、受講学生の学力向上の度合いを客観的に計測した。また昨年度より、工学部の英語カリキュラムについては、1 クラス 40 名以下とする習熟度別クラス編成を、前期・後期ともに実施することができたが、来年度以降、この制度を全学に拡大することを検討している。

1.2.2 英語習熟度別クラス編成、および英語アチーブメントテスト

英語習熟度別のクラス編成は、平成 19 年度に行なったアンケート調査によって確認された、教員側のきわめて高い期待と受講生の一定の希望に基づき、平成 20 年度から、希望する学部・学科のクラスを対象として正式に実施され始めたもので、最終的には学部を問わず全学のクラスに導入されることが望まれる。

平成 21 年度より、工学部応用化学・生物化学科 1 年、保健学科看護学専攻 1 年（保健 A・B クラス）、社会情報学部 1 年、2 年の英語クラスにおいて習熟度別クラス編成が行なわれたが、平成 22 年度には、翌年度以降、工学部すべての学科に対して実施することが計画され、そのため 22 年度末には、工学部および社会情報学部の全一年次生に対して、アチーブメントテストを実施した。このデータをもとに、23 年度の 4 月には両学部の全新生に対して、プレイスメントテストを行い、習熟度別クラス編成を行なった。平成 24 年度もこの方策を継承した。

プレイスメントテスト 平成 24 年 4 月 4 日（水）

14：50～16：10 受験者 社会情報学部 104 名

16：40～18：00 受験者 工学部 519 名

監督（追試を含む）：工学部より 11 名、社会情報学部より 1 名

1.2.3 TOEIC IP

群馬大学では平成 15 年度から TOEIC IP を、「選択英語 AI」「選択英語 AII」と連動させながら継続的に実施しており、外国語教育部会が中心となって、多くの学生の TOEIC 受験を促している。

実施は年 2 回（7 月／1 月）で、平成 21 年度からは、申し込み手続を群馬大学で直接行うことにより、受験料を低く抑えることが可能になった。平成 24 年度の実施日時、参加者数は以下の通りである。

1 回目：平成 24 年 7 月 18 日（水；17:40～20:10）実施：参加者 152 名

2 回目：平成 25 年 1 月 30 日（水；17:40～20:10）実施：参加者 553 名

1.2.4 TOEFL ITP

海外留学を希望する学生にとって TOEFL の成績が要求されることが多いため、群馬大学では平成 20 年度から、TOEFL ITP を荒牧キャンパスで年 2 回（6 月もしくは 7 月と、12 月もしくは 1 月）実施することとした。平成 24 年度の日程と受験者数は以下の通りであった。

1 回目：平成 24 年 6 月 27 日（月；17:40 ～ 20:10）実施：参加者 38 名

2 回目：平成 24 年 12 月 19 日（水；17:40 ～ 20:10）実施：参加者 30 名

TOEFL ITP は、10 名以上が参加しないと実施ができないため、今後も外国語教育部会が中心となって、広報に努力を払い、各部局の協力を得ながら、参加者の拡充を目ざしていくこととした。

1.2.5 e-ラーニングの推進

e-ラーニングを推進するために、平成 24 年度も前年度に引き続き ALC NetAcademy2 の説明会（4 月 25 日）を開催した。この e-ラーニングのシステムは、TOEIC の得点向上に直結するため、とりわけ就職および進学に TOEIC を必要としている工学部の学生には、これまで以上の利用を促さねばならない。そのためにも、荒牧キャンパスのみならず桐生キャンパスの二年次生以上の学生の利用を促進すべきであることが再確認された。

1.2.6 ドイツ語技能検定試験・フランス語技能検定試験

群馬大学では、外国語教育部会が実施主体となって、ドイツ語、フランス語担当教員の協力のもと、群馬大学を会場にして、周辺地域の受験希望者がドイツ語技能検定試験、フランス語技能検定試験を受験できるよう継続的に努力してきており、平成 24 年度もドイツ語技能検定試験（5 級～1 級）およびフランス語技能検定試験（5 級～1 級）を、荒牧キャンパスにおいて実施した。実施日時と受験者数は以下の通りである。

ドイツ語技能検定試験

実施日時：秋季試験：平成 24 年 11 月 23 日（金・祝）全級（5・4・3・2・準1・1）

学内外の総受験者数：44 名（複数級併願者含む）

群馬大学生受験者数：2 名（ただし書類に学校名を記入していない場合はこれにカウントされないため正確な数値ではない）

フランス語技能検定試験

実施日時：春季試験：平成 24 年 6 月 17 日（日）5 級，4 級，3 級，準 2 級，2 級，1 級

秋季試験：平成 24 年 11 月 18 日（日）5 級，4 級，3 級，準 2 級，2 級，準 1 級

1.2.7 ドイツ語・フランス語の共通アチーブメントテスト

第二外国語のうち、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語などの印欧語族の言語学習は、中学での英語授業時間の短縮、高校での英文法授業の簡略化に伴い、同系語族の文法を論理的に理解する貴重な機会となってきている。だがいかんせん英語の学力自体が（さらには言語能力自体が）低下している昨今の大学生にとっては、第二外国語は、学んだところで身につかない（短絡的には「話せないから意味がない」）科目と見なされがちな科目ともなっている。その種の短絡性をアカデミズムの観点から批判したところで、これは我が国の文化レベル全体に関わる深刻な問題が背景としてあるため、第二外国語軽視の動向は一朝一夕で解決できる事態ではない。だがせめて、大学で学ぶ学問に関しては、その学習の達成度が、客観的に測れるシステムがあることが望ましい。

第二外国語のうち、学生がもっとも多く履修しているドイツ語およびフランス語については、学生たちの学習意欲を向上させるために、またその学習の進捗を図るために、21 年度以来実施している共通のアチーブメントテストを本年度も実施した。（週 2 回 1 年間 4 単位（学習時間年間 120 時間*）履修可能な学部学科のうち、週 1 回分を専任教員が担当するクラスで年度末最終授業時に共通問題で実施（試験時間 45 分**））

ドイツ語共通アチーブメントテスト

実施日 平成 25 年 1 月 28 日 (月) 教育学部 DEF クラス 26 名受験
実施日 平成 25 年 1 月 29 日 (火) 医学部医学科 15 名受験
実施日 平成 25 年 1 月 23 日 (水) 社会情報学部 A クラス 24 名受験
実施日 平成 25 年 1 月 28 日 (月) 社会情報学部 B クラス 15 名受験

フランス語共通アチーブメントテスト

実施日 平成 25 年 2 月 4 日 (月) 教育学部 ABC クラス 43 名受験
実施日 平成 25 年 2 月 4 日 (月) 教育学部 DEF クラス 33 名受験
実施日 平成 25 年 2 月 5 日 (火) 医学部医学科 2 名受験
実施日 平成 25 年 2 月 6 日 (水) 社会情報学部 21 名受験

21 年度以来の実施結果からおおむね以下のことが得られている。

＊ 4 単位 (120 時間) を履修する学生については、平均得点が全国のドイツ語技能検定 3 級ないしフランス語技能検定 3 級合格者の最低得点とほぼ同等である。

＊ クラスサイズが 30 名を超えると得点が下がり始める傾向がある。

1.2.8 工学部の英語教育カリキュラム改変

工学部の場合、入試の二次試験に英語が課されていないことから、英語力の低い学生が多数在籍しているが、一方で工学部の大学院進学率は高く、その進学には TOEIC の得点が合否判定に利用されている。また学部・大学院ともに、卒業・修了後ビジネス界に就職する率が高いために、高い学部・研究科であり、職に就いて後も英語力を要求されることは必至である。そこで外国語教育部会は平成 22 年度に、群馬大学の学生のおよそ半数を占める工学部学生の英語力を増強するために、大幅な英語カリキュラムの改善を検討した。その結果 23 年度には、教育基盤センター「外国語教育部会」がこれを実行に移した。おもな変更点は以下の通りであるが、24 年度もこの方策を継承し、さらに、1 クラスの受講者数を削減するために、全体のクラス増を実現した。

- 1) 週 2 回 (90 分×2 回) の英語授業を履修させる。
- 2) 前期 2 単位、後期 2 単位で、1 年次に 4 単位を取得させる。
- 3) 週 2 回のうち、1 回は文法・読解力の養成、1 回は聴解・会話等、コミュニケーション能力の育成を目指した授業とする。
- 4) 4 月入学時にプレイスメントテストを行ない、達成度別クラスを実現する。
- 5) 7 月の前期終了時にアチーブメントテストを行ない、その結果をもって、後期からのクラス編成を行なう。
- 6) 1 月に後期用のアチーブメントテストを行ない、達成度を計測する。

1.2.9 その他

外国語教育部会は、23 年度以来、工学部の英語カリキュラムの改変と 1 クラスの少人数化に取り組んでいるが、工学部のみならず、全学部において、1 クラスの学生数を 30 名以下にすることが理想である。そのため 24 年度には、25 年度以降、医学部および教育学部にも、プレイスメントテストを行ない、習熟度別クラス編成ならびに 1 クラスの少人数化を実現できるように、各部局との調整を開始した。

1.3 教育推進部会

1.3.1 はじめに

前年度と同様、全学 FD 連続講演会、ベストティーチャー賞選考、教養教育授業評価および教養教育アンケートを行った。また、23 年度に引き続き、前年度教養教育でのベストティーチャー賞受賞者による公開授業を実施した。

1.3.2 全学 FD

全学 FD 連続講演会「大学教育のグランドデザイン」⑤として、平成 25 年 1 月 25 日に、新潟大学 国際センター長 阿波村 稔教授による「新潟大学におけるグローバル人材育成の現状と課題」を開催した。

1.3.3 ベストティーチャー賞

平成 18 年度に創設された「ベストティーチャー賞」を継続実施した。

平成 25 年 5 月 14 日に、各学部等から選出された最優秀賞候補者による公開模擬授業、及び、学長・理事・学部長等による審査委員会を開催し、最優秀賞・優秀賞受賞者を決定した。最優秀賞受賞者は、教育学部から選出された江森英世教授で、他の受賞候補者は全員が優秀賞を受賞した。今年度も、公開模擬授業を荒牧地区で実施し、桐生地区にも同時中継することで、効果の波及を図った。また、今年度は教養教育科目の「群馬大学・学」の一貫としても行い、多数の学生が参加した。

昨年度と同様に教養教育から選出された 3 名の受賞者による公開授業を後期の授業から 2 回を指定し、教員、学生に公開した。

1.3.4 教養教育授業評価

各授業題目に対する授業評価アンケートを 25 年度から新たに教養教育科目に導入される「学びのリテラシー（1）」の試行科目、学部別科目と学修原論で実施するとともに、1 年生全員を対象に、教養教育全体に対するアンケートを後期成績配付時に実施した。

授業評価アンケートでは、学びのリテラシー試行科目を行った 4 科目で実施した。どの学部でもレポート作成方法、文献引用方法、コミュニケーションでは高い評価を得ていたが、論理的思考力の修得、日本語能力の修得、大学での学修方法の修得では学部間で差が認められた。討論の活発さや課題の量なども学部によって評価が異なり、25 年度からの全学的な導入にあたっては、さらに検討、改善の余地があると考えられた。また、23 年度に引き続いて学部別科目でアンケートを実施した。ほとんどの学生が必要不可欠な科目として評価していたが、反面、高校での履修内容への配慮、学部の専門教育とのつながり、学生の学力や理解度の配慮の点では 23 年度より改善が認められた科目もあるものの、学部や科目によって評価が低いものもあり、これらの科目については改善の余地があるものと考えられた。シラバスの記述、成績評価基準、クラス規模、教室や実習環境はおおむね良い評価が得られていた。25 年度より「学修原論」が「学びのリテラシー（2）」に改編、移行することを踏まえ、学修原論についてもアンケートを実施した。本来はゼミナール形態の科目として設定されていたが、一部の科目では履修登録者数が 100 名を超えているにも関わらず、多くの学生からは満足しているとの回答が得られており、「学びのリテラシー（2）」の移行にあたっては、教員および学生にこの科目の趣意を周知することが重要であると考えられた。

教養教育アンケートでは、ほとんどの項目で 23 年度より改善されていて、20 年度を底に、教養教育全体として改善傾向にあると考えられる。カリキュラム、教え方、満足度に関しては、19 年度以降初めて 7 割近い学生がよかった、満足していると評価している。しかし、大変満足していると評価する学生はまだ 2 割以下であり、今後も改善の余地があると思われる。科目区分ごとの評価ではどの科目群でも評価があがっている。特に習熟度別クラス編成を導

入した「英語」で評価が年ごとにあがってきている。

資料

1. H24 ベストティーチャー最優秀候補者による公開模擬授業次第 ほか
2. 公開授業案内
3. H24 授業評価質問票
4. 教養教育授業等に関するアンケート用紙
5. H24 前期学びのリテラシー試行科目授業評価アンケート集計
6. H24 前期学部別科目授業評価アンケート集計
7. H24 前期学修原論授業評価アンケート集計
8. H24 後期学びのリテラシー試行科目授業評価アンケート集計
9. H24 後期学部別科目授業評価アンケート集計
10. H24 後期学修原論授業評価アンケート集計
11. 教養教育アンケート経年一覧

平成 24 年度ベストティーチャー賞行事プログラム

1. 日 時：平成 25 年 5 月 14 日（火） 16：00～19：00

2. 場 所：大学会館ミューズホール 他（荒牧キャンパス）

3. 日 程

（1）公開模擬授業（16：00～17：30）

場所：ミューズホール

司会：（教育基盤センター教育推進部会長）

1－1 開会

1－2 挨拶・趣旨説明 （教育・国際交流担当理事）

1－3 模擬授業 最優秀候補者 5 人

16：10－16：25 藤井正希（社会情報学部 情報社会科学講座 講師）

16：25－16：40 江森英世（教育学部 数学教育講座 教授）

16：40－16：55 水野裕司（医学部附属病院 神経内科 講師）

16：55－17：10 内田陽子（保健学研究科 看護学講座 准教授）

17：10－17：25 荘司郁夫（理工学研究院 知能機械創製部門 教授）

1－4 閉会

（2）審査委員会の開催（17：40～18：00）

場所：大学会館 3 階会議室

議長：高田邦昭 学長（審査委員会委員長）

2－1 審議 （審査委員会 学長・理事・学部長等・機構長）

（3）ベストティーチャー賞授与式（18：05～18：20）

場所：ミューズホール

進行：（教育・国際交流担当理事）

3－1 開式

3－2 審査結果・学長挨拶

3－3 表彰状・副賞授与

3－4 受賞者代表挨拶

3－5 閉式

3－6 記念撮影

（4）学長・受賞者を囲んでの茶話会（18：30～19：00）

場所：大学会館 1 階レストラン「あらまき」

進行：（副機構長）

4－1 開会

4－2 受賞の感想

4－3 懇談

4－4 閉会

受賞候補者の選考経緯と選考理由

1 教養教育における選考経緯と推薦理由

教養教育のベストティーチャー賞受賞者の選考は、24年度の教養教育履修者に以下のようアンケートを実施し、それに基づき実施した。以下に選考の経緯と、その選考理由を記述する。

教養教育 ベストティーチャー選考用紙（平成24年度）

平成25年3月

「ベストティーチャー賞」は、専任教員の教育・授業方法の向上を図ることを目的に、優れた授業を行う専任教員を学長表彰するためのものです。

教養教育における選考は、本選考用紙による学生の皆さんの評価に基づいて行われます。宜しくご協力をお願い致します。

群馬大学 大学教育・学生支援機構
教育基盤センター長 石川 治

[1] 記入者の学籍番号と氏名

学籍番号 _____ 氏名 _____

[2] 優れた授業を行う教員の選考

以下の欄に本年度履修の教養教育科目で、授業内容、授業方法、学生の皆さんとの良好な関係等の観点を総合し、優れていたと思う教員のうち、前期の授業担当教員から2名以内、後期の授業担当教員から2名以内を選び、その「教員名」「授業の曜日・時限」「授業題目名」「欠席回数」「優れていたと思う理由」を記入して下さい。

選考対象となる、教員名、授業の曜日・時限、授業題目名（時間割番号）については一覧表を参照して下さい。非常勤講師、昨年度受賞教員（ベアリー・キース、藤本宗利、普神敬悟（敬称略））は対象外です。

	教員名	授業の曜日・時限	授業題目名 (時間割番号)	この授業での欠席回数	優れていると思う理由
(例)	赤城太郎	水・3－4	日本文化の形成 (1432)	2	内容がよく整理され、理解しやすかった。
前期			()		
前期			()		
後期			()		
後期			()		

選考経緯

1. 教育基盤センター教育推進部会(11月22日)および教育基盤センター運営委員会(2月20日)で、24年度の教養教育ベストティーチャー賞候補者選考手順を審議し、決定した。
2. 1年後期の成績配付時(3月13, 14日(夜間主コースは3月1日))に、学生に「教養教育ベストティーチャー選考用紙(平成24年度)」への記入を依頼し、回収した。記入の対象は、1年次開講のすべての教養教育科目の単位認定教員から、非常勤講師と23年度教養教育ベストティーチャー賞受賞者を除いた教員とした。学生からの記載は、前期2名、後期2名の連記とし、教員名のほかに、授業時限、授業題目名、欠席回数、優れていると思う理由も記載してもらった。
3. 候補者選考手順に基づき、候補者のべ14名をリストアップした。
4. 3月25日に、石川大学教育・学生支援機構長／教育基盤センター長、吉田大学教育・学生支援機構副機構長／教育基盤センター副センター長、相澤教養教育部会長、吉川外国語教育部会長、横山教育推進部会長で候補者選考を行い、3月25日の教育基盤センター運営委員会に結果を報告した。候補者選考にあたっては、得票状況に加え、優れていると思う理由、教養教育への貢献等も考慮し、総合的に判断した。

候補者の推薦理由 (最優秀賞候補者)

社会情報学部 藤井 正希 講師

藤井講師は、教養教育では前期および後期に分野別科目(社会)「日本国憲法」を開講している。履修登録者数は637名と多く、122名から投票があり、結果として授業題目あたりの得票数(61票)が最も多かった。また総得票数でも上位3位であった。

藤井講師は専門教育として憲法学を担当。日本国憲法の基本概念、基本構造を概観することにより、学生とともに日本国憲法の骨格を理解し、議論をより具体的にし、憲法に対する親近感を持てるように、典型的な判例の事案を多く取り上げ、学生とともに検討し考える講義を実践している。

その中で、社会に生起する様々な事象を憲法的視点から理解する力(いわゆる憲法的思考力)を学生に身につけさせる工夫をしている。また、受講生からも、「学問としての熱いメッセージが伝わってくる」という評価を多く得ている。

以上から、藤井講師を、最優秀賞候補者として推薦した。

(優秀賞候補者)

工学部 渡辺 秀司 教授

渡辺教授は、学部別科目の「数学入門」「微分積分学Ⅰ」「線形代数学Ⅰ」「微分積分学Ⅱ」「フーリエ解析学入門」を担当している。履修登録者380名のうち145名から得票しており、総得票数が最も多かった。

渡辺教授は理工学の基礎は自然科学であり、自然科学の基礎は数学。したがって、数学の授業では数学力を是が非でも身に付けてもらう必要があるため、「明快で、わかりやすい授業」と「丁寧な授業」を心掛けている。その日の重要事項を述べることから授業を始め、例題を解いて解説することにより、定理の理解を助ける。さらにその日の重要事項を復習した後に授業を終了する。このような授業を実施することで数学の苦手な学生からも、「明快で、わかりやすい授業」、「丁寧な授業」という評価を得ている。

以上から、渡辺教授を、優秀賞候補者として推薦した。

(優秀賞候補者)

教育学部 斎藤 理生准教授

斎藤准教授は、教養教育では、前期の学修原論で「日本近現代文学を読む」を開講している。履修登録者 21 名中 17 名 (81%) がこの授業題目に投票しており、学修原論として、履修登録者数あたりの得票数が非常に高かった。

斎藤准教授は授業では、日本近代文学研究の講義を中心としながらも、論文・レポートの執筆法や先行研究の調査法、図書館や論文検索サイトの使い方など、学生が大学での学びにすぐ活用できるスキルも積極的に教授している。講義内容も、初学者には難解に感じられがちな題材や理論を扱うときには、マンガやスポーツなどの例を多く用いて、受講者の理解を助け、好評を得ている。

また、毎回の授業後にレポートを提出させ、次の授業の最初に取りあげることで教員と学生との間に双方向性を組み入れている。このようなきめ細かい指導が高評価につながったと考えられる。

以上から、斎藤准教授を、優秀賞候補者として推薦した。

2 教育学部における選考経緯と推薦理由

選考経緯

1. 現行の選考方法は、平成 19 年 12 月 26 日開催の教育学部将来構想委員会で承認されており、学部教育の活性化というベストティーチャー選考の趣旨に照らし、ベストティーチャー賞受賞者は、その後 2 年間は選考対象外としている。
2. ベストティーチャー選考の資料とすることを学生に周知し、学部 3・4 年生全員を対象に自専攻の教員 2 名と自専攻以外の教員 2 名を投票用紙に連記の上、投票させて得票のあった教員 20 名をベストティーチャー候補教員とした。
ついで、これらの候補教員について平成 24 年度授業評価結果を所定の算定方法に基づき点数化して選考資料を作成した。
3. 3 月 29 日に学部長、副学部長、教務委員長で構成する選考会議において、選考手順の確認を行い、選考資料に基づき得点の上位 2 名を平成 24 年度教育学部ベストティーチャーとして選出した。

候補者の推薦理由

(最優秀賞候補者)

江森 英世 教授 (数学教育講座)

江森教授は、数学教育講座の教員として、「数学科指導法」、「初等科数学」、「実践的数学教育論」、「数学教育概説」などの授業を担当している。江森教授の授業では、学生はとても大切にされている。そして、そのお返しとして、学生たちは、授業の中で、実によく考え、学んでいる。90 名を超える多集団の授業においても、誰一人として話し声をあげる者も、鉛筆を動かさない者もない。学生たちは、こうした規律の取れた授業に参加しながら、みんなが真剣に学んでいるという喜びを共感している。理論に裏付けされた具体的な問いかけを基底とする授業は、教壇の上での現実的な問いとして、一人ひとりの学生の真摯な思考を呼び起こしている。実践的な内容の授業は、算数・数学科の授業研究を超え、他教科の授業研究にも広く活用できる知恵として、学生たちに好評を博している。毎年、10 名を超える教員採用試験合格者をゼミ生の中から輩出している。

以上から、江森教授を最優秀賞候補者として推薦した。

(優秀賞候補者)

三國 正樹 教授 (音楽教育講座)

三國教授は、音楽教育講座の教員として「初等科音楽(二)」、「ピアノ演習」、「ピアノ伴奏法」などを担当。従来、音楽分野の実技指導は「個別指導」が重視される分野であるが、クラス授業形式で行う意義を重視し、演奏機会の平等性に基づいた「公開レッスン制」での授業を展開している。また、演奏についての感想を提出させる、あるいは作品の背景等の知識を資料として毎回配布するなど、幅広い知識が得られるような授業作りを実践している。

以上から、三國教授を優秀賞候補者として推薦した。

3 社会情報学部における選考経緯と推薦理由

選考経緯

社会情報学部では、後期の授業評価アンケート配布時に、各学年の必修科目において、学生に「社会情報学部ベストティーチャー賞選考用紙(平成24年度)」への記入を依頼し、後日回収した。

学生からの記載は、前期1名、後期1名の連記とし、教員名のほかに、授業時限、授業題目名、欠席回数、選考理由も記載してもらった。

アンケートの集計方法は次のとおりである。

(1) 各授業科目の得票数を集計する。その際に、以下の投票は除く。

- ①欠席回数が6回以上の授業科目への投票
- ②重複して投票し、その内容が異なっていた学生分

(2) (1) で除外された投票を除いて、以下に①～③の集計を行う。

- ①総得票数が2位以内の教員
- ②[得票数/担当授業科目数]で2位以内の教員
- ③[得票数/のべ履修登録者数]上位数名の教員

上記①～③で合わせて6名程度をリストアップする。

(3) (2) でリストアップされた教員について、社会情報学部専門科目のシラバス作成の有無を確認し、作成していない科目があれば、リストから除く。

候補者選考手順に基づき、リストアップされた候補者の中から、3月1日開催の教務委員会及び3月4日開催の教授会において総合的に判断して、決定した。

候補者の推薦理由

(最優秀賞候補者)

藤井 正希 講師 (社会情報学部 情報社会学科)

藤井講師は、学部専門科目では、情報社会学科・法律系において前期は憲法Ⅰを、後期は憲法Ⅱを単独で開講等している。前者は人権の分野を、後者は統治の分野を内容としている。履修登録者数は前期78名、後期49名と多く、ベストティーチャーアンケートでは上記の①総得票数②[得票数/担当授業科目数]③[得票数/のべ履修登録者数]の3つの要素すべてにおいて最も多かった。

抽象的で分かりにくく難しいと敬遠されがちな憲法の分野を、わかりやすく解説している。日本国憲法の基本概念、基本構造を概観することにより、学生とともに日本国憲法の骨格を理解することを目指している。また、議論をより具体的にし、憲法に対する親近感を持てるように、典型的な判例の事案を多く取り上げ、学生とともに検討し考える講義を実践している。

その中で、社会に生起する様々な事象を憲法的視点から理解する力(いわゆる憲法的思考力)を学生に身につけさせる工夫をしている。講義アンケートにも、受講生から寄

せられる「わかりやすい」という感想のほかに、「学問としての熱いメッセージが伝わってくる」という評価を多く得ている。

以上から、藤井講師を、優秀賞候補者として推薦した。

4 医学部医学科における選考経緯と推薦理由

選考経緯

医学部医学科では、医学部医学科学友会授業向上委員会において学生を対象に実施される授業評価アンケートの結果を参考にして医学科教務部会で審議し、医学部医学科ベストティーチャー賞（ベストティーチャー石井賞）受賞候補者を推薦している。平成24年度は、3名の教員が授業評価アンケート結果に基づいて受賞候補者として推薦され、平成24年12月8日に医学教育教授法ワークショップにおいて、3教員による模擬授業が行われた。ワークショップ出席教員からの投票による選考の結果、3教員とも医学部医学科ベストティーチャー賞を受賞した。受賞者について教務部会で協議した結果、4年次生ブロック4「神経・精神系疾患腎臓疾患」講義を担当した水野裕司講師と3年次生生命医学講義ⅢA「分子病態学」を担当した柴崎貢志准教授が群馬大学ベストティーチャー賞候補者として推薦された。

候補者の推薦理由

(最優秀賞候補者)

水野 裕司 講師（神経内科）

水野裕司講師は、昭和62年に群馬大学医学部医学科を卒業した後、神経内科学を専攻し、平成3年から平成6年に国立精神・神経センター神経研究所機能研究部に留学して筋ジストロフィーの研究を行い、平成7年に医学博士号を取得した。平成10年から平成13年にハーバード大学ボストン小児病院に留学し、ジストロフィン結合タンパク質に結合するタンパク質であるシネミンを発見するなど多くの優れた業績を挙げた。帰国後、平成13年より群馬大学医学部附属病院に勤務し、神経内科講師を務め、筋委縮性側索硬化症を中心とした神経変性疾患の病理学的研究とシネミンに関する研究に従事している。学生教育では、5年生と6年生の臨床実習ならびに4年生の神経・精神系疾患の講義を担当しており、「説明が上手でわかりやすい」、「ウイットに富んだ面白い講義」と学生から高く評価されている。医学教育教授法ワークショップの模擬授業においても教員から極めて高い評価を得た。

以上の学生の評価およびこれまでの教育ならびに研究活動を考慮し、全学ベストティーチャー賞候補として推薦する。

(優秀賞候補者)

柴崎 貢志 准教授（分子細胞生物学分野）

柴崎貢志准教授は、平成9年九州大学大学院農学研究科生命機能科学専攻を修了し、平成13年総合研究大学院大学生命科学研究科生理学専攻を修了し、理学博士号を取得した。平成13年から平成14年にJST未来開拓推進事業リサーチアソシエート、平成14年から平成16年にロチェスター大学医学部加齢発生医学研究所博士研究員、平成16年から平成21年に生理学研究所細胞生理部門助教を務めた後、平成21年に群馬大学大学院医学系研究科分子細胞生物学分野講師、平成24年より同准教授を務めている。分子神経生理学を専門とし、センサー分子に焦点を当て、神経回路形成や神経興奮の分子メカニズムの研究を行っている。学生教育では、3年生の分子病態学の実習と講義を担当している。講義は、「進度が丁度よく、聞きやすい」、「プリントの図がまとまっており、見やすい」と学生の評価が高く、医学教育教授法ワークショップの模擬授業においても教員から高い評価を得た。

以上の学生の評価およびこれまでの教育ならびに研究活動を考慮し、全学ベストティーチャー賞候補として推薦する。

5 医学部保健学科における選考経緯と推薦理由

選考経緯

- 1 教育課程専門委員会(平成24年12月14日開催)で、平成24年度保健学科ベストティーチャーの選考手順を審議し、表彰年度限りで退職する者及び前年度受賞者を対象外とすることを確認した。
- 2 後期に各学年必修科目授業担当教員から各クラス連絡委員を通して、「保健学科ベストティーチャー賞投票用紙」を各学生へ配付依頼し、投票は、学生が個々に学務課協の所定場所に投票するよう指示した。
学生からの記載は、3名まで任意に記載できるものとし、授業科目名、優れていると思う理由を記載してもらった。
- 3 3月19日に教育課程専門委員会で投票結果を基に協議し、同投票数があるため上位4名を候補者とすることを確認して、学科会議に提案することとなった。

候補者の推薦理由

(最優秀賞候補者)

保健学研究科看護学講座 内田 陽子 准教授

内田准教授は、過去に数回保健学科のベストティーチャー賞を受賞している。学部の担当している科目は、「生涯人間発達学」、「老年看護学総論」、「老年看護学方法論」、「老年看護学方法論演習」、「高齢者ケアシステム論」である。超高齢・少子社会で、老人と触れ合う機会がない学生達に、高齢者ゲストとのやりとり、高齢者模擬体験、高齢者へのインタビューを基盤とするライフレビュー発表会、おむつ体験、高齢者いきいき体操実演小規模多機能施設の見学等、様々な授業方法、教材を工夫している。また、実際の認知症高齢者の映像を学生の前に示し、そこからの情報から考えられる看護アセスメントの解説は、学生を感動させる。それは、知識を実際の現場でどう考えるか、生かすかにこだわっているからである。医師から学んだ認知症の医学的知識に加えて、認知症高齢者が示すわずかな反応、行動から、彼らの望む看護ニーズを診断する過程を理論と人生観で解説する。老人看護の神髄は加齢に伴い様々な疾患・症状・障害を抱え、喪失体験の連続の中でも、一生懸命にその時その時を生きる老人のその人らしさを生かしたアセスメントと技術にある。内田准教授は、デジタル教材は使用せず、伝統的な講義と実演を重視する。パワーポイントは使用せず、学生との相互作用を重視し、ポイントを板書、教科書を活用しながら、看護の判断を含むアセスメントを分かりやすく解説する。それだけでなく、その場でどうケアしていくか、すぐに看護技術を実演する。このように、広島弁の混じった人間味のある会話と全身全霊で看護の感動を伝える教師は、他に類をみない。以上のことから、内田准教授を最優秀候補者として推薦する。

6 工学部における選考経緯と推薦理由

選考経緯

- ▽平成24年10月10日 平成24年度候補者の選出学科を決定(代議員会)
- 【応用化学・生物化学科／機械システム工学科／電気電子工学科】
- ▽平成24年12月末まで 学生投票の実施(学部3・4年生及び博士前期課程1・2年生)
- ▽平成25年3月25日 ベストティーチャー選考委員会
- ▽平成25年4月10日 優秀賞候補者を決定(代議員会・教育運営会議)
- 学長への推薦

推薦順位	氏 名	職 名	所 属
1	莊 司 郁 夫	教 授	機械システム工学科
2	外 山 吉 治	准教授	応用化学・生物化学科
2	弓 仲 康 史	准教授	電気電子工学科

各候補者の選考経緯および推薦理由：

(最優秀賞候補者)

機械システム工学専攻 莊司 郁夫 教授

選考経緯

大学院工学研究科・機械システム工学専攻では、「国立大学法人群馬大学ベストティーチャー賞実施要項」ならびに「群馬大学工学部ベストティーチャー選抜要領」に基づき、学務係が作成した様式による投票用紙を、対象学生に平成24年12月6日に配付し、学生が記入した投票用紙を平成24年12月17日までに回収した。対象学生は、機械システム工学科学部3・4年生および機械システム工学専攻博士前期課程（修士）院生である。有効投票用紙数は3年生50枚、4年生90枚、修士1年93枚、修士2年42枚の計275枚であった。各投票用紙に記名された教員名を1票として集計した結果、莊司郁夫教授が40票を獲得し第1位となった。第2位の教員の票数は25票であった。以上の結果に基づき、平成24年12月25日開催の機械システム工学専攻教員会議で審議の結果、満場一致で、莊司郁夫教授が機械システム工学専攻の平成24年度ベストティーチャー賞候補者として推薦された。

推薦理由

本学部ベストティーチャー優秀賞候補者は、「群馬大学ベストティーチャー賞実施要項」に定めるもののほか、「工学部ベストティーチャー選抜要領」の定めるところにより選抜される。これによると、学部3・4年生及び大学院博士前期課程1・2年次の投票をもとに、教育活動に熱心であり、また、担当授業が公開されている本学部専門教育科目を担当する助手を除く専任教員のうち、単位認定を行った専任教員から選抜することとしている。なお、選考委員会は、本学部の要求する適切なシラバスの記載が行われ、かつ教員評価が確実に実施されている選抜対象者から最優秀候補者を選考するものとする。

機械システム工学科では、平成24年12月に、当該学生が履修した機械システム工学科の専門教育科目のうち、授業方法、授業内容、学生との良好な関係構築等の観点から優れていると感じた授業の担当教員を1名から3名選ぶ無記名投票を行った。その結果、莊司郁夫教授が最も多く得票した。

莊司 郁夫教授の、学生指導に対する熱意と、授業改善に対する不断の努力の結果であり、シラバス掲載等の諸条件も満たしていることから、本学ベストティーチャー賞優秀賞候補者としてふさわしいと判断し、ここに推薦するものである。

(優秀賞候補者)

応用化学・生物化学科 外山 吉治 准教授

選考経緯及び推薦理由

本学部ベストティーチャー優秀賞候補者は、「群馬大学ベストティーチャー賞実施要項」に定めるもののほか、「工学部ベストティーチャー選抜要領」の定めるところにより選抜される。これによると、学部3・4年生及び大学院博士前期課程1・2年次の投票をもとに、教育活動に熱心であり、また、担当授業が公開されている本学部専門教育科目を担当する助教を除く専任教員のうち、単位認定を行った専任教員から選抜することとしている。なお、選考委員会は、本学部の要求する適切なシラバスの記載が行われ、

かつ教員評価が確実に実施されている選抜対象者から最優秀候補者を選考するものとする。

応用化学・生物化学科では、平成 24 年 11 月に、実際に学生が履修した応用化学・生物化学科の専門教育科目（卒業研究を含む）のうち、授業方法、授業内容、学生との良好な関係構築などの観点を総合して、優れていたと感じた授業担当教員を 1 名から 3 名選ぶ学生による投票を行った。その結果、外山吉治准教授が最も多く得票した。

学生が記載した主な投票理由は以下の通りである。

- ・身近な物理現象を対象とした講義でわかりやすい。
- ・授業が丁寧。内容がまとまっている。
- ・説明が理解しやすい。解説が詳しくかつ面白い。
- ・難しい内容もゆっくりとわかりやすく、簡単な言葉を使用してくれる。
- ・数式の導き方など、詰まりそうなところをととてもわかりやすく教えてくれた。
- ・授業内容がとても理解しやすく、板書がきれいで復習する時にとても役立った。
- ・板書の文字が大きくて見やすい。図を用いてわかりやすく説明してくれる。
- ・学生への気づかいがすばらしい。学生の反応を見ながら丁寧に講義を進めてくれた。

以上の学生の投票理由にある通り、外山吉治准教授は、卓越した指導力で教育効果の高い授業を実践したこと、教育方法の工夫や改善に取り組むとともに、意欲的に情熱をもって教育活動に取り組むことで顕著な教育効果をあげたこと、シラバス掲載等の諸条件を満たしていることから、本学ベストティーチャー賞優秀賞候補者としてふさわしいと判断し、ここに推薦するものである。

(優秀賞候補者)

電気電子工学科 弓仲 康史 准教授

選考経緯

電気電子工学科及び電気電子工学専攻に属する学部 3・4 年生及び博士前期課程 1・2 年生に対して、平成 24 年 10 月中旬以降に、実際に履修した電気電子工学科の専門教育科目（卒業研究を含む。）のうち、授業方法、授業内容、学生との良好な関係構築等の観点を総合して、優れていたと感じた授業担当教員を 1 名から 3 名を選ぶ学生による記名投票を行った。学生に投票用紙を配布し授業科目と投票理由を記載してもらい、平成 24 年 12 月末に集計を行った。その結果、学部 3 年の「計算機工学」の講義等を担当した弓仲康史准教授が最も多く得票したため、群馬大学ベストティーチャー賞候補者として推薦された。

弓仲准教授は平成 7 年東北大学工学研究科を修了後、群馬大学工学部電気電子工学科に赴任し、アナログ・デジタル信号処理、集積回路分野の研究に従事している。特に、「通信技術・信号処理技術を駆使した配線の高性能化に基づく新しいパラダイムの VLSI システムの構築」は、将来の微細 VLSI の実現に有効な技術として、IEEE(米国電気学会)より最優秀論文賞を授与されるなど、高く評価されている。これらの研究成果を生かし、3 年生を対象とした「計算機工学」を担当している。技術革新のスピードが速いこの分野の講義において、基盤技術を習得させつつ、携帯電話、ゲーム機等、身近な製品を実例に挙げて学生の興味を引く講義の工夫に定評があり、過去にもベストティーチャー賞を複数回受賞している。「4 年間授業を受けたが、この先生を超えるわかりやすく、緻密に計算された授業を受けたことがない。」「講義の内容を良く理解できるような工夫が沢山あった。」「学生を第一に考えた授業で、内容も分かり易く、多くの人に授業に出てもらいたい」等の学生の投票理由にあるとおり、候補者は、卓越した指導力で教育効果

の高い授業を実践したこと，学生の立場で教育方法の工夫や改善に取り組むとともに，意欲的に情熱をもって教育活動に取り組むことで顕著な教育成果をあげたこと，シラバス掲載等の諸条件を満たしていることから，本学ベストティーチャー賞優秀賞候補としてふさわしいと考え推薦するものである。

授業・教育方法の紹介

1. 授業名（受賞対象となるもの）
2. 授業の概要
3. 授業で特に工夫をしている点
4. 学生に接する場合に留意している点
5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

－教養教育推薦－

藤井 正希（ふじい まさき）：社会情報学部 情報社会科学講座 講師

1. 受賞授業名

日本国憲法

2. 授業の概要

憲法は国家の根本法であり、国家のしくみを定めた法である。それゆえ、法律を専攻する者のみならず、教養人たらしとする全ての者にとって、是非とも身につけておきたい分野の一つである。この点、本講義においては、日本国憲法の基本概念、基本構造を概観することにより、日本国憲法の骨格を理解していく。その際には、議論をより具体的にし、また、憲法に対する親近感を持てるように、典型的な判例の事案を多く取り上げ、受講者とともに検討し、考えていく。

3. 授業で特に工夫をしている点

憲法の分野は、抽象的で難しいと敬遠されがちですが、なによりも“わかりやすくおもしろい授業”になることを心がけて解説しています。また、具体的な事件や判例をもとに“考える”機会を多く持つことも意識しています。そして、その中で、社会に生起する様々な事象を憲法的視点から理解する力（いわゆる憲法的思考力）を学生に身につけさせるよう配慮をしています。さらに、90分の授業は今の学生にとっては少し長いので、学生が疲れたところで、余談や雑談を入れる工夫も忘れないようにしています。

本講義は、教養教育科目なので、あまり高度な知識や理論を説明するのではなく、中学の公民や高校の現代社会・政治経済の復習から始め、大学で本格的に憲法学を学ぶ上で必要不可欠な基礎的知識を中心に説明しています。また、教職課程履修学生や看護学専攻学生にとってこの日本国憲法は必須なので、その点も配慮しています。

4. 授業で学生に接する場合に留意している点

なるべく全ての学生に対して平等・公平に接するように気をつけています。そして、私は多少早口なので、できる限り大きな声で、ゆっくりと話すようにしています。また、重要なことは繰り返し説明をします。さらに、学生の要望は最大限に考慮し、授業に反映させることを心がけています。

5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

やはり“わかりやすくおもしろい授業”を強く意識して、自分が学生の立場だったらぜひ受講したいと感じるような授業を目指したことが、学生に評価されたのだと思います。今後とも、授業に創意工夫を取り入れることを決して忘れず、“熱く、熱く”授業を行って参りたいと考えます。

渡辺 秀司（わたなべ しゅうじ）：理工学研究院 理工学基礎部門 教授

1. 受賞授業名

前期：学部別科目「数学入門」，「微分積分学Ⅰ」，「線形代数学Ⅰ」

後期：学部別科目「微分積分学Ⅱ」，「線形代数学Ⅱ」，

分野別科目（自然）「フーリエ解析入門」，

2. 授業の概要

「数学入門」では，高校における数学Ⅰ，Ⅱ，Ⅲの内容（2次関数，三角関数，指数と指数関数，対数と対数関数，微分法，積分法）について，豊富な演習を行いながら授業を進めた。「線形代数学Ⅰ」では，高校の数学ⅡやⅢにおけるベクトルや行列の基礎から授業を始めて，行列式とその性質，連立1次方程式への応用などについての講義と演習とを行った。「線形代数学Ⅱ」では，ベクトル空間と線形写像，行列の対角化などについての講義と演習とを行った。「微分積分学Ⅰ」や「微分積分学Ⅱ」では，1変数関数の微分法とその応用，定積分や不定積分，広義積分，簡単な常微分方程式への積分法の応用などについての講義と演習とを行った。「フーリエ解析入門」では，まず，角度の単位としてラジアンを用いる弧度法と三角関数との復習を行い，次にフーリエ級数やフーリエ変換の基本的な考え方といくつかの具体的な関数に対するそれらの求め方・計算法について演習を実施した。波動方程式についての初期・境界値問題へフーリエ解析を応用してその解を求めるところまで，学生を引き上げた。

3. 授業で特に工夫をしている点

- ① 「明快で，わかりやすい授業」と「丁寧な授業」を心掛けている。理工学の基礎は自然科学であり，自然科学の基礎は数学。したがって，数学の授業では数学力を是が非でも身に付けてもらう必要がある。楽しいだけの数学の授業にならないよう，配慮している。
- ② 講義ノートの完成などの授業準備を授業当該日以前に行うことは当然。授業当該日には出勤したらまずは，その日の授業の段取り―その日の授業内容は何か，定理の正当性を確認する例としてどれを採用するか，演習問題としてどれをどの順番で解答するか，などを詳細に決める。
- ③ 授業開始時刻以前には教室に現れて，黒板消しで黒板を綺麗にする。そうすれば，授業が時刻通りに開始されることを望む学生さんが納得する。また，綺麗な黒板を見ると，学生さんも教員も気持ちがよい。
- ④ その日の重要事項を述べることから授業を始める。
- ⑤ 板書は丁寧に。黄色や赤色などのチョーク（可能ならば，蛍光チョーク）の使用。その日の重要事項は口頭で説明するだけでなく，必ず丁寧に板書する。
- ⑥ 数学記号には，簡単な説明を付ける。例えば，和の記号 Σ は最初から書かない。
- ⑦ パソコンの使用―パソコンで関数のグラフやフーリエ級数のグラフなどを描く。
- ⑧ 例題を解いて解説することにより，定理の理解を助ける。その後，必ず演習問題の実施。
- ⑨ 可能な限り，授業は終了時刻まで継続。ただし，時間オーバーは避ける。その日の重要事項を復習した後に授業の終了。

4. 授業で学生に接する場合に留意している点

- ① 丁寧に，そして親切に質問に答える。
- ② 理工学部には多数の留学生が在籍しているので，板書の際には，漢字，ひらがな，英語によって数学用語を表記している。例えば，行列，ぎょうれつ，matrix。
- ③ 自らの研究成果の中で，大学初年時の数学教育でも有効なものを授業の題材にする。

これにより、数学の授業をイキイキとしたものにならしめる。例えば、「微分積分学 I」で扱われる陰関数の具体例として、超伝導における BCS ギャップ方程式を扱ったら、好評であった。

5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

学生の皆さんに感謝。学生さんには遠い過去にも現在にも「明快で、わかりやすい授業」、「丁寧な授業」、などによく言われる。前任校でも同じであった。数学の国際会議にて行った英語での私の講演も「明快で、わかりやすい」と国内外の研究者に評された。

斎藤 理生（さいとう まさお）：教育学部 国語教育講座 准教授

1. 受賞授業名

学修原論 日本近現代文学を読む

2. 授業の概要

- (a) 日本近現代文学研究の講義を軸に、論文・レポートの執筆法や先行研究の調査法、図書館や論文検索サイトの使用法などを積極的に教えた。これらは大学での学びにすぐ活用できるスキルであるため、学生にとって受講するメリットがわかりやすかったと考えられる。
- (b) 高校までの「国語」とは質の異なる「日本近現代文学研究」は、初学者には難解に感じられがちな題材や理論を扱うこともある。が、義務教育で誰もが学んだ物語教材、若者の多くが親しむマンガ、スポーツなどの例や喩えを用いて、受講生の理解を助けた。
- (c) 毎授業後に小レポートを提出してもらい、次の授業の最初に取りあげた。この工夫によって、講義の形式であっても、教員と学生との間に双方向性を組み入れられた。また、教養教育の利点を活かし、学部・専攻が異なる 4 人程度のグループを作って、小説の解釈についてディスカッションする時間を取り入れた。
- (d) 受講生には 6 月末にレポートを提出してもらい、朱を入れて返却した。また 8 月上旬にレポートを基にした論文を提出してもらった（この論文も希望者には後日添削したものを返却した）。要は、きめ細かい指導を心がけた。

3. 授業で特に工夫をしている点

ハーフタイム制の導入。すなわち、集中力を保ってもらうために、授業開始後 45～60 分経ったら、3 分程度の休憩を入れている。学生には一度リラックスしたり、そこまでの授業内容を消化したりする時間にしてもらっている。自分にとっては、予定していた授業進度と実際のそれを計り直し、学生の理解度と合わせて、そこからの授業をどう展開するか、戦術を練り直す時間である。

4. 授業で学生に接する場合に留意している点

講義で語りながらも、往年の中田英寿のように首を振り、教室全体を視野に入れ、なるべく多くの学生に目を配り、視線を交わして語りかけている。よく聞こえる声を出そうと心がけ、フィリップ・トウルシエばりの身体言語を積極的に用いている。重要な部分がわかるように、あるいは退屈にならないように、遠藤保仁のパスの如き緩急や抑揚を語りにつけようと意識している。そういう努力が辛くなってきた時には、桂枝雀の落語を聴いて元気を取り戻す。

5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

4年間やり続けてきた学修原論ですが、今回はディスカッションを取り入れるなど、例年よりハードルを少し上げました。すると受賞する運びとなりました。このことは興味深い示唆を含んでいるように思います。

たしかに学生は、わかりやすさや面白さも重視します。しかし、彼らも教室で授業を受け続けて12年以上になるベテランです。90分の授業時間内の充実度だけで評価するほどウブではないように思います。授業時間外、あるいは将来に向けてどれくらい力になるのかを、意外なほどシビアに捉えているのではないかと。むろん、ただ難易度を高めればよいというものではないでしょう。が、ある程度〈厳しい〉授業を、学生たちの方が求めている。そういう潮流が最近はあると、今回はその流れに乗ったのかなと思っています。

－教育学部推薦－

江森 英世（えもり ひでよ）：教育学部 数学教育講座 教授

1. 受賞授業名（担当授業名）

数学科指導法，初等科数学，実践的数学教育論，数学教育概説，教職実践演習

2. 授業の概要

私は、「よい授業とは学習者の自然な思考にそった授業である」と考えている。よい授業は、教師が、学習者の思考の流れを適切に捉え、学習者にとって最適の学習環境を提供できたときに成立する。それゆえ、教師は、教室で展開されるコミュニケーションの質に注意を払う必要がある。このコミュニケーションの質を決める要因は、情意と認知という2つの思考の側面である。私の授業では、まず、学生たちが安心感を持てる授業になるように心がけている。一人ひとりの学生たちが、自分がこの授業で大切にされているという安心感をもてるようになれば、学生たちは、授業に参加することを喜び、授業に積極的に参加するようになる。こうした信頼関係が構築された後は、私は、学生たちに積極的に質問を投げかけることで、教室に神聖な緊張感をみなぎらせるようにしている。適度の「ハラハラ、ドキドキ」が、学生たちの学びをレベルの高いものにすると考えるからである。

3. 授業で特に工夫をしている点

教師に求められる資質は、多種多様な教育問題に対して、自分自身で考え、自らの解決方法を見出すことができる問題解決能力である。こうした問題解決能力を育成するために、私が担当する授業では、学生たちは、知識を学ぶのではなく、考えるということを学んでいる。必要最小限の知識で、どこまで深く考えることができるのか、その深さを提示することで、学生たちは、人間の思考の深さに驚嘆し、数学教育学に興味を持つようになる。選考対象となった4年生対象の「数学教育概説」の授業では、数学教育を学ぶ者としての誇りと専門性を高めることを主眼としている。そのため、授業内容のレベルをかなり高く設定している。学生たちが、数学教育学という学問の難しさを肌で感じるとともに、学問をすることの喜びを感じられるように工夫している。

4. 授業で学生に接する場合に留意している点

私は、授業の中で、すべての学生が大切に扱われているという実感をもてるようにしている。特に、学生とのアイコンタクト、遅刻者や欠席者の扱い方、話し方などに注意を払っている。例えば、遅刻者や前回の欠席者に丁寧に対応している姿を他の学生にも見せることで、自分も同じように扱ってもらえるだろうという安心感を教室全体に浸透させるように心がけている。

5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

私の授業では、学生はとても大切にされている。そして、そのお返しとして、学生たちは、私の授業の中で、実によく考え、学んでいる。90名ほどの多集団の授業においても、誰一人として話し声をあげる者も、鉛筆を動かさない者もない。学生たちは、こうした規律の取れた授業に参加しながら、みんなが真剣に学んでいるという喜びを共感している。教師がベストティーチャーなのではなく、この時間を共有している学生の真剣な学びあい、教師と学生との相互作用によって作り出される、この授業そのものがすぐれた授業になっているということを、学生たちは高く評価してくれたのだと思う。学生がベストチューデントなのである。

三國 正樹（みくに まさき）：教育学部 音楽教育講座 教授

1. 受賞授業名（担当授業名）

ピアノ演習

2. 授業の概要

オルガン、クラヴィコード、チェンバロ、ピアノなどの鍵盤楽器の変遷を解説し、その楽器がどのように発達あるいは変化し、人間にどのような影響を与えたか、また個性的な作曲家たちと彼らが生きた社会について考察する授業です。

3. 授業で特に工夫をしている点

出席を確認する方法として授業の感想や質問を書かせ、それに対するコメントを書いて次の授業で返却しています。CDなどの音響装置を使った鑑賞だけでなく、教員自身による演奏も適宜行っています。

4. 授業で学生に接する場合に留意している点

音楽を言葉で表現することは難しいので、適切な言葉遣いに注意しています。専門用語については授業中にできる限り分かりやすく解説するようにしています。

5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

大人数の授業ですが感想文用紙へのコメントを必ず行うこと、評価の基準を明確にしていることかもしれません。

－社会情報学部推薦－

藤井 正希（ふじい まさき）：社会情報学部 情報社会科学講座 講師

1. 受賞授業名

憲法Ⅰ、憲法Ⅱ

2. 授業の概要

憲法Ⅰでは、基本的人権、いわゆる人間生来の権利・自由を体系的に学ぶ。すなわち、国民の幸福を実現するために、日本国憲法がどのような権利・自由を保障しているのかについて、憲法体系に沿って概観していく。具体的には、まず個人の尊厳（個人主義）、人権の概念、人権の国際化等の人権の基本原則を学習した上で、平等権、自由権、社会権を理解することが最大のテーマとなる。必要に応じて、アメリカやイギリスの憲法にもふれ

ていく。

憲法Ⅱでは、統治機構、いわゆる政治のしくみを体系的に学ぶ。すなわち、国民の幸福を実現するために、諸機関がどのような働きをしているのかについて、憲法体系に沿って概観していく。具体的には、まず国民主権、法治主義、法の支配等の統治の基本原則を学習した上で、国会と内閣と裁判所の組織と働きを理解することが最大のテーマとなる。さらに、財政制度や地方自治制度等が考察の対象となる。

3. 授業で特に工夫をしている点

基本的な授業方針は、教養教育科目の日本国憲法と変わりません。すなわち、“わかりやすくおもしろい授業”になること、“考える”機会を多く持つこと、“憲法的思考力”を学生に身につけさせること等を工夫しています。

ただし、本講義は学部の専門科目であり、上級生も多く履修することから、基礎的事項のみならず、できる限り応用や発展を取り入れた授業を心がけています。また、就職後を視野に入れ、“社会に出てから役に立つ憲法”を目指したいと考えております。

4. 授業で学生に接する場合に留意している点

宿題の課題や授業中の作業を報告するワークシートなどを毎回の授業で提出してもらう。それらにコメントをつけて返却し、全ての学生と1対1のコミュニケーションの機会を持つよう心がけている。

5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

学生自身が授業を通して何らかの達成感を感じることができたため。

ー医学部医学科推薦ー

水野 裕司（みずの ゆうじ）：医学部附属病院 神経内科 講師

1. 受賞授業名

脱髄性疾患

2. 授業の概要

中枢性の脱髄性疾患の代表である多発性硬化症について講義する。疾患名にある「多発性」の意味、診断基準にある「空間的多発性」と「時間的多発性」の意味、再発・寛解を繰り返す臨床症状の特徴について、図やMRIなどを用いて理解しやすいように解説する。また、多発性硬化症のキーワードである「・・・症候」や「・・・症候群」などを説明する。

3. 授業で特に工夫をしている点

最初に自己紹介して私という人間を知ってもらう。文字と声は大きくする。文字よりも図、画像、絵などで視覚的に説明する。図やグラフを引用する場合は文字が小さく見にくくなるがあるので注意する。試験に出題されやすいキーワードは繰り返す。

4. 授業で学生に接する場合に留意している点

遅刻しない。時間内に終わる。怒らず笑顔で接する。

5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

1時間ずっと授業の話をするのではなく、適度に世間話をしたからか？

柴崎 貢志 (しばぎ こうじ) :

医学系研究科 脳神経発達統御学講座 分子細胞生物学 准教授

1. 受賞授業名

分子病態学 (医学科 3 年生)

2. 授業の概要

この講義では、私達の体の中で起こっている様々な生化学反応や代謝経路を学ぶ。その中で、どの反応系がどのように破綻することが病気を引き起こしているのかについて学習し、そのような異常代謝に基づく疾患の診断法や治療法についてもその原理から学び、将来の臨床現場での早期診断、治療に役立つ基礎知識を身につける。また、病気がいかに引き起こされるのかを分子レベルで考えることの重要性を認識してもらう。

3. 授業で特に工夫をしている点

授業プリントは、教科書の中で最低限必要な重要情報のみをエッセンス化し、当日用いるパワーポイント資料を配布している。それらに学生達が自由に書き込みを入れることで、教科書を復習する際に役立つ手引き書になるように構成している。また、講義の中では、授業内容に関連した実生活のエピソードをおもしろおかしく紹介し、聴講中に飽きが来ないようにしている。講義の合間には学生を指名し、意見を述べさせることで考察力を身につけさせるように心がけている。

4. 授業で学生に接する場合に留意している点

自分自身が学生だった頃の授業ノートなどを参考に、全く新規に学ぶ内容をどのようにかみ砕いて説明してあげれば理解しやすいのかを常に気をつけている。また、講義は聴き取りやすいように大きな声でハキハキとゆっくり話し、常に学生に視線を送り、対話形式の講義になるようにしている。

5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

講義の中で紹介する授業内容に関連した雑談が学生に面白いと受け入れられている点。講義プリントが学生にとって、復習をする際に適した教材と考えられている点。

ー医学部保健学科推薦ー

内田 陽子 (うちだ ようこ) : 保健学研究科 看護学講座 准教授

1. 受賞授業名

学修原論, 成人老年看護学総論, 生涯人間発達学, 老年看護学方法, 老年看護学方法論演習, 老年看護学実習, チームワーク実習, 高齢者ケアシステム論

2. 授業の概要

学修原論では「いつまでもいきいきと老いとうまく生きる」というテーマで、文献や実際の模範高齢者の人生や健康法について授業している。成人老年看護学総論では、わが国の人口動態や家族形態、死亡率や疾病構造、加齢に伴う身体的特徴、老人期の成長発達課題、介護保険法等の保健施策について、生涯人間発達学では、ライフサイクルにおける老人期の意義と課題、身体心理面の発達と衰退、死について教授している。老年看護学方法や老年看護学方法論演習では、高齢者に対する看護方法や看護アセスメント、看護過程について展開している。老年看護学実習では、一人の高齢者を受け持ち、自分でアセスメン

ト、診断、プラン、評価までを実施する能力を身につけるための、ケア現場での授業展開。チームワーク実習では高齢者ケアを取り巻く各職種間のチームワークを学ぶための現地での授業。高齢者ケアシステム論では、多様な様式を取り入れているケアサービスの見学やマイケアプランの立案を行っている。(実習も実習場の人的・物的な面を含めて、教材として捉え、授業を教師が展開していると考えている)。

3. 授業で特に工夫をしている点

核家族により、高齢者と接することの少ない学生に対して、高齢者模擬体験や高齢者のライフレビューインタビュー発表会、おむつ体験、先駆的な高齢者ケアを実践している地域密着型サービスの見学等、あらゆる教育方法、教材の工夫をしている。また、高齢者アクター導入や自ら高齢者に扮して演劇を行い、エキスパート看護師の役にもなって、模範の看護の実演も披露する。看護は実践の科学である。既存の理論や技術を資料やパワーポイントで紹介することに始終することなく、伝統的なスタイルである、教科書での説明、板書、実演を重視している。また、ケア現場の体験も具体的に演じて、学生にイメージできるように働きかけている。また、認知症高齢者の映像をみせて、具体的にアセスメント解説して、学生を納得させている。

4. 授業で学生に接する場合に留意している点

一方的に教師が話すのではなく、学生の反応をみながら授業を展開している。学生のいきいきした表情を確認し、興味をもっているか、わかっているか、絶えず、評価しながら、こちらの教育方法も話題もそれに応じて変えている。相互作用で発展する授業をめざしている。また、学生のことが大好きなので、こちらから愛情をもって、声をかけている。

5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

苦しく大変な看護をいかに奥深く探求の意義があるか、価値があるか、それを楽しく、おもしろく、明るく、いきいきとわかりやすく、熱意をこめて行っているためと思う。

ー工学部推薦ー

荘司 郁夫 (しょうじ いくお) : 理工学研究院 知能機械創製部門 教授

1. 受賞授業名

機械材料Ⅰ, 機械材料Ⅱ, 機械の力学 (学習原論), 機械システム工作実習Ⅱ, 機械システム工学実験Ⅰ・Ⅱ, 材料設計工学特論

2. 授業の概要

機械材料Ⅰ : 機械材料の基本特性・本質と、機械の設計や運用において最適な材料選定を行うための基礎知識を講義する。

機械材料Ⅱ : 鉄鋼材料を対象に、ミクロ組織と材料の強化機構との関係を講述し、組織制御のための熱処理、耐食性改善手法、鋼材種について講義する。

機械の力学 : 「クレーンコンテスト」担当。定型画用紙からクレーンを作成し、耐荷重を競う創生科目である。力学, 材料力学の知識を応用して設計するよう指導し, 1号機と設計変更を行った2号機の成果を評価している。

機械システム工作実習Ⅱ : 「熱処理と塑性加工」担当。鋼の熱処理とアルミニウム合金の圧延を実習させ, 各処理による材料の機械的特性変化を調査し, その理由を考察させる。

機械システム工学実験Ⅰ・Ⅱ : 「硬度と金属組織」担当。金属材料の硬さ測定法を修得させる。

時効硬化アルミニウム合金，鉄鋼材料の溶接部の硬さを測定させ，その変化原因について金属組織学的見地より考察させる。

材料設計工学特論：機械材料の製造・加工時に起こる物理現象について解説し，材料物性を出現させるミクロ組織の形成機構を説明する。機械設計のための材料選定法について，理論及び工学の立場から解説する。

3. 授業で特に工夫をしている点

授業評価アンケートの指摘・要望を検討し，学生にとってわかりやすい授業を実施できるよう心がけている。多くの授業を実施する機会に恵まれたので，各科目間でのつながりを考慮したカリキュラムを編成した。講義科目，実習，演習，実験科目を有機的に結びつけることにより，座学だけではなく，実習系科目も活用することにより理解度を高めている。

教科書的な内容に留めることなく，実際の工業製品を意識させるよう，授業内容，試験内容を工夫している。例えば，合金状態図の演習では，教科書的な模式図ではなく，一人一人異なる実用合金の状態図を読ませている。

Power Point による授業であるが，始めに一度説明後，写し終わった頃を見計らって再度説明している。説明が難解になりがちな内容は，図を含むカラー資料を配布して説明している。授業内容の理解度を深めるために，授業中に演習を実施し，小テスト，レポートなどは，基本的に翌週の授業時に返却し，間違いが多かった箇所については，追加説明を行い，忘れないうちに復習できるよう配慮している。

4. 授業で学生に接する場合に留意している点

できるだけ学生の反応を見ながら授業を進めるようにしている。板書が終わっているか，説明内容を理解できているか等注意するよう心掛けている。演習中は，学生の進行具合を巡回して見て，適宜，間違い箇所の指摘，追加説明等を行っている。

講義時間ぎりぎりまで授業を行わず，たとえ 5 分程度でも，質問ができる時間帯を設けている。移動時間を要する時間帯では，この配慮が有効なようである。

5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

授業評価では，わかりやすい授業，効果的な追加資料の配布，適切な演習の実施が高評価を受けている。複数の授業を関連性を高めて展開したため，印象が残ったのではないかと思う。また，機械システム工学科の場合，入学時はエンジンやロボットに興味を持つ学生が多く，材料系の研究室を志望させるためには，授業を通して機械材料の重要性および面白さを学生に丁寧に伝える必要がある。材料系担当の先生方の熱意が伝わった結果ではないかと思う。

外山 吉治（とやま よしはる）：理工学研究院 分子化学部門 准教授

1. 受賞授業名

生物物理学 I

2. 授業の概要

生体材料の多くは単純な溶液ではなく，微粒子が液体中に分散したコロイドである。コロイド及び界面の化学はバイオサイエンスや最先端のナノテクノロジーの基盤となる学問であり，本講義ではその基本と産業分野での応用技術について学ぶ。具体的な内容は，表

面とコロイドの基礎として、表面張力や表面への物質の吸着、界面活性剤の影響、さらにコロイドの分散安定性や表面の電氣的性質について解説する。

3. 授業で特に工夫をしている点

担当している授業科目は、物理化学をその基礎としている。当学科の多くの学生は、物理学にアレルギーを持つ学生も多く、物理学イコール難しい式が沢山出てくる学問という先入観を持っている。先ずは、この先入観をどう払拭するかを考えなければならない。当然この種の科目において、厳密な理解を得るためには、数式を全く使わずに説明することは不可能であるが、厳密性のある程度犠牲にしてもなるべく現象をイメージで捉えられる様に、絵図を多用している。講義の後は、5分程度の質問の時間を設けている。

4. 授業で学生に接する場合に留意している点

決して感情的にならず、穏やかに接することを心掛けている。これは学生がためらうことなく質問できる雰囲気を作るためである。せっかく授業の後に質問の時間を設けても、この雰囲気がないと無駄になってしまう。

5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

自分自身がかつて劣等生だったことから、授業についていけないと感じる学生や学習意欲をなくす学生の気持ちが良く分かるからではないだろうか。もう一つは、出来るだけ数式を減らしイメージ作りで理解を図ったことではないかと理解している。

弓仲 康史 (ゆみなか やすし) : 理工学研究院 電子情報部門 准教授

1. 受賞授業名

計算機工学 (工学部電気電子工学科 3 年前期)

2. 授業の概要

情報通信技術 (ICT) の基盤技術となるディジタル回路設計および計算機アーキテクチャの基礎に関する講義。特に、「講義の到達目標の明確化」、「講義内容と実製品との関連」を常に意識した学生主体の講義展開を特徴としている。

3. 授業で特に工夫をしている点

携帯電話、コンピュータ等の情報通信機器の進展は、現在の高度情報化社会を支え、豊かで快適な生活を可能としている。学生はこれらの機器の「使い方」は得意であるが、どのような原理で動作しているか等の技術理解が不足している場合が多い。これらの技術内容を知りたいという学生のニーズとは対照的に、当該分野は技術革新のスピードが速く、教科書ではフォローできない内容も多く含むため、最新技術動向を交えた up-to-date な講義展開が必須となる。本講義では、以下のような「学生の視線」に立った講義構成を工夫している。

(1) 講義の冒頭で当日の講義の内容、到達目標を明確に提示し、講義の最後に小テスト等で各自に達成度を再確認させている。例えば、「本日の講義を真面目に聞いていると、1 時間後には電卓の足し算部分のハードウェアが設計できるようになります」と宣言し、本日の講義の目標、修得可能なスキルを明確化する。これにより、講義への集中度を高めると共に、講義終了後に「講義前は出来なかったことが出来るようになった」という充実感と次回の講義への期待感を持たせることが可能となる。

(2) 基盤技術を確実に理解させつつ、講義で扱っている数式、基礎技術がどのような製

品に活用されているかという具体的な事例を示し、最新技術動向を交えながら、学生の講義内容に対する勉学のモチベーションを向上させるきっかけ作りを常に意識している。例えば、Suica カードを見せながら、「IC カードには電池がないのに、なぜ、情報を記憶し、運賃等のデータのやりとりができるのだろうか？」と問いかけ、興味を持たせた後に、電磁誘導による発電の原理・低消費電力回路技術・高効率な通信技術等の関連技術の解説を行い講義内容と実製品との関係を紹介する。

4. 授業で学生に接する場合に留意している点

勉学意欲、理解能力に差がある学生が同じ講義を受講することによる講義レベルの低下を、学生の質の低下ととらえるのではなく、学生の多様化ととらえ、出口管理として全ての学生に最低限の共通な技術を修得させることに留意している。さらに、社会人マナーおよび持続可能な社会の実現に向けた技術者としての倫理なども講義し、卒業までに、社会が要請する「就業力」、「社会人基礎力」を学生に付与させることを目標とし、学生に接している。

また、学生の視点に立ち、学生が講義に何を求めているか、どのような能力の修得を期待しているかを常に意識すると共に、授業評価の的確なフィードバックによる継続的な授業の改善を重視している。学生が「大学は学ぶことを学ぶ場所」であることの重要性に自ら気づくことを目的とし、現在の情報に満ちた学生に対し、ただ教えるだけの講義ではなく、彼ら、彼女らの知的好奇心を高揚させ、インスピレーションを刺激するような講義を心がけている。ドラスティックな講義の改善ではなく、ちょっとした工夫と心がけで講義の雰囲気、効果が劇的に変化の様子が非常に興味深い。

5. ベストティーチャー賞を受賞した理由として思い当たる点

手元のスマートフォンのインターネット検索であらゆる情報が瞬時に得られる現在、教科書を丸写しする旧態依然の講義に学生が出席意義を感じ、持続的な知的刺激が得られるのか？教員の情熱、創意工夫が感じられ、毎回、自分の修得スキルが増え、教員と学生の知的交流が可能な授業を期待しているのでは？と常に学生の立場で講義の工夫、改善を柔軟に行い、学生と教員が共同で、効果的な講義を作り上げていく PDCA サイクルを講義に導入している。

これらの工夫点の中で、授業評価の結果を見ると、「講義内容と実製品との関連」、「講義の到達目標の明確化」を常に意識し、身近な製品に関連する技術内容の解説を行い講義内容の興味を持続させつつ、関連問題を多数解かせながら各自の達成度の把握を実施した点、および、より難しいことを知りたいという知的好奇心、学習意欲を自発的に創出させることを意識した講義スタイルが学生に受け入れられたものと思われる。

また、現在参画している群馬アナログナレッジ養成拠点形成事業の社会人対象の実践的講義内容、および理工学部1年生対象に担当している就業力育成支援事業の「キャリア計画」、「キャリア設計」の講義内容であるキャリア教育の視点等を積極的に講義にフィードバックしている点も評価されたのではないかと考えられる。

ベストティーチャー賞受賞者のプロフィール

藤井 正希（ふじい まさき）：社会情報学部 情報社会科学講座 講師

1965 年，群馬県伊勢崎市の生まれ。早稲田大学社会科学部卒業。早稲田大学大学院法学研究科修士課程修了。早稲田大学大学院社会科学研究科博士課程満期退学。修士（法学）。博士（学術）。博士論文の論題は「マスコミ規制の論理—憲法学を中心とした学際的考察」。専門は憲法学。著書として『プライム法学・憲法』（共著。敬文堂）
清和大学法学部非常勤講師，群馬大学工学部非常勤講師を経て，2011 年 10 月より群馬大学社会情報学部専任講師。

渡辺 秀司（わたなべ しゅうじ）：理工学研究院 理工学基礎部門 教授

群馬大学 理工学研究院 数理科学教室 教授（荒牧キャンパス）
1988 年 名古屋大学大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学。1989 年 理学博士（名古屋大学）。その後，京都大学数理解析研究所，豊田工業高等専門学校数学教室，愛知工科大学，群馬大学工学部共通講座数学教室，群馬大学大学院工学研究科数理科学教室を経て，2013 年より現職。

専門は数学解析学。最近は，数学解析学的手法による超伝導の研究や，数学解析学的手法による素粒子物理学におけるカイラル対称性の自発的破れやクォークの閉じ込めなどの研究に従事。

主な著書は，Analytic Extension Formulas and their Applications, Kluwer Academic Publishers, 2001（分担執筆）など。主な論文は，S. Watanabe, An embedding theorem of Sobolev type for an operator with singularity, Proc. Amer. Math. Soc. 125 (1997), 839-848（単名論文）, S. Watanabe, The solution to the BCS gap equation and the second-order phase transition in superconductivity, J. Math. Anal. Appl. 383 (2011), 353-364（単名論文）など。

斎藤 理生（さいとう まさお）：教育学部 国語教育講座 准教授

1975 年生まれ。1998 年，大阪大学文学部文学科国文学専攻卒業。2004 年，大阪大学大学院文学研究科博士後期課程文化表現論専攻修了。博士（文学）。大阪大学非常勤講師等を経て，2006 年より群馬大学教育学部講師。

現在，同准教授。2008 年と 2011 年にベストティーチャー賞優秀賞をいただく。専門は日本近現代文学，特に太宰治の研究。近刊『太宰治の小説の〈笑い〉』（双文社出版）。

江森 英世（えもり ひでよ）：教育学部 数学教育講座 教授

1959 年東京都生まれ。埼玉県立高校の教員を 6 年間，その後同職を退職して，筑波大学大学院博士課程教育学研究科にて数学教育学を学ぶ。関東学院大学工学部助教授，宇都宮大学教育学部助教授，群馬大学教育学部准教授を経て，2009 年 4 月より現職。タイ王国コンケン大学客員教授。博士（教育学）。専門は数学的コミュニケーション論。著書に「数学学習におけるコミュニケーション連鎖の研究（風間書房，2006）」，「算数・数学授業のた

めの数学的コミュニケーション論序説（明治図書，2012）」がある。社会的活動として，文部科学省学習指導要領改訂協力者会議委員（中学校数学：平成 18.7～平成 22.3），全国附属学校連盟副理事長（平成 24.4～）がある。数学的コミュニケーション論という新しい研究領域を開拓した功績が認められ，2010 年 1 月に出版された The Marquis Who's Who in the world 27th Edition, 2010 (p.743): Marquis Who's Who LLC, New Jersey, U.S.A. に biographee として選考される(2011～2013)。2007 年 5 月，第 1 回群馬大学ベストティーチャー賞最優秀賞受賞。2010 年 5 月，第 4 回群馬大学ベストティーチャー賞優秀賞受賞。

三國 正樹（みくに まさき）：教育学部 音楽教育講座 教授

1958 年，新潟県柏崎市生まれ。東京芸術大学音楽学部大学院博士後期課程単位取得退学。東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校，愛知県立芸術大学，各非常勤講師等を経て 1996 年，群馬大学教育学部助教授として赴任。現在，同教授。専門は器楽（ピアノ）。

水野 裕司（みずの ゆうじ）：医学部附属病院 神経内科 講師

1961 年 5 月 静岡県浜松市生まれ，浜松北高校出身（サックス奏者の須川展也とは高 3 の時のクラスメイト），1987 年 3 月 群馬大学医学部卒業，1991 年 6 月 01994 年 5 月 国立精神・神経センター 神経研究所 流動研究員 筋ジストロフィーの研究，1998 年 9 月 02001 年 3 月 Harvard 大学 Boston 小児病院 遺伝学教室 博士研究員 筋ジストロフィーの研究，帰国後より群馬大学医学部神経内科勤務，専門は臨床神経学，特に筋ジストロフィーの病態解明の研究，筋萎縮性側索硬化症の病理学的研究

柴崎 貢志（しばぎき こうじ）：

医学系研究科 脳神経発達統御学講座 分子細胞生物学 准教授

1971 年福岡県北九州市生まれ。1997 年 九州大学大学院農学研究科生命機能科学専攻修了，2001 年 総合研究大学院大学生命科学研究科生理科学専攻（生理学研究所）修了（理学博士 取得）。米国ロチェスター大学医学部留学，生理学研究所助教を経て，2009 年群馬大学大学院医学系研究科着任。現在，准教授。

内田 陽子（うちだ ようこ）：保健学研究科 看護学講座 准教授

1963 年 広島県広島市生まれ。岡山赤十字看護専門学校，日本赤十字看護大学特別研究生，関東学園大学（経営学士）卒業。東京医科歯科大学大学院（看護学修士・博士）修了。看護師を経験した後，看護教員になる。専門は老年看護学。病院，施設，在宅，地域と場を問わず，現地に足を運び，理論を実践して検証につとめている。

荘司 郁夫（しょうじ いくお）：理工学研究院 知能機械創製部門 教授

1967 年，埼玉県行田市生まれ。1990 年京都大学工学部金属加工学科卒業，1992 年京都大学大学院工学研究科修士課程修了，同年日本アイ・ビー・エム株式会社野洲研究所入社。

日本アイ・ビー・エム在籍中の1998年に大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。博士（工学）。2000年に群馬大学工学部に助手として赴任。オープン大学(イギリス)客員研究員(2002年)を経て、現在は教授。専門は金属組織学。

外山 吉治（とやま よしはる）：理工学研究院 分子化学部門 准教授

1959年桐生市生まれ。桐生高校から北海道大学理学部を卒業後、栄研化学株式会社に入社。同社を退社、群馬大学大学院工学研究科修士課程、同博士課程を退学後、群馬大学工学部助手に赴任。1994年博士（工学）を取得し、現在同准教授。

弓仲 康史（ゆみなか やすし）：理工学研究院 電子情報部門 准教授

1968年、茨城県勝田市（現ひたちなか市）の生まれ。1990年東北大学工学部電子工学科卒業、1995年東北大学大学院工学研究科電子工学専攻博士後期課程修了。博士（工学）。群馬大学工学部助手、講師を経て、現在、同大学理工学研究院電子情報部門准教授。アナログ・デジタル信号処理・集積回路、多値情報処理に基づく新概念の情報処理、および通信・画像処理応用システム等に関する研究に従事している。

平成 24 年度教養教育ベストティーチャーによる公開授業開催について

平成 24 年度教養教育ベストティーチャー優秀賞を受賞された先生方の、公開授業を下記のとおり実施します。

各学部・研究科の教職員・学生の皆さんの参加を歓迎します。

記

教 員 名	授 業 題 目	日 時	教 室
藤井 正希 (社会情報学部・講師)	日本国憲法	10 月 10 日(木)3-4 時限 10 月 17 日(木)3-4 時限	教養教育棟 GB155
渡辺 秀司 (理工学研究院・教授)	微分積分学Ⅱ 線形代数学Ⅱ	10 月 21 日(月)7-8 時限 10 月 24 日(木)7-8 時限	教養教育棟 GA302
斎藤 理生 (教育学部・准教授)	日本近現代文学 を読む	10 月 8 日(火)7-8 時限 10 月 15 日(火)7-8 時限	教養教育棟 GC218

※ 教室の入口に受付を用意しますので、受付名簿に記載の上、入室してください。

主催：教育基盤センター

授業評価質問票 (学びのリテラシー試行科目)

この授業評価の結果が、あなたの成績に影響することは全くありません。授業を受けて感じたことをそのまま回答してください。各質問に対する答えを選択肢から選び、□の中にV印を付してください。

A. あなたの所属学部等についてお尋ねします。

- ☐ 1 教育学部
☐ 2 社会情報学部
☐ 医学部 (☐ 3 医学科 ☐ 4 保健学科)
☐ 工学部 (☐ 5 昼間コース ☐ 6 夜間主コース)

B. あなたが本年度受講した「学びのリテラシー試行科目」の授業についてお尋ねします。

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
	1	2	3	4
(1) この授業によって論理的思考力を身につけることができた。	☐	☐	☐	☐
(2) この授業によってコミュニケーション能力を身につけることができた。	☐	☐	☐	☐
(3) この授業によって日本語の能力を高めることができた。	☐	☐	☐	☐
(4) この授業で報告の仕方やレポートの書き方を修得できた。	☐	☐	☐	☐
(5) この授業で情報収集や引用の方法について学ぶことができた。	☐	☐	☐	☐
(6) この授業で大学での学習方法を修得できた。	☐	☐	☐	☐
(7) 学生の興味・学力・理解度に配慮した授業内容であった。	☐	☐	☐	☐
(8) 教室での討論は活発であった。	☐	☐	☐	☐
(9) 教員や他の学生とコミュニケーションをとる機会が多かった。	☐	☐	☐	☐
(10) 宿題(課題)の内容や量は適切であった。	☐	☐	☐	☐
(11) クラスの人数は適切であった。	☐	☐	☐	☐
(12) 学部の専門教育を学ぶために必要な授業内容であった。	☐	☐	☐	☐
(13) 自分はこの授業に積極的に取り組んだ。	☐	☐	☐	☐

C. その他、学びのリテラシー試行科目に関して、気付いた点、改善すべき点等を自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。

授業評価質問票（学部別科目）

この授業評価の結果が、あなたの成績に影響することは全くありません。授業を受けて感じたことをそのまま回答してください。各質問に対する答えを選択肢から選び、□の中に✓印を付してください。

A. あなたの所属学部等についてお尋ねします。

- ☐ 1 教育学部
 ☐ 2 社会情報学部
☐ 医学部 (☐ 3 医学科 ☐ 4 保健学科)
☐ 工学部 (☐ 5 昼間コース ☐ 6 夜間主コース)

B. あなたが今学期受講した「学部別科目」の授業についてお尋ねします。

	あてはまる	ややあてはまる	あてはまらない	あてはまらない
	1	2	3	4
(1) 学部学生にとって必要不可欠な教養科目としてふさわしい授業であった。	☐	☐	☐	☐
(2) 高校での履修内容への配慮が感じられる授業内容であった。	☐	☐	☐	☐
(3) 学部の専門教育との今後のつながりが期待できる授業内容であった。	☐	☐	☐	☐
(4) 学生の興味・学力・理解度に配慮した授業内容であった。	☐	☐	☐	☐
(5) シラバスの記述は授業の進行に沿った適切なものであった。	☐	☐	☐	☐
(6) 教員の教え方は、よく配慮されており適切なものであった。	☐	☐	☐	☐
(7) 出欠管理、成績評価基準など教員の学生への対応は適切であった。	☐	☐	☐	☐
(8) クラスの人数は適切であった。	☐	☐	☐	☐
(9) 教室の環境は適切であった。	☐	☐	☐	☐
(10) 実験またはグループ発表について：実験や発表の内容また進行のための設備や教員配置は適切であった。	☐	☐	☐	☐

C. その他、学部別科目の授業に関して、気付いた点、改善すべき点等を自由にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

授業評価質問票（学修原論）

この授業評価の結果が、あなたの成績に影響することは全くありません。授業を受けて感じたことをそのまま回答してください。各質問に対する答えを選択肢から選び、□の中に✓印を付してください。

A. あなたの所属学部等についてお尋ねします。

- ☐ 1 教育学部
☐ 2 社会情報学部
☐ 医学部 (☐ 3 医学科 ☐ 4 保健学科)
☐ 工学部 (☐ 5 昼間コース ☐ 6 夜間主コース)

B. あなたが今学期受講した「学部別科目」の授業についてお尋ねします。

	あてはまる	ややあてはまる	あてはまらない	あてはまらない
	1	2	3	4
(1) この授業は学修原論の趣旨にそった形態〈ゼミナール〉であった。	☐	☐	☐	☐
(2) 学生の興味・学力・理解度に配慮した授業内容であった。	☐	☐	☐	☐
(3) シラバスの記述は授業の進行に沿った適切なものであった。	☐	☐	☐	☐
(4) 教室での討論は活発であった。	☐	☐	☐	☐
(5) 教員や他の学生とコミュニケーションをとる機会が多かった。	☐	☐	☐	☐
(6) この授業で報告の仕方やレポートの書き方を修得できた。	☐	☐	☐	☐
(7) 出欠管理、成績評価基準など教員の学生への対応は適切であった。	☐	☐	☐	☐
(8) 希望した科目を選ぶことができた。	☐	☐	☐	☐
(9) クラスの人数は適切であった。	☐	☐	☐	☐
(10) 教室の環境は適切であった。	☐	☐	☐	☐

C. その他、学修原論の授業に関して、気付いた点、改善すべき点等を自由にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

以下のアンケートは、平成24年度の教養教育科目を履修した皆さんの、教養教育に対する評価や希望などを知り、今後の改善に活かすために実施するものです。
ご協力くださいますようお願いします。

教育基盤センター
教育推進部会

「教養教育」アンケート（24年度）

以下の質問項目について、回答の選択肢の中から該当する番号を選び、右の回答欄に記入ください。

回答欄

〔1〕 所属学部

1. 教育学部 2. 社会情報学部 3. 医学部医学科 4. 医学部保健学科
5. 工学部(昼) 6. 工学部(夜)

1

〔2〕 教養教育のカリキュラム(授業科目のメニュー、時間割、授業内容)について
どう感じましたか。

1. とてもよかった 2. まあよかった 3. どちらともいえない
4. あまりいいとはいえない 5. わるい

2

〔3〕 教養教育における教員の授業の教え方について、全体的にみてどう感じましたか。

1. とてもよかった 2. まあよかった 3. どちらともいえない
4. あまりいいとはいえない 5. わるい

3

〔4〕 事務窓口の対応や、その他の学生支援体制についてはどう感じましたか。

1. とてもよかった 2. まあよかった 3. どちらともいえない
4. あまりいいとはいえない 5. わるい

4

〔5〕 授業を選択するとき、シラバスはよく利用しましたか。

1. 授業の内容や進度の確認などに学期中何度も見た
2. 履修届を提出するときなどには参考にした
3. ほとんど見なかった
4. 一度も見なかった

5

〔6〕 入学時に配付した教養教育の「授業案内」「履修手引」等は役立ちましたか。

1. 大変役に立った 2. 少し役に立った 3. どちらともいえない
4. あまり役に立たなかった 5. 役に立たなかった

6

〔7〕 総合的に考えて、本学の教養教育に満足していますか。

1. 大変満足している 2. 少し満足している 3. どちらともいえない
4. あまり満足していない 5. 満足していない

7

裏面につづく

本学の教養教育は、大きく分けて次の〔８〕－〔１７〕のような１０分野に分かれます。
〔８〕－〔１７〕のそれぞれについて、履修してみてくださいか。選択肢を次の５つの中から選び、該当する番号を各項目の右の回答欄に記入してください。

- １．とてもよかった ２．まあよかった ３．どちらともいえない
４．あまり意味がなかった ５．ほとんど意味がなかった

〔８〕 学修原論

少人数形式で行う授業。

科目名は、人間と文化を理解する、現代社会と歴史を考察する、数理と自然を考察する

8

〔９〕 総合科目

広い視点から総合的テーマで行う授業。

科目名は、人間理解と多文化共生、現代社会と環境問題、科学的世界と生命・健康、国際社会と地域社会、情報社会と技術、総合科目特別講義／演習

9

〔１０〕 情報処理

対象科目名は、情報処理入門

10

〔１１〕 健康科学

対象科目名は、健康学原論、健康・スポーツ科学

11

〔１２〕 語学

対象科目名は、英語

12

〔１３〕 語学

対象科目名は、フランス語、ドイツ語、中国語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、韓国語

13

〔１４〕 分野別科目（人文分野）

対象科目名は、哲学、倫理学、文学、心理学、歴史学、考古学、芸術

14

〔１５〕 分野別科目（社会分野）

対象科目名は、法学、日本国憲法、政治学、経済学、社会学、文化人類学、地理学、教育学

15

〔１６〕 分野別科目（自然分野）

対象科目名は、地球科学、生命科学、数理科学、物質科学

16

〔１７〕 学部別科目

学部ごとに決めている科目で、教育学部は「こどもと世界」、「日本国憲法」、社会情報学部は「情報社会論入門」、医学部、工学部は「数学」、「物理学」、「化学」、「生物学」、「地学」など

17

〔１８〕 本学の教養教育について希望、意見がありましたら、以下に記述ください。また、「ほとんど意味がなかった」などの回答をされた場合、その理由も記述ください。

平成24年度前期授業評価（学びのリテラシー）集計表

区 分	対象者数	提出者数	回収率(%)
教 育 学 部	75	73	97.3
社 会 情 報 学 部	36	33	91.7
医 学 部 医 学 科	－	－	－
医 学 部 保 健 学 科	43	44	102.3
工 学 部 昼 間 コース	－	－	－
工 学 部 夜 間 主 コース	－	－	－
合 計	154	150	97.4

質問1. この授業によって論理的思考力を身につけることができた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	38	52.1	33	45.2	2	2.7	0	0.0	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	20	60.6	12	36.4	1	3.0	0	0.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	7	15.9	21	47.7	13	29.5	3	6.8	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	65	43.3	66	44.0	16	10.7	3	2.0	150	100.0

質問2. この授業によってコミュニケーション能力を身につけることができた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	36	49.3	31	42.5	6	8.2	0	0.0	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	12	36.4	16	48.5	4	12.1	1	3.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	8	18.2	22	50.0	12	27.3	2	4.5	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	56	37.3	69	46.0	22	14.7	3	2.0	150	100.0

質問3. この授業によって日本語の能力を高めることができた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	31	42.5	37	50.7	4	5.5	1	1.4	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	15	45.5	15	45.5	3	9.1	0	0.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	6	13.6	18	40.9	17	38.6	3	6.8	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	52	34.7	70	46.7	24	16.0	4	2.7	150	100.0

質問4. この授業で報告の仕方やレポートの書き方を修得できた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	42	57.5	30	41.1	1	1.4	0	0.0	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	21	63.6	11	33.3	1	3.0	0	0.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	14	31.8	21	47.7	7	15.9	2	4.5	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	77	51.3	62	41.3	9	6.0	2	1.3	150	100.0

質問5. この授業で情報収集や引用の方法について学ぶことができた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	42	57.5	25	34.2	6	8.2	0	0.0	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	19	57.6	13	39.4	1	3.0	0	0.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	13	29.5	22	50.0	6	13.6	3	6.8	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	74	49.3	60	40.0	13	8.7	3	2.0	150	100.0

質問6. この授業で大学での学習方法を修得できた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	19	26.0	44	60.3	9	12.3	1	1.4	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	12	36.4	18	54.5	2	6.1	1	3.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	4	9.1	20	45.5	16	36.4	4	9.1	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	35	23.3	82	54.7	27	18.0	6	4.0	150	100.0

質問7. 学生の興味・学力・理解度に配慮した授業内容であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	34	46.6	31	42.5	8	11.0	0	0.0	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	17	51.5	15	45.5	1	3.0	0	0.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	4	9.1	18	40.9	14	31.8	8	18.2	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	55	36.7	64	42.7	23	15.3	8	5.3	150	100.0

質問8. 教室での討論は活発であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	39	53.4	29	39.7	5	6.8	0	0.0	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	8	24.2	16	48.5	8	24.2	1	3.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	1	2.3	3	6.8	27	61.4	9	20.5	4	9.1	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	1	0.7	50	33.3	72	48.0	22	14.7	5	3.3	150	100.0

質問9. 教員や他の学生とコミュニケーションをとる機会が多かった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	48	65.8	23	31.5	2	2.7	0	0.0	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	11	33.3	17	51.5	5	15.2	0	0.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	15	34.1	23	52.3	4	9.1	2	4.5	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	74	49.3	63	42.0	11	7.3	2	1.3	150	100.0

質問10. 宿題(課題)の内容や量は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	1.4	21	28.8	34	46.6	12	16.4	5	6.8	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	19	57.6	13	39.4	1	3.0	0	0.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	5	11.4	14	31.8	18	40.9	7	15.9	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	1	0.7	45	30.0	61	40.7	31	20.7	12	8.0	150	100.0

質問11. クラスの人数は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	1.4	55	75.3	16	21.9	1	1.4	0	0.0	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	20	60.6	12	36.4	0	0.0	1	3.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	17	38.6	22	50.0	2	4.5	3	6.8	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	1	0.7	92	61.3	50	33.3	3	2.0	4	2.7	150	100.0

質問12. 学部の特設教育を学ぶために必要な授業内容であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	43	58.9	27	37.0	3	4.1	0	0.0	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	15	45.5	15	45.5	2	6.1	1	3.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	6	13.6	12	27.3	16	36.4	10	22.7	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	64	42.7	54	36.0	21	14.0	11	7.3	150	100.0

質問13. 自分はこの授業に積極的に取り組んだ。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	43	58.9	29	39.7	1	1.4	0	0.0	73	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	19	57.6	13	39.4	1	3.0	0	0.0	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	1	2.3	5	11.4	25	56.8	9	20.5	4	9.1	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	1	0.7	67	44.7	67	44.7	11	7.3	4	2.7	150	100.0

【その他自由記述欄】

区 分	記入有り「1」		記入なし「0」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	23	31.5	50	68.5	73	100.0
社 会 情 報 学 部	7	21.2	26	78.8	33	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 保 健 学 科	9	20.5	35	79.5	44	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	39	26.0	111	74.0	150	100.0

平成24年度前期授業評価（学部別科目）集計表

区 分	対象者数	提出者数	回収率(%)
教 育 学 部	246	222	90.2
社 会 情 報 学 部	104	97	93.3
医 学 部 医 学 科	547	547	100.0
医 学 部 保 健 学 科	491	389	79.2
工 学 部 昼 間 コース	2,617	2,294	87.7
工 学 部 夜 間 主 コース	25	0	0.0
合 計	4,030	3,549	88.1

- 1 . . . あてあまる
- 2 . . . ややあてはまる
- 3 . . . あまりあてはまらない
- 4 . . . あてはまらない

質問1. 学部学生にとって必要不可欠な教養科目としてふさわしい授業であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	137	61.7	75	33.8	8	3.6	2	0.9	222	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	46	47.4	46	47.4	3	3.1	2	2.1	97	100.0
医 学 部 医 学 科	1	0.2	198	36.2	208	38.0	90	16.5	50	9.1	547	100.0
医 学 部 保 健 学 科	1	0.3	152	39.1	197	50.6	36	9.3	3	0.8	389	100.0
工 学 部 昼 間 コース	1	0.0	1,270	55.4	835	36.4	140	6.1	48	2.1	2,294	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	3	0.1	1,803	50.8	1,361	38.3	277	7.8	105	3.0	3,549	100.0

質問2. 高校での履修内容への配慮が感じられる授業内容であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	61	27.5	106	47.7	47	21.2	8	3.6	222	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	15	15.5	55	56.7	22	22.7	5	5.2	97	100.0
医 学 部 医 学 科	2	0.4	97	17.7	166	30.3	166	30.3	116	21.2	547	100.0
医 学 部 保 健 学 科	1	0.3	128	32.9	174	44.7	61	15.7	25	6.4	389	100.0
工 学 部 昼 間 コース	1	0.0	976	42.5	804	35.0	351	15.3	162	7.1	2,294	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	4	0.1	1,277	36.0	1,305	36.8	647	18.2	316	8.9	3,549	100.0

質問3. 学部の専門教育との今後のつながりが期待できる授業内容であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	104	46.8	83	37.4	31	14.0	4	1.8	222	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	40	41.2	48	49.5	7	7.2	2	2.1	97	100.0
医 学 部 医 学 科	2	0.4	175	32.0	187	34.2	132	24.1	51	9.3	547	100.0
医 学 部 保 健 学 科	1	0.3	109	28.0	208	53.5	66	17.0	5	1.3	389	100.0
工 学 部 昼 間 コース	4	0.2	986	43.0	984	42.9	260	11.3	60	2.6	2,294	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	7	0.2	1,414	39.8	1,510	42.5	496	14.0	122	3.4	3,549	100.0

質問4. 学生の興味・学力・理解度に配慮した授業内容であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	84	37.8	110	49.5	23	10.4	5	2.3	222	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	36	37.1	48	49.5	13	13.4	0	0.0	97	100.0
医 学 部 医 学 科	1	0.2	113	20.7	216	39.5	141	25.8	76	13.9	547	100.0
医 学 部 保 健 学 科	1	0.3	92	23.7	206	53.0	74	19.0	16	4.1	389	100.0
工 学 部 昼 間 コース	3	0.1	767	33.4	975	42.5	404	17.6	145	6.3	2,294	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	5	0.1	1,092	30.8	1,555	43.8	655	18.5	242	6.8	3,549	100.0

質問5. シラバスの記述は授業の進行に沿った適切なものであった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	112	50.5	97	43.7	12	5.4	1	0.5	222	100.0
社 会 情 報 学 部	1	1.0	51	52.6	39	40.2	6	6.2	0	0.0	97	100.0
医 学 部 医 学 科	9	1.6	151	27.6	285	52.1	81	14.8	21	3.8	547	100.0
医 学 部 保 健 学 科	4	1.0	116	29.8	228	58.6	38	9.8	3	0.8	389	100.0
工 学 部 昼 間 コース	13	0.6	888	38.7	1,111	48.4	224	9.8	58	2.5	2,294	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	27	0.8	1,318	37.1	1,760	49.6	361	10.2	83	2.3	3,549	100.0

質問6. 教員の教え方は、よく配慮されており適切なものであった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	88	39.6	107	48.2	25	11.3	2	0.9	222	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	45	46.4	38	39.2	13	13.4	1	1.0	97	100.0
医 学 部 医 学 科	1	0.2	121	22.1	243	44.4	122	22.3	60	11.0	547	100.0
医 学 部 保 健 学 科	1	0.3	122	31.4	192	49.4	57	14.7	17	4.4	389	100.0
工 学 部 昼 間 コース	3	0.1	867	37.8	928	40.5	341	14.9	155	6.8	2,294	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	5	0.1	1,243	35.0	1,508	42.5	558	15.7	235	6.6	3,549	100.0

質問7. 出欠管理、成績評価基準など教員の学生への対応は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	90	40.5	93	41.9	35	15.8	4	1.8	222	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	54	55.7	40	41.2	2	2.1	1	1.0	97	100.0
医 学 部 医 学 科	1	0.2	167	30.5	286	52.3	64	11.7	29	5.3	547	100.0
医 学 部 保 健 学 科	1	0.3	120	30.8	205	52.7	49	12.6	14	3.6	389	100.0
工 学 部 昼 間 コース	3	0.1	1,105	48.2	899	39.2	221	9.6	66	2.9	2,294	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	5	0.1	1,536	43.3	1,523	42.9	371	10.5	114	3.2	3,549	100.0

質問8. クラスの人数は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	115	51.8	90	40.5	15	6.8	2	0.9	222	100.0
社 会 情 報 学 部	1	1.0	56	57.7	30	30.9	8	8.2	2	2.1	97	100.0
医 学 部 医 学 科	1	0.2	246	45.0	251	45.9	43	7.9	6	1.1	547	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	152	39.1	205	52.7	25	6.4	7	1.8	389	100.0
工 学 部 昼 間 コース	5	0.2	1,179	51.4	875	38.1	183	8.0	52	2.3	2,294	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	7	0.2	1,748	49.3	1,451	40.9	274	7.7	69	1.9	3,549	100.0

質問9. 教室の環境は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.5	107	48.2	92	41.4	18	8.1	4	1.8	222	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	57	58.8	32	33.0	6	6.2	2	2.1	97	100.0
医 学 部 医 学 科	1	0.2	218	39.9	268	49.0	42	7.7	18	3.3	547	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	146	37.5	199	51.2	36	9.3	8	2.1	389	100.0
工 学 部 昼 間 コース	6	0.3	1,055	46.0	949	41.4	214	9.3	70	3.1	2,294	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	8	0.2	1,583	44.6	1,540	43.4	316	8.9	102	2.9	3,549	100.0

質問10. 実験またはグループ発表について:実験や発表の内容または進行のための設備や教員配置は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	18	8.1	63	28.4	99	44.6	29	13.1	13	5.9	222	100.0
社 会 情 報 学 部	1	1.0	54	55.7	35	36.1	7	7.2	0	0.0	97	100.0
医 学 部 医 学 科	45	8.2	147	26.9	247	45.2	68	12.4	40	7.3	547	100.0
医 学 部 保 健 学 科	77	19.8	78	20.1	160	41.1	50	12.9	24	6.2	389	100.0
工 学 部 昼 間 コース	386	16.8	624	27.2	824	35.9	267	11.6	193	8.4	2,294	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	527	14.8	966	27.2	1365	38.5	421	11.9	270	7.6	3,549	100.0

【その他自由記述欄】

区 分	記入有り「1」		記入なし「0」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	40	18.0	182	82.0	222	100.0
社 会 情 報 学 部	23	23.7	74	76.3	97	100.0
医 学 部 医 学 科	142	26.0	405	74.0	547	100.0
医 学 部 保 健 学 科	47	12.1	342	87.9	389	100.0
工 学 部 昼 間 コース	373	16.3	1,921	83.7	2,294	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	625	17.6	2,924	82.4	3,549	100.0

平成24年度前期授業評価（学修原論）集計表

区 分	対象者数	提出者数	回収率(%)
教 育 学 部	206	174	84.5
社 会 情 報 学 部	89	65	73.0
医 学 部 医 学 科	82	65	84.4
医 学 部 保 健 学 科	128	108	84.4
工 学 部 昼 間 コー ス	532	474	89.1
工 学 部 夜 間 主 コー ス	25	0	0.0
合 計	1,062	886	83.4

質問1. この授業は学修原論の趣旨にそった形態<ゼミナール>であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	2	1.1	140	80.5	26	14.9	6	3.4	0	0.0	174	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	54	83.1	11	16.9	0	0.0	0	0.0	65	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	39	60.0	24	36.9	2	3.1	0	0.0	65	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	78	72.2	30	27.8	0	0.0	0	0.0	108	100.0
工 学 部 昼 間 コース	2	0.4	257	54.2	160	33.8	38	8.0	17	3.6	474	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	4	0.5	568	64.1	251	28.3	46	5.2	17	1.9	886	100.0

質問2. 学生の興味・学力・理解度に配慮した授業内容であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	114	65.5	52	29.9	7	4.0	1	0.6	174	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	53	81.5	11	16.9	1	1.5	0	0.0	65	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	32	49.2	28	43.1	4	6.2	1	1.5	65	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	81	75.0	21	19.4	6	5.6	0	0.0	108	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	194	40.9	174	36.7	71	15.0	35	7.4	474	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	474	53.5	286	32.3	89	10.0	37	4.2	886	100.0

質問3. シラバスの記述は授業の進行に沿った適切なものであった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	2	1.1	111	63.8	55	31.6	6	3.4	0	0.0	174	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	48	73.8	17	26.2	0	0.0	0	0.0	65	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	28	43.1	33	50.8	4	6.2	0	0.0	65	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	71	65.7	36	33.3	1	0.9	0	0.0	108	100.0
工 学 部 昼 間 コース	2	0.4	192	40.5	227	47.9	33	7.0	20	4.2	474	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	4	0.5	450	50.8	368	41.5	44	5.0	20	2.3	886	100.0

質問4. 教室での討論は活発であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.6	61	35.1	70	40.2	36	20.7	6	3.4	174	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	30	46.2	23	35.4	11	16.9	1	1.5	65	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	6	9.2	20	30.8	25	38.5	14	21.5	65	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	43	39.8	42	38.9	19	17.6	4	3.7	108	100.0
工 学 部 昼 間 コース	2	0.4	102	21.5	164	34.6	134	28.3	72	15.2	474	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	3	0.3	242	27.3	319	36.0	225	25.4	97	10.9	886	100.0

質問5. 教員や他の学生とコミュニケーションをとる機会が多かった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.6	66	37.9	68	39.1	34	19.5	5	2.9	174	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	33	50.8	19	29.2	11	16.9	2	3.1	65	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	13	20.0	14	21.5	25	38.5	13	20.0	65	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	53	49.1	43	39.8	11	10.2	1	0.9	108	100.0
工 学 部 昼 間 コース	3	0.6	131	27.6	161	34.0	131	27.6	48	10.1	474	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	4	0.5	296	33.4	305	34.4	212	23.9	69	7.8	886	100.0

質問6. この授業で報告の仕方やレポートの書き方を修得できた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.6	82	47.1	58	33.3	25	14.4	8	4.6	174	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	30	46.2	22	33.8	10	15.4	3	4.6	65	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	9	13.8	15	23.1	24	36.9	17	26.2	65	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	49	45.4	45	41.7	12	11.1	2	1.9	108	100.0
工 学 部 昼 間 コース	2	0.4	145	30.6	228	48.1	71	15.0	28	5.9	474	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	3	0.3	315	35.6	368	41.5	142	16.0	58	6.5	886	100.0

質問7. 出欠管理、成績評価基準など教員の学生との対応は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	99	56.9	69	39.7	6	3.4	0	0.0	174	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	46	70.8	15	23.1	3	4.6	1	1.5	65	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	29	44.6	33	50.8	3	4.6	0	0.0	65	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	78	72.2	26	24.1	3	2.8	1	0.9	108	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	221	46.6	202	42.6	40	8.4	11	2.3	474	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	473	53.4	345	38.9	55	6.2	13	1.5	886	100.0

質問8. 希望した科目を選ぶことができた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	5	2.9	104	59.8	45	25.9	13	7.5	7	4.0	174	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	54	83.1	10	15.4	0	0.0	1	1.5	65	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	41	63.1	24	36.9	0	0.0	0	0.0	65	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	84	77.8	23	21.3	0	0.0	1	0.9	108	100.0
工 学 部 昼 間 コース	4	0.8	225	47.5	140	29.5	53	11.2	52	11.0	474	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	9	1.0	508	57.3	242	27.3	66	7.4	61	6.9	886	100.0

質問9. クラスの人数は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	2	1.1	130	74.7	40	23.0	2	1.1	0	0.0	174	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	54	83.1	11	16.9	0	0.0	0	0.0	65	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	35	53.8	27	41.5	3	4.6	0	0.0	65	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	87	80.6	20	18.5	1	0.9	0	0.0	108	100.0
工 学 部 昼 間 コース	2	0.4	224	47.3	178	37.6	47	9.9	23	4.9	474	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	4	0.5	530	59.8	276	31.2	53	6.0	23	2.6	886	100.0

質問10. 教室の環境は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.6	122	70.1	44	25.3	7	4.0	0	0.0	174	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	58	89.2	6	9.2	1	1.5	0	0.0	65	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	38	58.5	25	38.5	2	3.1	0	0.0	65	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	87	80.6	21	19.4	0	0.0	0	0.0	108	100.0
工 学 部 昼 間 コース	1	0.2	241	50.8	172	36.3	41	8.6	19	4.0	474	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	2	0.2	546	61.6	268	30.2	51	5.8	19	2.1	886	100.0

【その他自由記述欄】

区 分	記入有り「1」		記入なし「0」		合 計	
		%		%	人数	%
教 育 学 部	40	23.0	134	77.0	174	100.0
社 会 情 報 学 部	12	18.5	53	81.5	65	100.0
医 学 部 医 学 科	11	16.9	54	83.1	65	100.0
医 学 部 保 健 学 科	24	22.2	84	77.8	108	100.0
工 学 部 昼 間 コース	101	21.3	373	78.7	474	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	188	21.2	698	78.8	886	100.0

平成24年度後期授業評価（学びのリテラシー）集計表

区 分	対象者数	提出者数	回収率(%)
教 育 学 部	－	－	－
社 会 情 報 学 部	11	11	100.0
医 学 部 医 学 科	110	92	83.6
医 学 部 保 健 学 科	－	－	－
工 学 部 昼 間 コース	－	－	－
工 学 部 夜 間 主 コース	－	－	－
合 計	121	103	85.1

質問1. この授業によって論理的思考力を身につけることができた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	8	72.7	2	18.2	1	9.1	0	0.0	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	19	20.7	50	54.3	18	19.6	5	5.4	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	27	26.2	52	50.5	19	18.4	5	4.9	103	100.0

質問2. この授業によってコミュニケーション能力を身につけることができた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	2	18.2	8	72.7	1	9.1	0	0.0	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	14	15.2	40	43.5	29	31.5	9	9.8	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	16	15.5	48	46.6	30	29.1	9	8.7	103	100.0

質問3. この授業によって日本語の能力を高めることができた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	7	63.6	4	36.4	0	0.0	0	0.0	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	26	28.3	51	55.4	12	13.0	3	3.3	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	33	32.0	55	53.4	12	11.7	3	2.9	103	100.0

質問4. この授業で報告の仕方やレポートの書き方を修得できた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	7	63.6	4	36.4	0	0.0	0	0.0	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	34	37.0	48	52.2	9	9.8	1	1.1	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	41	39.8	52	50.5	9	8.7	1	1.0	103	100.0

質問5. この授業で情報収集や引用の方法について学ぶことができた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	5	45.5	5	45.5	1	9.1	0	0.0	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	44	47.8	40	43.5	8	8.7	0	0.0	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	49	47.6	45	43.7	9	8.7	0	0.0	103	100.0

質問6. この授業で大学での学習方法を修得できた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	3	27.3	7	63.6	1	9.1	0	0.0	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	14	15.2	44	47.8	27	29.3	7	7.6	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	17	16.5	51	49.5	28	27.2	7	6.8	103	100.0

質問7. 学生の興味・学力・理解度に配慮した授業内容であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	6	54.5	4	36.4	1	9.1	0	0.0	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	14	15.2	39	42.4	28	30.4	11	12.0	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	20	19.4	43	41.7	29	28.2	11	10.7	103	100.0

質問8. 教室での討論は活発であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	3	27.3	4	36.4	3	27.3	1	9.1	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	10	10.9	21	22.8	47	51.1	14	15.2	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	13	12.6	25	24.3	50	48.5	15	14.6	103	100.0

質問9. 教員や他の学生とコミュニケーションをとる機会が多かった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	7	63.6	4	36.4	0	0.0	0	0.0	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	17	18.5	33	35.9	32	34.8	10	10.9	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	24	23.3	37	35.9	32	31.1	10	9.7	103	100.0

質問10. 宿題(課題)の内容や量は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	8	72.7	3	27.3	0	0.0	0	0.0	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	12	13.0	37	40.2	30	32.6	13	14.1	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	20	19.4	40	38.8	30	29.1	13	12.6	103	100.0

質問11. クラスの人数は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	8	72.7	3	27.3	0	0.0	0	0.0	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	20	21.7	57	62.0	13	14.1	2	2.2	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	28	27.2	60	58.3	13	12.6	2	1.9	103	100.0

質問12. 学部の特設教育を学ぶために必要な授業内容であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	3	27.3	7	63.6	1	9.1	0	0.0	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	19	20.7	47	51.1	19	20.7	7	7.6	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	22	21.4	54	52.4	20	19.4	7	6.8	103	100.0

質問13. 自分はこの授業に積極的に取り組んだ。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	6	54.5	4	36.4	1	9.1	0	0.0	11	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	25	27.2	45	48.9	17	18.5	5	5.4	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	31	30.1	49	47.6	18	17.5	5	4.9	103	100.0

【その他自由記述欄】

区 分	記入有り「1」		記入なし「0」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0
社 会 情 報 学 部	1	9.1	10	90.9	11	100.0
医 学 部 医 学 科	6	6.5	86	93.5	92	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	7	6.8	96	93.2	103	100.0

平成24年度後期授業評価（学部別科目）集計表

区 分	対象者数	提出者数	回収率(%)
教 育 学 部	232	216	93.1
社 会 情 報 学 部	－	－	－
医 学 部 医 学 科	312	203	65.1
医 学 部 保 健 学 科	456	328	71.9
工 学 部 昼 間 コー ス	1,845	1,420	77.0
工 学 部 夜 間 主 コー ス	0	1	
合 計	2,845	2,168	76.2

質問1. 学部学生にとって必要不可欠な教養科目としてふさわしい授業であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.5	102	47.2	95	44.0	17	7.9	1	0.5	216	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 医 学 科	2	1.0	51	25.1	92	45.3	40	19.7	18	8.9	203	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	114	34.8	185	56.4	23	7.0	6	1.8	328	100.0
工 学 部 昼 間 コース	4	0.3	678	47.7	628	44.2	90	6.3	20	1.4	1420	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	1	100.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0
全 体	7	0.3	946	43.6	1000	46.1	170	7.8	45	2.1	2168	100.0

質問2. 高校での履修内容への配慮が感じられる授業内容であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	2	0.9	53	24.5	92	42.6	62	28.7	7	3.2	216	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 医 学 科	2	1.0	54	26.6	74	36.5	51	25.1	22	10.8	203	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	99	30.2	148	45.1	58	17.7	23	7.0	328	100.0
工 学 部 昼 間 コース	3	0.2	548	38.6	609	42.9	194	13.7	66	4.6	1420	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	1	100.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0
全 体	7	0.3	755	34.8	923	42.6	365	16.8	118	5.4	2168	100.0

質問3. 学部の専門教育との今後のつながりが期待できる授業内容であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.5	85	39.4	105	48.6	22	10.2	3	1.4	216	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 医 学 科	2	1.0	40	19.7	78	38.4	57	28.1	26	12.8	203	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	101	30.8	163	49.7	55	16.8	9	2.7	328	100.0
工 学 部 昼 間 コース	4	0.3	511	36.0	672	47.3	208	14.6	25	1.8	1420	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	1	100.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0
全 体	7	0.3	737	34.0	1019	47.0	342	15.8	63	2.9	2168	100.0

質問4. 学生の興味・学力・理解度に配慮した授業内容であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.5	78	36.1	108	50.0	26	12.0	3	1.4	216	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 医 学 科	2	1.0	40	19.7	93	45.8	45	22.2	23	11.3	203	100.0
医 学 部 保 健 学 科	1	0.3	87	26.5	151	46.0	70	21.3	19	5.8	328	100.0
工 学 部 昼 間 コース	6	0.4	459	32.3	670	47.2	227	16.0	58	4.1	1420	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	1	100.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0
全 体	10	0.5	664	30.6	1023	47.2	368	17.0	103	4.8	2168	100.0

質問5. シラバスの記述は授業の進行に沿った適切なものであった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.5	70	32.4	121	56.0	22	10.2	2	0.9	216	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 医 学 科	5	2.5	68	33.5	99	48.8	23	11.3	8	3.9	203	100.0
医 学 部 保 健 学 科	1	0.3	94	28.7	199	60.7	31	9.5	3	0.9	328	100.0
工 学 部 昼 間 コース	15	1.1	517	36.4	752	53.0	119	8.4	17	1.2	1420	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	1	100.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0
全 体	22	1.0	749	34.5	1172	54.1	195	9.0	30	1.4	2168	100.0

質問6. 教員の教え方は、よく配慮されており適切なものであった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.5	77	35.6	110	50.9	26	12.0	2	0.9	216	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 医 学 科	2	1.0	65	32.0	87	42.9	29	14.3	20	9.9	203	100.0
医 学 部 保 健 学 科	2	0.6	93	28.4	153	46.6	58	17.7	22	6.7	328	100.0
工 学 部 昼 間 コース	8	0.6	550	38.7	609	42.9	199	14.0	54	3.8	1420	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0	0	0.0	1	100.0
全 体	13	0.6	785	36.2	959	44.2	313	14.4	98	4.5	2168	100.0

質問7. 出欠管理、成績評価基準など教員の学生への対応は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.5	92	42.6	95	44.0	23	10.6	5	2.3	216	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 医 学 科	3	1.5	85	41.9	85	41.9	20	9.9	10	4.9	203	100.0
医 学 部 保 健 学 科	1	0.3	136	41.5	169	51.5	16	4.9	6	1.8	328	100.0
工 学 部 昼 間 コース	8	0.6	660	46.5	600	42.3	132	9.3	20	1.4	1420	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	1	100.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0
全 体	13	0.6	973	44.9	950	43.8	191	8.8	41	1.9	2168	100.0

質問8. クラスの人数は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.5	92	42.6	94	43.5	25	11.6	4	1.9	216	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 医 学 科	2	1.0	96	47.3	93	45.8	9	4.4	3	1.5	203	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	166	50.6	151	46.0	10	3.0	1	0.3	328	100.0
工 学 部 昼 間 コース	5	0.4	659	46.4	616	43.4	121	8.5	19	1.3	1420	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0	1	100.0
全 体	8	0.4	1013	46.7	954	44.0	165	7.6	28	1.3	2168	100.0

質問9. 教室の環境は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	1	0.5	95	44.0	95	44.0	24	11.1	1	0.5	216	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 医 学 科	2	1.0	80	39.4	99	48.8	16	7.9	6	3.0	203	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	162	49.4	150	45.7	15	4.6	1	0.3	328	100.0
工 学 部 昼 間 コース	9	0.6	596	42.0	679	47.8	114	8.0	22	1.5	1420	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0	1	100.0
全 体	12	0.6	933	43.0	1023	47.2	169	7.8	31	1.4	2168	100.0

質問10. 実験またはグループ発表について:実験や発表の内容または進行のための設備や教員配置は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	6	2.8	68	31.5	110	50.9	28	13.0	4	1.9	216	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 医 学 科	33	16.3	51	25.1	88	43.3	25	12.3	6	3.0	203	100.0
医 学 部 保 健 学 科	24	7.3	97	29.6	162	49.4	32	9.8	13	4.0	328	100.0
工 学 部 昼 間 コース	225	15.8	392	27.6	570	40.1	150	10.6	83	5.8	1420	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0	1	100.0
全 体	288	13.3	608	28.0	930	42.9	235	10.8	107	4.9	2168	100.0

【その他自由記述欄】

区 分	記入有り「1」		記入なし「0」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	14	6.5	202	93.5	216	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	0	0.0	0	0.0
医 学 部 医 学 科	48	23.6	155	76.4	203	100.0
医 学 部 保 健 学 科	31	9.5	297	90.5	328	100.0
工 学 部 昼 間 コース	138	9.7	1282	90.3	1420	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	1	100.0	1	100.0
全 体	231	10.7	1937	89.3	2168	100.0

平成24年度後期授業評価（学修原論）集計表

区 分	対象者数	提出者数	回収率(%)
教 育 学 部	124	70	56.5
社 会 情 報 学 部	59	49	83.1
医 学 部 医 学 科	12	12	100.0
医 学 部 保 健 学 科	129	110	85.3
工 学 部 昼 間 コー ス	121	88	72.7
工 学 部 夜 間 主 コー ス	－	－	－
合 計	445	329	73.9

質問1. この授業は学修原論の趣旨にそった形態<ゼミナール>であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	53	75.7	15	21.4	2	2.9	0	0.0	70	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	37	75.5	11	22.4	1	2.0	0	0.0	49	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	9	75.0	2	16.7	1	8.3	0	0.0	12	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	69	62.7	41	37.3	0	0.0	0	0.0	110	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	63	71.6	25	28.4	0	0.0	0	0.0	88	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	231	70.2	94	28.6	4	1.2	0	0.0	329	100.0

質問2. 学生の興味・学力・理解度に配慮した授業内容であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	50	71.4	17	24.3	3	4.3	0	0.0	70	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	32	65.3	12	24.5	4	8.2	1	2.0	49	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	8	66.7	2	16.7	1	8.3	1	8.3	12	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	62	56.4	46	41.8	2	1.8	0	0.0	110	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	59	67.0	24	27.3	5	5.7	0	0.0	88	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	211	64.1	101	30.7	15	4.6	2	0.6	329	100.0

質問3. シラバスの記述は授業の進行に沿った適切なものであった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	48	68.6	21	30.0	1	1.4	0	0.0	70	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	36	73.5	11	22.4	2	4.1	0	0.0	49	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	8	66.7	3	25.0	1	8.3	0	0.0	12	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	61	55.5	46	41.8	3	2.7	0	0.0	110	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	56	63.6	32	36.4	0	0.0	0	0.0	88	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	209	63.5	113	34.3	7	2.1	0	0.0	329	100.0

質問4. 教室での討論は活発であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	36	51.4	7	10.0	20	28.6	7	10.0	70	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	23	46.9	15	30.6	7	14.3	4	8.2	49	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	1	8.3	6	50.0	2	16.7	3	25.0	12	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	31	28.2	24	21.8	40	36.4	15	13.6	110	100.0
工 学 部 昼 間 コース	1	1.1	31	35.2	32	36.4	17	19.3	7	8.0	88	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	1	0.3	122	37.1	84	25.5	86	26.1	36	10.9	329	100.0

質問5. 教員や他の学生とコミュニケーションをとる機会が多かった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	42	60.0	12	17.1	12	17.1	4	5.7	70	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	28	57.1	15	30.6	3	6.1	3	6.1	49	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	3	25.0	6	50.0	2	16.7	1	8.3	12	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	35	31.8	20	18.2	47	42.7	8	7.3	110	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	41	46.6	28	31.8	16	18.2	3	3.4	88	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	149	45.3	81	24.6	80	24.3	19	5.8	329	100.0

質問6. この授業で報告の仕方やレポートの書き方を修得できた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	22	31.4	31	44.3	12	17.1	5	7.1	70	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	26	53.1	15	30.6	7	14.3	1	2.0	49	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	4	33.3	4	33.3	3	25.0	1	8.3	12	100.0
医 学 部 保 健 学 科	1	0.9	21	19.1	58	52.7	27	24.5	3	2.7	110	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	29	33.0	42	47.7	13	14.8	4	4.5	88	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	1	0.3	102	31.0	150	45.6	62	18.8	14	4.3	329	100.0

質問7. 出欠管理、成績評価基準など教員の学生への対応は適切であった。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	43	61.4	22	31.4	4	5.7	1	1.4	70	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	30	61.2	17	34.7	2	4.1	0	0.0	49	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	7	58.3	5	41.7	0	0.0	0	0.0	12	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	63	57.3	45	40.9	2	1.8	0	0.0	110	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	54	61.4	32	36.4	2	2.3	0	0.0	88	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	197	59.9	121	36.8	10	3.0	1	0.3	329	100.0

質問8. 希望した科目を選ぶことができた。

区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	46	65.7	20	28.6	4	5.7	0	0.0	70	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	37	75.5	12	24.5	0	0.0	0	0.0	49	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	9	75.0	3	25.0	0	0.0	0	0.0	12	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	78	70.9	31	28.2	1	0.9	0	0.0	110	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	62	70.5	20	22.7	5	5.7	1	1.1	88	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	232	70.5	86	26.1	10	3.0	1	0.3	329	100.0

質問9. クラスの人数は適切であった。

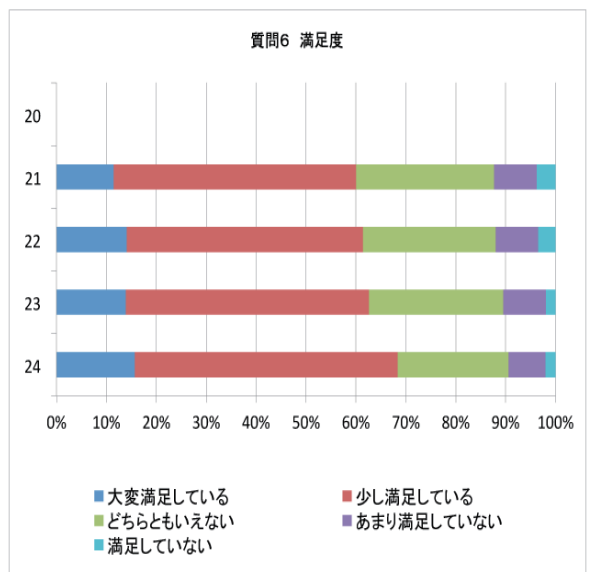
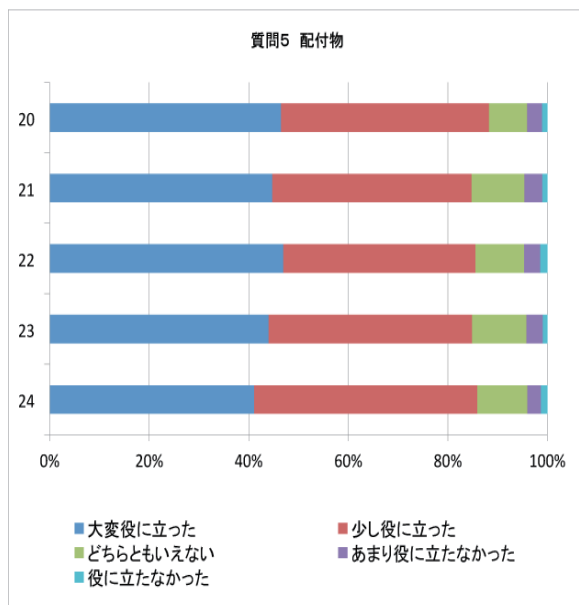
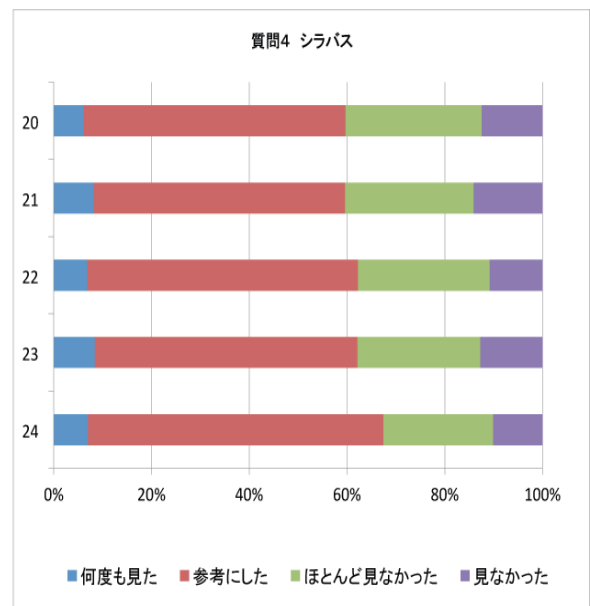
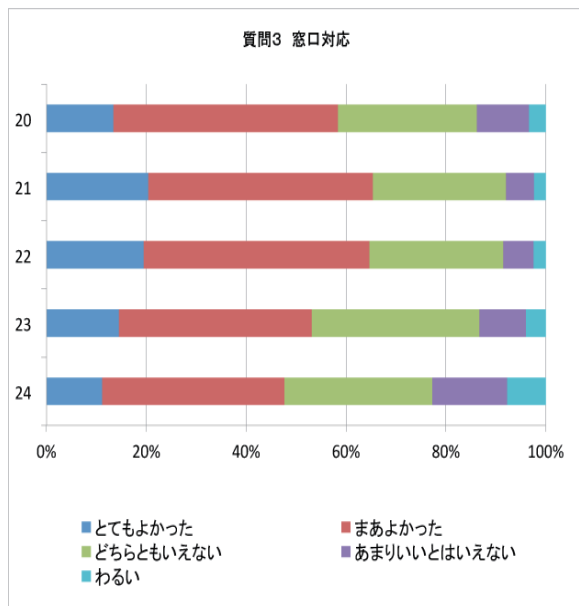
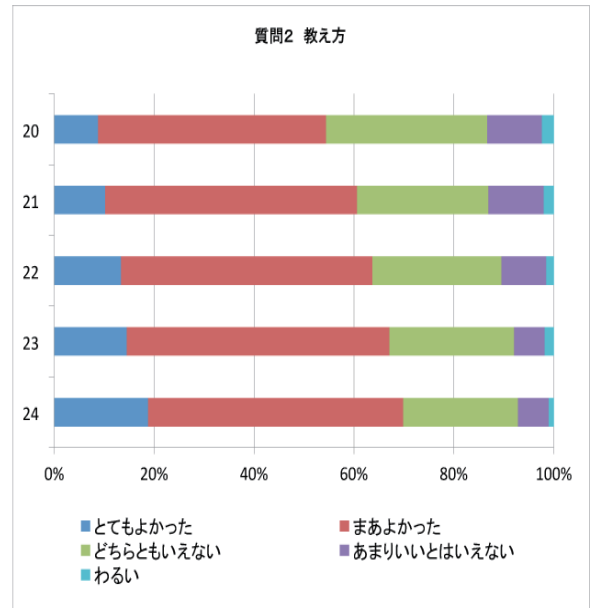
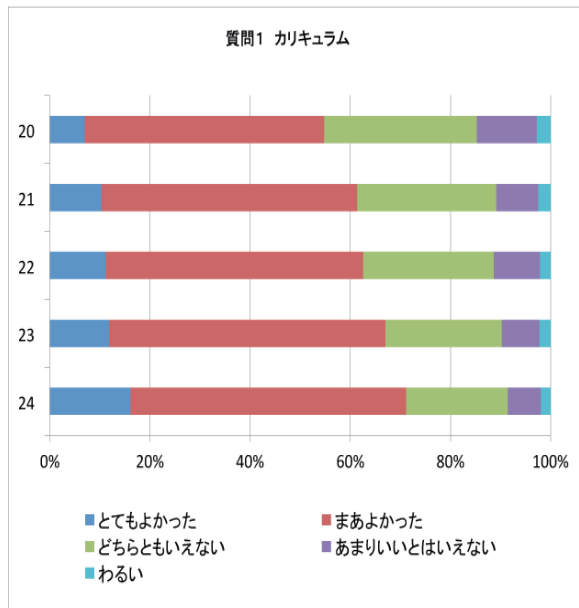
区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	50	71.4	16	22.9	4	5.7	0	0.0	70	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	37	75.5	9	18.4	2	4.1	1	2.0	49	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	7	58.3	3	25.0	2	16.7	0	0.0	12	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	74	67.3	35	31.8	1	0.9	0	0.0	110	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	58	65.9	22	25.0	8	9.1	0	0.0	88	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	226	68.7	85	25.8	17	5.2	1	0.3	329	100.0

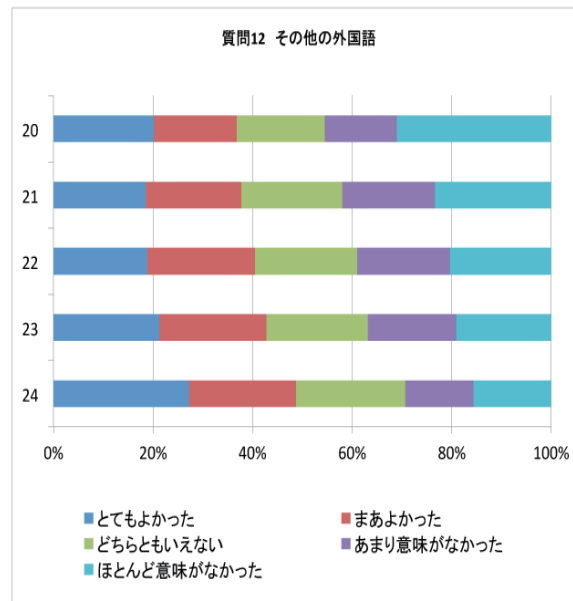
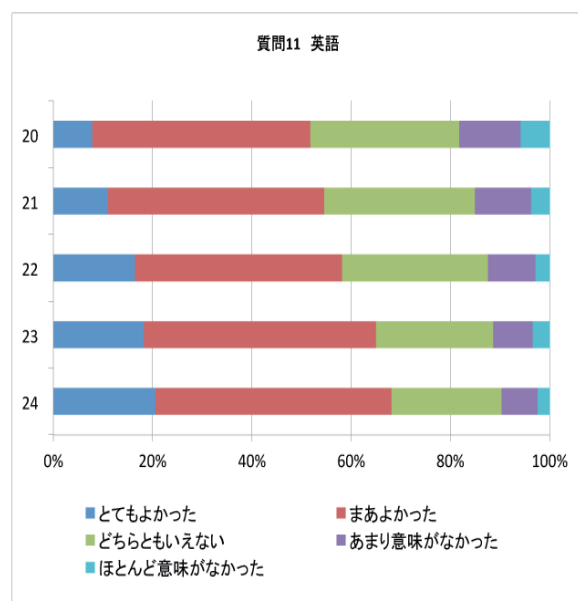
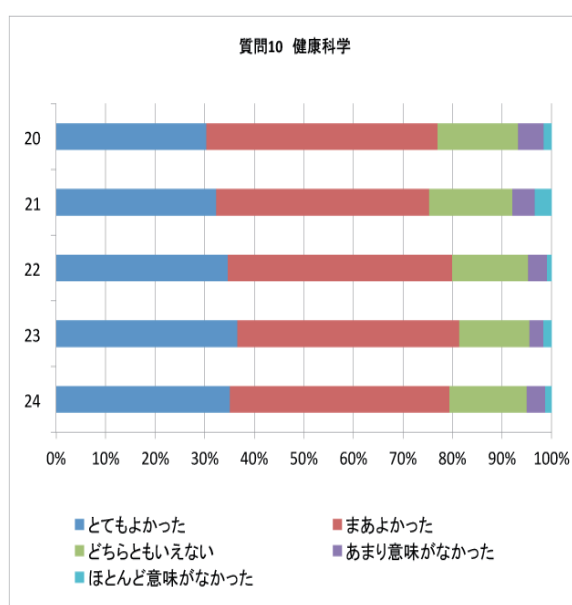
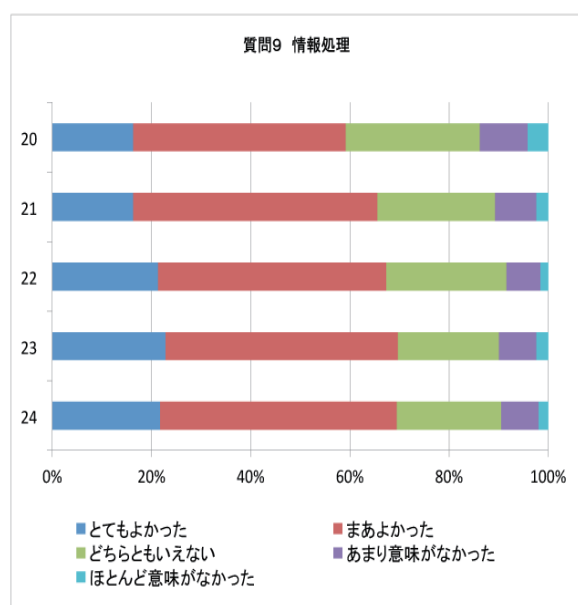
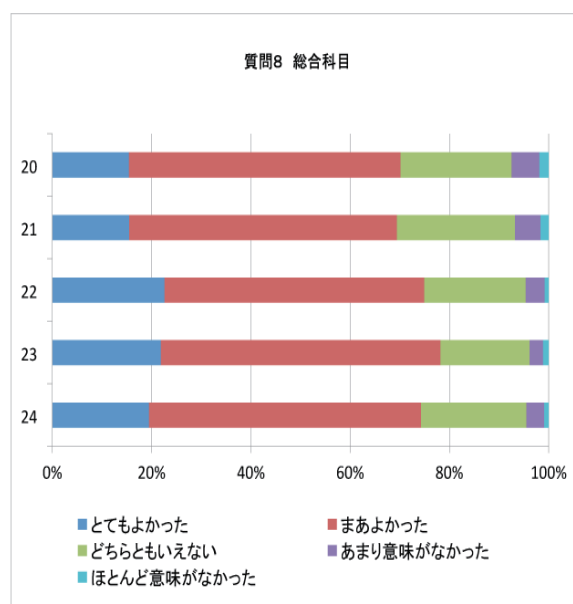
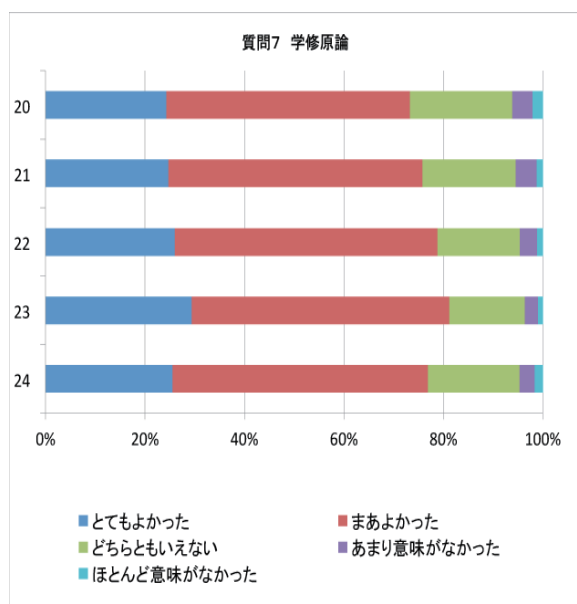
質問10. 教室の環境は適切であった。

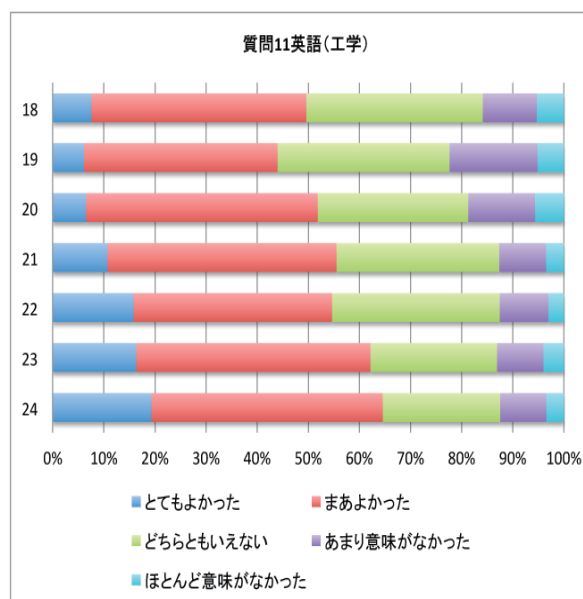
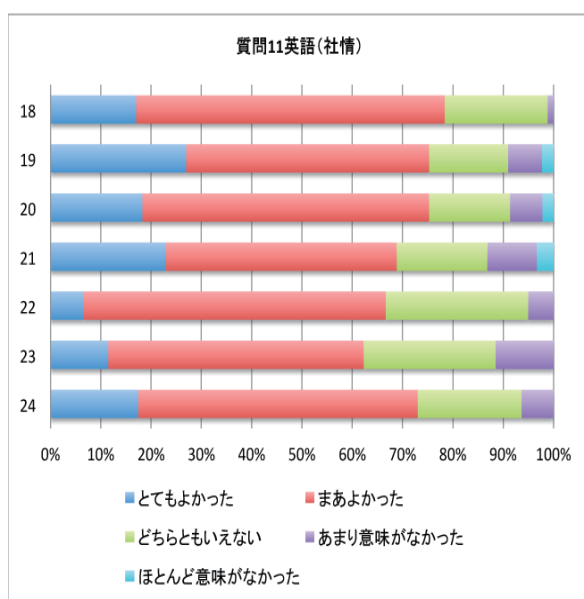
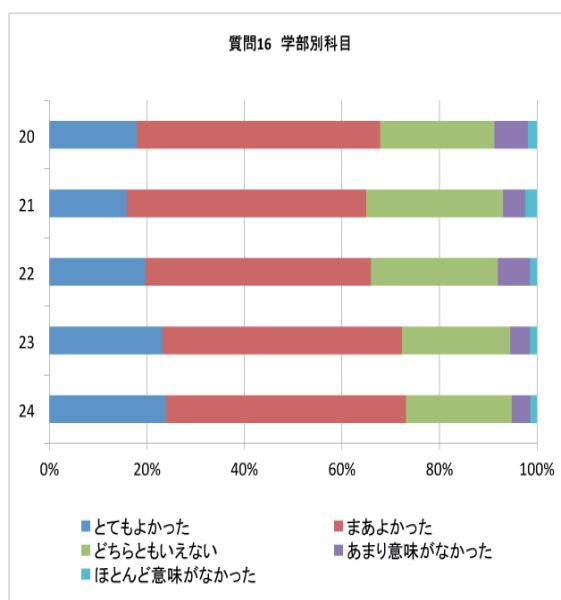
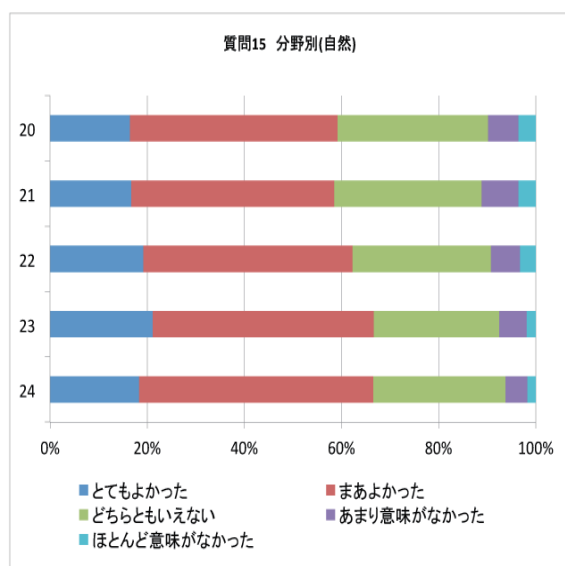
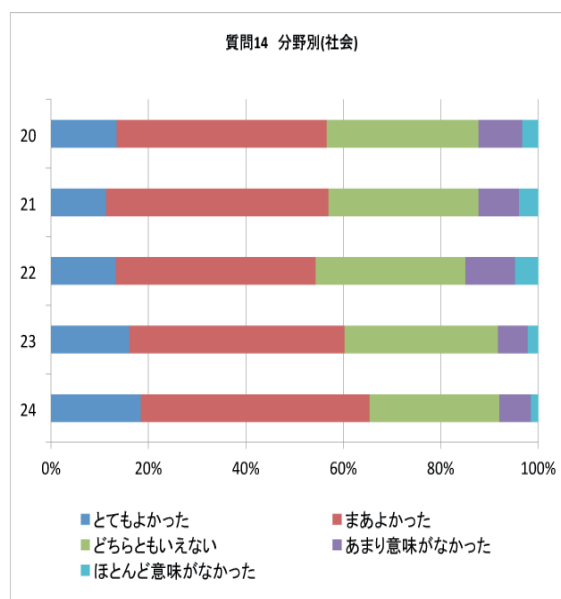
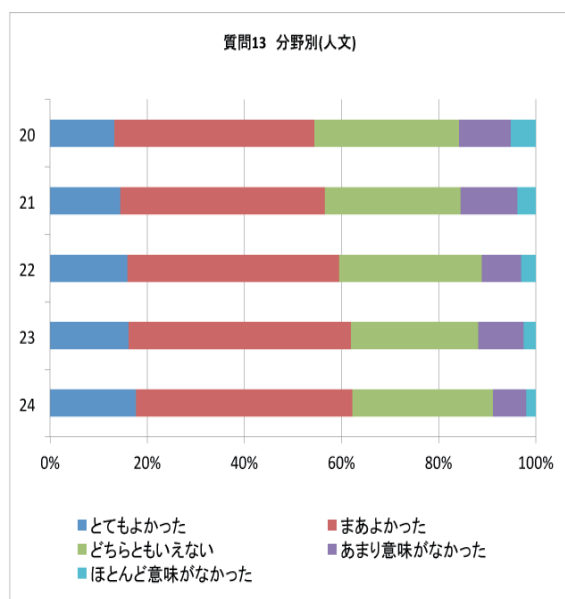
区 分	無回答		「1」		「2」		「3」		「4」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	0	0.0	54	77.1	14	20.0	2	2.9	0	0.0	70	100.0
社 会 情 報 学 部	0	0.0	41	83.7	5	10.2	2	4.1	1	2.0	49	100.0
医 学 部 医 学 科	0	0.0	8	66.7	3	25.0	1	8.3	0	0.0	12	100.0
医 学 部 保 健 学 科	0	0.0	77	70.0	30	27.3	2	1.8	1	0.9	110	100.0
工 学 部 昼 間 コース	0	0.0	55	62.5	29	33.0	3	3.4	1	1.1	88	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	0	0.0	235	71.4	81	24.6	10	3.0	3	0.9	329	100.0

【その他自由記述欄】

区 分	記入有り「1」		記入なし「0」		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%
教 育 学 部	18	25.7	52	74.3	70	100.0
社 会 情 報 学 部	10	20.4	39	79.6	49	100.0
医 学 部 医 学 科	5	41.7	7	58.3	12	100.0
医 学 部 保 健 学 科	12	10.9	98	89.1	110	100.0
工 学 部 昼 間 コース	17	19.3	71	80.7	88	100.0
工 学 部 夜 間 主 コース	0	0.0	0	0.0	0	0.0
全 体	62	18.8	267	81.2	329	100.0







2 学生支援センター

学生支援センターは、下部組織に学生に対する学生相談・生活部会及び就職支援部会の審議機関を組織し各学部等から委員が選出されている。審議内容等は、学生相談、生活支援及び就職支援等である。当該支援事業の事務は、学生支援課が各学部の学生支援担当係と連携を図り行っている。平成 24 年度の主な支援等の事項は、次のとおりである。

2.1 入学料免除及び徴収猶予

入学生について、学部生においては、特別な事情（学資負担者が 1 年以内に死亡又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受けた場合をいう。）により入学料の納入が著しく困難な場合・大学院生、専攻科生については、経済的理由により入学料の納入が困難、かつ、学業優秀と認められる場合又は特別な事情による場合について、修学を支援するため、入学料免除及び徴収猶予を行っている。

2.1.1 免除申請者数，免除者数

平成 24 年度入学料免除申請者数，免除者数は，次のとおりである。

4 月 1 日入学：免除申請者数 120 人，免除者数 53 人

10 月 1 日入学：免除申請者はいなかった。

2.1.2 徴収猶予申請者数，徴収猶予者数

平成 24 年度入学料徴収猶予申請者数，徴収猶予者数は，次のとおりである。

4 月 1 日入学：徴収猶予申請者数 45 人，徴収猶予者数 37 人

10 月 1 日入学：徴収猶予申請者数 3 人，徴収猶予者数 3 人

2.2 授業料免除及び徴収猶予

経済的理由により授業料の納入が困難、かつ、学業優秀と認められる学生又は特別な事情（学資負担者が授業料納入期限の 6 ヶ月以内に死亡又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受けた場合をいう。）により授業料の納入が著しく困難な学生について、修学を支援するため、授業料免除及び徴収猶予を行っている。

2.2.1 免除申請者数，免除者数

平成 24 年度授業料免除申請者数，免除者数については，次のとおりである。

前期：免除申請者数 835 人，免除者数 725 人

後期：免除申請者数 823 人，免除者数 775 人

2.2.2 徴収猶予申請者数，徴収猶予者数

平成 24 年度授業料徴収猶予申請者，徴収猶予者数は，次のとおりである。

前期：徴収猶予申請者数 8 人，徴収猶予者数 6 人

後期：徴収猶予申請者数 1 人，徴収猶予者数 1 人

2.3 寄宿料免除

本学では、学生本人又は学資負担者が風水害等の災害を受け、寄宿料の納入が著しく困難と認められる場合、寄宿料の免除を行っている。

2.3.1 免除申請者数、免除者数

平成 24 年度寄宿料免除申請者はいなかった。

2.4 奨学金

本学では、日本学生支援機構の奨学金と地方公共団体や民間奨学団体から本学に募集依頼のあった奨学金を扱っている。これらの奨学金は、いずれも学業・人物ともに優秀であり、かつ健康であって経済的理由により学資の支弁が困難であると認められた者が対象となる。

なお、日本学生支援機構の奨学金には、無利子貸与の第一種奨学金と有利子貸与の第二種奨学金があり、いずれも貸与終了後には、返還が必要となる。

2.4.1 日本学生支援機構第一種奨学生数（平成 24 年 10 月 1 日現在）

学部生	862 人（特別支援教育特別専攻科を含む。）
大学院生	278 人

2.4.2 日本学生支援機構第二種奨学生数（平成 24 年 10 月 1 日現在）

学部生	1,234 人（特別支援教育特別専攻科を含む。）
大学院生	110 人

2.4.3 日本学生支援機構以外の奨学生数（平成 24 年 10 月 1 日現在）

学部生	27 人
大学院生	2 人

2.5 学生相談体制及び学生相談

本学は、次のような学生相談体制を設け、学生の個人的な問題や悩みごとについての相談に応じている。

2.5.1 学生相談体制

全学の学生を対象に荒牧キャンパスに学生相談室を、また、工学部の学生を対象に桐生キャンパスに学生相談室を設けて相談に応じている。

2.5.2 主な相談事項

主な相談事項は、勉学・進路、メンタルヘルス、クラブ・サークル活動、経済的事情・アルバイト、友人（男女）関係についてなどである。

2.5.3 学生相談アンケートの実施及び活用

平成 24 年 12 月に講師以上の全教員に対して、平成 24 年 4 月 1 日から平成 24 年 12 月 31 日までの間に学生から相談のあった内容や各教員の対応について「学生相談アンケート」を実施し、回収率 40.9%であった。

なお、各教員が個々の相談事例にどのように対処したのかの内容を報告書にまとめ、全教員に配付し学生指導に活用している。

2.6 授業欠席状況調査

欠席状況調査は、授業への受講状況を通して本学学生の学業意欲を調査し、精神面の障害や不健康状態にある者を早期に発見して、面談等により本人へ適切な指導を与えることを目的とする。

2.6.1 授業欠席者数及び主な欠席理由

平成 24 年度前期欠席者数：60 名

主な欠席理由：早朝に授業があるため寝坊，アルバイト，精神的な悩み，
身体的病気怪我 等

平成 24 年度後期欠席者数：70 名

主な欠席理由：授業が理解できない，アルバイト，早朝に授業があるため寝坊，
進路の迷い 等

2.6.2 実施方法，時期

1) 実施方法

- ・実施時期は，5 月（前期）と 11 月（後期）の年 2 回を実施基準月とする。
- ・調査対象は，卒業研究に着手（研究室に所属）しない学部全学生とする。
- ・調査科目は，各学部が指定した科目とする。
ただし，1 年次は，学部の依頼により教育基盤センターが指定した健康学原論（前期）及び各学部別に指定した授業科目（後期）とする。
- ・調査方法は，調査科目について 4 回の出欠チェックを行う。
- ・集計作業は，各学部担当事務（1 年次生は学務部）が行う。
- ・4 回のチェックのうち 3 回（工学部は 2 回）以上欠席した者をクラス担任別に集計する。
- ・クラス担任別集計に基づき面接対象一覧と個人ごとの面接票を作成する。
- ・面接票には学籍番号，所属，氏名，住所，電話番号等を記載する。
- ・学部長名（1 年次生は学生相談・生活部会長名）で面接対象一覧と面接票を添えて，クラス担任等に対して欠席者の事情聴取を期限内に終了するよう依頼する。

2) クラス担任による欠席者の事情聴取

- ・実施時期は，6 月（前期），12 月（後期）を実施基準月とする。
- ・調査対象は，3 回（工学部は 2 回）以上欠席した者とする。
- ・調査方法は，クラス担任等が対象者を呼び出し，直接面談により欠席理由等を聴取する。
- ・面談により適切な指導を行い，かつ，精神科医の面談の要否を判断し，その内容を面接票に記載して，その都度学部長（1 年次生は学務部）に提出する。

3) 医師による欠席者との面談

クラス担任等から学部長（1 年次生は学務部）に提出された面接票を健康支援総合センター医師に回付し，医師が指導の必要があると判断した欠席者と面談を行い，必要なカウンセリング等を行う。

2.7 障害学生への支援

障害のある学生がその能力並びに障害の種別及び程度に応じ，十分な教育を受け，学生生活を送ることができるよう，大学教育・学生支援機構学生支援センターの中に，障害学生支援室を設置している。

2.7.1 障害学生数

平成 24 年度に障害のある学生は，聴覚障害者 6 名，肢体不自由者 1 名，内部障害者 1 名，

発達障害者2名の合計10名が在籍している。

2.7.2 支援内容

群馬大学障害学生修学支援実施要項に基づく修学支援の必要な学生には、障害の種別及び程度に応じた支援の配慮願いを授業担当教員へ文書で行っている。聴覚障害学生には、1授業につき必要に応じてFM補聴器の貸し出しや、パソコンテイクによる支援と手話通訳による支援を行い、肢体不自由学生には、車椅子の対応や低身長のため踏み台を窓口、トイレ等に設置し、教室では本人持参の簡易踏み台を使用している。また、内部障害学生には、講義中のトイレ退席に配慮し、また、発達障害学生には、履修相談や説明には文書と会話を併用するなどの支援をしている。

2.8 学生教育研究災害傷害保険，学研災付帯賠償責任保険

学生教育研究災害傷害保険は、学生が正課，学校行事，学校施設内外における課外活動，学校施設内，通学，学校施設等相互間の移動時に係る全ての傷害に対して補償を行う保険である。

学研災付帯賠償責任保険は、学生が正課，学校行事，インターンシップ，介護等体験活動，教育実習，ボランティア活動等及びその移動時に，他人にけがを負わせたり，他人の財物を損壊したことにより被る法律上の損害賠償を補償する保険である。

本学では，教育研究の円滑な実施のために，入学の際に当該保険に全員が加入することを勧めている。

2.8.1 加入者数

平成24年度の学生教育研究災害傷害保険，学研災付帯賠償責任保険加入者数は，資料のとおりである。

2.8.2 請求種別保険金請求件数

平成24年度の学生教育研究災害傷害保険，学研災付帯賠償責任保険請求種別保険金請求件数は，資料のとおりである。

2.9 通学証明書，旅客運賃割引証

通学証明書は，学生がJR，私鉄，バス等の通学定期券を購入する際に必要となる証明書である。

学生旅客運賃割引証は，学生の修学上の経済的負担軽減と学校教育の振興に寄与することを目的としている制度で，片道乗車区間の距離100kmを超える区間を乗車する際に使用することができる。

通学証明書及び学生旅客運賃割引証発行業務については，荒牧地区，昭和地区，桐生地区及び太田地区で証明書自動発行機にて行っている。

2.9.1 発行枚数及び主な発行理由

平成24年度の通学証明書及び学生旅客運賃割引証の発行枚数等は，資料のとおりである。

2.10 学生寮

本学には、前橋地区に養心寮、桐生地区に啓真寮の2寮がある。

学生寮は、学生が修学にふさわしい環境において勉学を継続するための住居施設として設けられている。

2.10.1 養心寮入寮者数

養心寮入寮者数（定員は男子74人、女子62人、合計139人、寄宿料月額4,300円）は、月平均入寮者数は男子71.8人、女子60.9人である。なお、男子部屋数は77室であるが、入居不可室が3室あるため、74室を定員とした。

2.10.2 啓真寮入寮者数

啓真寮入寮者数（定員は男子のみで102名、寄宿料月額5,900円）は、月平均入寮者数は24.5人である。

2.11 生活支援施設

本学では、学生生活の利便性を確保し、経済面の支援を図るために荒牧地区、昭和地区及び桐生地区にそれぞれ食堂・売店等を設けており、群馬大学生生活協同組合に委託している。

食堂では食事及び懇親会等を、売店では、書籍、日用品、旅行斡旋等を市価より安く提供している。

2.11.1 食堂

事項・地区	荒 牧 地 区	昭 和 地 区	桐 生 地 区
座 席 数	447席 (ホール内405席,外42席)	286席 (ホール内264席,外22席)	558席 (ホール内438席,外20席, 桐園100席)
営 業 時 間	11:00～14:00 17:30～19:30	11:00～14:00	11:00～14:00 17:30～19:00 桐園 11:00～14:00
年 間 営 業 日 数	251日	238日	238日
年 間 利 用 者 数	138,699人	52,247人	139,657人
提供メニュー数	50以上	30以上	60以上

2.11.2 売店

事項・地区	荒 牧 地 区	昭 和 地 区	桐 生 地 区
営 業 時 間	9:30～18:00	8:30～18:00	9:30～18:00
年間営業日数	246日	238日	238日
年間利用者数	186,243人	138,074人	185,897人

2.12 課外活動施設

本学には、荒牧、昭和、桐生の各キャンパスに各種の課外活動施設があり、体育の授業の他、学生の利用に供している。その主な施設については、次のような施設仕様、使用等状況である。

2.12.1 体育施設

・荒牧キャンパス

陸上競技場

陸上競技場は、400メートルトラックである。陸上競技部が主として使用している。

また、トラック内のインフィールドも、やり投げ等の陸上種目の他、多目的な軽スポーツ実施の場として使用している。

サッカー・ラグビー場

サッカー・ラグビー場は、サッカー又はラグビーの公式試合が可能な面積を持っており、サッカー、ラグビー及びフットサル用のゴールが設置してある。なお、サッカー・ラグビー場には、夜間照明も設置してある。サッカー部、ラグビー部、アメリカンフットボール部及びフットサルサークルが主として使用している。

テニスコート

テニスコートは、硬式専用コート3面、軟式専用コート3面（いずれもクレーコート）、全天候型コート2面（オムニコート）、両用コート1面（クレーコート（ゴルフ練習施設併設））の9コートがあり、硬式テニス部やソフトテニス部が主として使用している。

なお、オムニコートは夜間照明が設置してあり、人工芝のため雨上がりにすぐ使えることもあるため、人気が非常に高い。その反面、人工芝の消耗も激しく、修繕費がかかるのが難点となっている。

野球場

野球場は、天然芝で、夜間照明も設置してある。準硬式野球部、硬式野球部、軟式野球サークルアウィル及び医学部準硬式野球部が主に使用している。

プール

プールは、50メートル8コースで、6月～8月に使用している。水泳部が主として使用している。

第1体育館

第1体育館は、主としてバレーボール、バスケットボールなどにより使用し、それぞれ2面使用可能である。バレーボール部、バスケットボール部が主として使用している。

第2体育館

第2体育館は、主としてバドミントン、卓球、体操競技、ダンスなどにより使用している。なお、ダンス用の広い面積の鏡や、体操での安全確保用のウレタンを敷き詰めたピットも設けている。バドミントン部、卓球部、体操部、ダンス部が主として使用している。なお、第1体育館、第2体育館の間にトレーニングルームが併設されている。

武道場

武道場は、剣道用の床面が1面、柔道用の畳面が1面の計2面があり、各種武道で使用する。

る他、畳面にレスリング用マットを敷き詰めてレスリングをすることも可能である。剣道部、柔道部、空手道部、少林寺拳法部、レスリング部が主として使用している。

弓道場

弓道場は、平成 22 年度に新営され、公式試合が可能となった。弓道部が主として使用している。

馬場

馬場は、馬術部が使用している。乗馬して練習すると表面が荒れるため、馬術部学生が年中馬場の部室に常駐（授業時間及び深夜を除く）し、馬に餌等を与えて馬場を管理している。なお、飼育している馬は馬術部の所有であり、その餌代は学生が拠出している。

・昭和キャンパス

体育館

体育館は、バレーボール・バスケットボール・バドミントンなどの球技で使用するアリーナと、剣道場・柔道場各 1 面の武道場があり、武道場の 2 階は卓球場となっている。

昭和地区では体育の正課授業がないため、学生の課外活動用として、バレーボール部、バスケットボール部、バドミントン部、剣道部、柔道部、卓球部が主に使用している。

弓道場

弓道場は敷地面積が狭隘であるため、荒牧地区と比べると射場の幅は狭くなっている。弓道部が主として使用している。

・桐生キャンパス

菱グラウンド（サッカー・ラグビー場、野球場）

サッカー・ラグビー場は、サッカー及びラグビー用のゴールが設置してあり、サッカー部、ラグビー部及びフットサルサークルが主として使用している。野球場は、天然芝で、硬式野球部が主として使用している。

テニスコート

テニスコートは全天候型コート 3 面（オムニコート）が 3 面あり、硬式テニス部、ソフトテニス部が主に使用している。

なお、夜間照明が設置してあり、人工芝のため雨上がりにすぐ使えることもあるため、人氣が非常に高い。その反面人工芝の消耗も激しく、修繕費がかかるのが難点となっている。

プール

プールは、25 メートル 7 コースで、6 月～8 月まで使用している。水泳部が主として使用している。

体育館

体育館は、1 階には剣道用の床面が 1 面、柔道用の畳面が 1 面の計 2 面があり、各種武道で使用している。剣道部、柔道部、空手道部、少林寺拳法部、ダンスサークル、八木節同好会が主として使用している。また、トレーニングルームも併設されている。2 階には主として球技用のフロアであり、バスケットボール部、バレーボール部、卓球部、バドミントン部が主に使用している。

弓道場

弓道場は、弓道部が主として使用している。

2.12.2 文化施設

文化施設等は、次のとおりである（荒牧キャンパスのみ）。

ミューズホール

ミューズホールは、大学会館内の多目的ホールで、各種会合、集会等に使用する施設である。

集会室

3室の集会室があり、うち1室は和室である。和室は主に茶道部が使用している。

2.12.3 課外活動共用施設

・荒牧キャンパス

課外活動共用施設は、南北に2棟あり北棟は主に運動系サークルが、南棟は主として文化系サークルが共同で利用している施設である。北棟は1階、2階ともに8部屋の計16部屋あり、南棟は1階、2階ともに6部屋の計12部屋がある。

北棟1階に運動講義関係の器具庫があり、その他の部屋は部室として使用している。南棟は音楽演奏に向く防音の効いた室が1室、写真部用の暗室、学生が各種印刷に利用する印刷室などがある。また、荒牧祭実行委員会もこの課外活動共用施設を中心に活動している。

・昭和キャンパス

課外活動施設は体育館と繋がっており1階、2階、3階に各6部屋（計18室）あり、1階には音楽演奏に向く防音の効いた室が4室ある。主に文化系クラブ・サークルが利用している。

・桐生キャンパス

課外活動共用施設は、1階に9部屋、2階と3階に各6部屋の計21部屋あり、1階には音楽演奏に向く防音の効いた室が1室、写真部用の暗室、学生が各種印刷に利用する印刷室などがある。主に文化系クラブ・サークルの活動場所や運動部の器具庫及び倉庫として利用されている。

2.12.4 合宿所

・荒牧キャンパス

4部屋あり、大きさは談話室が12畳、1・2号室が計22畳、3号室が14畳、4号室が14畳である。

関東甲信越大学体育大会などの各種競技大会開催間近には、強化合宿で利用率が非常に高くなる。

なお、就寝用具などは学生の持ち込みとなっている。

・桐生キャンパス

4部屋あり、大きさは1号室が12畳、2号室が15畳、3・4号室が各6畳である。

関東甲信越大学体育大会などの各種競技大会開催間近には、強化合宿で利用率が非常に高くなる。

なお、各部屋には就寝用具が備えられており、共用の調理場や浴室等も利用できる。

2.13 学生団体及び主な活動

学生団体及び主な活動は、次のとおりである。

2.13.1 学生団体

平成 24 年度のクラブ・サークルは、資料のとおりである。

本学の運動部の対外試合のある種目では、荒牧キャンパスと桐生キャンパスのクラブ等は、「4 年制大学」の出場枠となり、昭和キャンパスは「6 年制大学」の出場枠となるため、同じスポーツ名ではあっても「荒牧・桐生」と「昭和」は別団体、というクラブ・サークルが多い。

2.13.2 大学祭

学生の意識高揚と、広く群馬大学を学外に情報発信することなどを目的とし、大学祭を開催している。

- ・荒牧祭（荒牧キャンパス）は、平成 24 年 11 月 10 日（土）～ 11 日（日）に開催した。
- ・医学祭（昭和キャンパス）は、隔年開催のため、平成 24 年度は開催しなかった。平成 25 年は開催予定である。
- ・群桐祭（桐生キャンパス）は、平成 24 年 10 月 12 日（金）～ 14 日（日）に開催した。
- ・太田キャンパスは、平成 24 年 7 月 15 日（日）に太田市祭りに併せて大学祭として出店し開催した。

なお、桐生キャンパスの大学祭は、1 年毎に群桐祭（小規模）→群桐祭（同）→工学祭（大規模）のサイクルで回っており、平成 25 年度は群桐祭、平成 26 年度は工学祭を開催する。

2.13.3 関東甲信越大学体育大会

関東甲信越大学体育大会は、学生スポーツの健全な発達及び普及を図り、併せて相互の親睦に資するため関東甲信越地区 14 大学（東京地区大学を除く。）が共同で開催している。

平成 24 年度は、本学が主管校として、山梨大学、都留文科大学、埼玉大学の 4 大学が担当して行われ、平成 24 年 8 月 15 日（水）～ 9 月 6 日（木）の日程で全 17 種目が開催され、各大学が担当した競技は以下のとおりである。

群馬大学担当：水泳、テニス、バスケットボール、剣道、卓球

山梨大学担当：サッカー、ラグビー、体操、柔道

都留文科大学担当：陸上競技、バレーボール

埼玉大学担当：硬式野球、準硬式野球、ソフトテニス、弓道、バドミントン、空手道

また、群馬大学担当競技での会場は、群馬県立敷島公園水泳場、群馬県総合スポーツセンターテニスコート、ALSOK ぐんまアリーナ、ぐんま武道館、前橋市民体育館の施設を利用して競技を行った。

なお、平成 25 年度は、横浜市立大学を主管校として、千葉大学、横浜国立大学の 3 大学が担当して行われる。

2.13.4 クラブ・サークルリーダーシップ研修会

クラブ・サークルリーダーシップ研修会は、クラブ・サークルの新旧リーダー等を対象に課外活動団体の健全な活動及び発展に寄与させることを目的として毎年行っている。

平成 24 年度は、

- ・「特別講演：社会でのリーダーシップとチームワークのあり方」
- ・「飲酒による急性アルコール中毒の弊害」
- ・「薬物乱用防止の基礎知識」
- ・「若年層が被害にあいやすい悪質商法の紹介とその対処法等」

を主眼に開催した。

2.14 研修施設

研修施設として北軽井沢研修所と草津セミナーハウスがある。その概要等は次のとおりである。

2.14.1 北軽井沢研修所

本研修所は、本学指導教員及び学生等がセミナー等で利用することを目的に昭和 49 年に設置された。所在地は、群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢字南木山榎 2032-242（北軽井沢大学村 1 条 8 丁目）で、敷地面積 2,497㎡、建物面積 285㎡の C 型鋼ビン接合フレーム型 2 階建のモダンな建物となっている。

収容人員は 15 人で居室は 3，研修室 1，炊事施設等が完備されている。開所時期は、5 月 1 日から 10 月 15 日までで、施設運営費は、1 人 1 日 1,000 円、食事は自炊となっている。ただし、本学の教職員及び学生以外は施設運営費の他に施設使用料 1 人 1 日 40 円が必要となる。

2.14.2 草津セミナーハウス

この施設は、関東甲信越地区国立大学の共同利用合宿研修施設として、教職員及び学生が起居を共にし、相互に研鑽し人間関係を深め、対話や学習を重ねながら教養を高め、自然に親しみ、豊かな人間性を育成することを目的に昭和 59 年に設置された。所在地は群馬県吾妻郡草津町大字草津字白根 737 である。

上信越県境にそびえる草津白根山の中腹に広がる日本有数の温泉地、草津町にあるこの施設は、敷地 12,084㎡、建物延 2,569㎡で 120 人を収容することができる。

四季を通して、セミナーや体育館を利用してのクラブ合宿の他、冬のスキー、春の新入生合宿、夏の登山及び秋の自然観察など、多彩な利用ができる。

草津セミナーハウス使用料金表（平成 24 年度）

区 分	（１）地区国立大学教職員・学生	（２）（１）以外の者
運 営 費	1,400円（1,900円）	1,800円（2,300円）
施 設 使 用 料	（２）の者のみが負担（毎年 4 月 1 日決定）	
食 事	朝食 460円 昼食 500円 夕食 980円	

- （１） 地区国立大学とは関東甲信越地区国立大学をいう。
- （２） （ ）内の数字は 10 月 1 日から 4 月 30 日までの運営費である。
- （３） 地区国立大学の教職員及び学生以外が利用する場合は施設運営費の他に施設使用料 1 人 1 日 100 円等が必要となる。
- （４） 既納の運営費及び施設使用料は還付しない。ただし、使用日の 7 日前までの取り消しについては、運営費の 70%を還付する。

平成 24 年度利用者数

地区大学所属者	地区大学所属者以外	総 数
3,963 人	2,775 人	6,738 人

2.15 学生の就職支援

荒牧キャンパスに全学生が利用可能な進路指導室としてキャリアサポート室を開設している。学生自身の適性や志向を見定め、明確な目的意識を持たせ社会や仕事、働くことの意味や意義を考え学ばせる実践的な就業体験や各種の就職ガイダンス・セミナーを開催し、多様化する就職活動に対する支援を行っている。

2.15.1 進路状況及び主な就職先

平成 24 年度の学生の進路状況等は、資料のとおりである。

2.15.2 全学就職ガイダンス・セミナーの開催

学生支援センター就職支援部会主催による就職対象学年及び低学年に向けた就職ガイダンスは、次のとおりである。

- 1) 一般企業向け就職ガイダンス・各種セミナー
(全 34 回、参加延人数：2,490 人)
- 2) 公務員関係就職ガイダンス
(全 6 回、参加延人数：321 人)
- 3) 1・2 年生向けガイダンス
(全 2 回、参加延人数：140 人)
- 4) インターンシップ関係説明会及び成果報告会
(全 9 回、参加延人数：1,055 人)
- 5) 職務適性診断テスト等
(全 6 回、参加延人数：301 人)

2.15.3 キャリアカウンセリングの充実

学生の就職相談体制の強化として、前橋地区に 3 名及び桐生地区に 3 名、太田地区に 1 名のキャリアカウンセラーを配置し、面接形式によるカウンセリングを実施した。さらに、ハローワークの協力により、就職未内定者のための個別相談会を実施した。

- 1) 利用件数：437 件
- 2) 主な相談・指導内容
 - ・就職活動への指導助言
 - ・職業適性・自己分析の指導助言
 - ・エントリーシートの添削指導助言
 - ・面接試験の指導助言
- 3) 就職内定学生による後輩学生への相談会を実施した。
 - ・相談実績：8 回

2.15.4 キャリアサポート室における情報収集環境の充実

- 1) 学生用に就職情報検索等のためのパソコン・プリンターを充実した。
- 2) 各種企業情報データの検索（求人件数：1,296 件）
- 3) 職業適性診断検査の利用（利用件数：20 件）
- 4) 就職関連書籍・ガイダンス開催ビデオの充実（貸出可）
- 5) キャリアサポート通信の発行（月 1 回）により学生への就職情報の提供を実施した。
- 6) 求人情報、カウンセリングの予約状況等について、ツイッターによる情報発信を開始した。

2.15.5 就職支援の体制強化の充実

- 1) 国公立大学が参加する就職指導担当者研修会や全国就職指導ガイダンスにおいて意見交換を図るとともに企業の人事担当者等による専門的助言や情報の収集により就職支援体制を強化した。
- 2) 体験型インターンシップを推進すると共に各機関、企業、施設等において学生が実務経験を積むことができる環境を整備した。
 - ・企業紹介説明会参加者：508 人
 - ・実習事前講座参加者：171 人
 - ・実習参加者：171 人
 - ・インターンシップ終了後の成果報告会参加者：376 人

なお、実習期間中に職員による受入先訪問を行いインターンシップ充実の支援体制を整えた。

2.15.6 就職支援の体制強化の充実

「模擬面接の指導」、「小論文の作成技術の訓練」、「エントリーシート及び履歴書の作成技術の訓練」及び「公務員試験受験のための試験対策セミナーの開催」をした。

2.15.7 就職支援 BOOK の作成・配付

就職支援企業との連携により、就職支援BOOK「群大生のための就活ノウハウ集」を作成し、各学部の就職対象学生に配付した。

2.16 就業力育成支援室

就業力育成支援事業 平成 24 年度活動内容

本学では、以下のような就業力育成の取組を実施している。

- ①就業力育成を実施するために就業力育成支援室を設置し、専任教員（教授）、および兼任教員 4 名、事務職員 2 名を配置して、就業力育成支援機能を充実させている。
- ②就業力育成のための科目として「キャリア計画」、「キャリア設計」、及び「学びを構築する」を開講している。
- ③企業実務家等による就業力育成講演会（3 回）及び就業力育成セミナー（12 回）を実施している。
- ④企業での就業体験型インターンシップの事前教育として、2 年生に「インターンシップ I」を開講している。
- ⑤英語教育の充実のため、工学部においては、2 年次での英語（2 単位）を 1 年次に集中（計 4 単位）して行うとともに、プレースメントテストによる習熟度別クラス編成を実施している。
- ⑥学びの履歴、アンケート等は、電子的に記録し、自身の学びを振り返ることができるキャリアデザインポートフォリオシステムを利用している。

これらの取り組みは、平成 24 年度に採択された「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」として、各大学や地域産業界と協働して、学生の社会的・職業的自立を促す教育を継続して推進している。

2.17 アルバイトの紹介体制の充実

学生生活を経済的に維持することが困難な学生に対し、荒牧地区はキャリアサポート室、昭和地区は昭和地区事務部学務課学事・学生支援係、桐生地区は工学部学生支援係においてアルバイト情報掲示板を設置し、学生にふさわしいアルバイト情報を紹介した。

2.17.1 主な紹介等件数

キャリアサポート室（荒牧地区）での主な紹介等件数は、次のとおりである。

- ・一般のアルバイト求人数：172 件
- ・塾講師求人数：85 件
- ・家庭教師求人数：46 件
- ・アルバイト情報揭示利用学生数 延 1,510 人

2.18 学生生活実態調査

学生の生活実態や要望等を把握し、有効な学生支援の方策を検討するために、5 年毎に実施することとした学生生活実態調査を、平成 15 年度及び平成 20 年度に実施した。

また、内容を報告書にまとめ、講師以上の教員及び関係事務職員に配付し学生支援への活用を図った。

なお、平成 25 年度に 3 回目の学生生活実態調査を実施する予定である。

2.19 キャンパスニュース群の発行

「キャンパスニュース群」は、学生が編集に参画して作成し、学生向け広報として、これまで年 1 回冊子体として 6,500 部発行していたが、近年では、情報ツールがインターネットであることから、今後はウェブサイトとして閲覧できるように準備中である。

なお、主な予定掲載内容は、サークル紹介、研究室紹介、就職関係、キャンパスライフ、キャンパスマップ、大学からのお知らせ等である。

2.20 学生支援センター資料集

資料 2-1：平成 24 年度入学料免除、徴収猶予実施状況

資料 2-2：平成 24 年度授業料免除、徴収猶予実施状況

資料 2-4：日本学生支援機構奨学生数（平成 24 年 10 月 1 日現在）

資料 2-6-1：平成 24 年度学部 1 ～ 3 年次生欠席状況調査一覧（前期）

資料 2-6-2：平成 24 年度学部 1 ～ 3 年次生欠席状況調査一覧（後期）

資料 2-8-1：平成 24 年度学生教育研究災害傷害保険、学研災付帯賠償責任保険加入者数

資料 2-8-2：平成 24 年度学生教育研究災害傷害保険、学研災付帯賠償責任保険請求種別保険金請求件数

資料 2-9-1：平成 24 年度通学証明書発行枚数

資料 2-9-2：平成 24 年度学生旅客運賃割引証発行枚数及び主な発行理由

資料 2-13：平成 24 年度クラブ・サークル一覧

資料 2-14：平成 24 年度北軽井沢研修所利用状況

資料 2-15-1：平成 24 年度学部卒業生の進路状況

資料 2-15-2：平成 24 年度学部卒業生の主な就職先

2.19 学生支援センター資料集

平成24年度入学科免除実施状況

平成24年度入学科徴収猶予実施状況

	免除申請者数 (人)		免除許可者数 (人)	
	4月入学	10月入学	4月入学	10月入学
教育学部	3	0	全額免除 3 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
社会情報学部	2	0	全額免除 2 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
医学部	0	0	全額免除 0 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
	0	0	全額免除 0 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
工学部	3	0	全額免除 3 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
学部の計	8	0	全額免除 8 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
工学部(夜間主)	0	0	全額免除 0 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
教育学研究科 (修士課程)	8	0	全額免除 8 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
教育学研究科 (専門職学位課程)	0	0	全額免除 0 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
社会情報学研究科	5	0	全額免除 5 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
医学系研究科 (生命医科学専攻)	3	0	全額免除 3 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
医学系研究科 (保健学専攻・前期)	6	0	全額免除 6 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
工学研究科 (博士前期課程)	77	0	全額免除 77 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
大学院修士課程の計	99	0	全額免除 99 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
医学系研究科 (医科学専攻)	9	0	全額免除 9 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
医学系研究科 (保健学専攻・後期)	1	0	全額免除 1 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
工学研究科 (博士後期課程)	3	0	全額免除 3 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
大学院博士課程の計	13	0	全額免除 13 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
特殊教育特別専攻科	0	0	全額免除 0 半額免除 0	全額免除 0 半額免除 0
合 計	120	0	全額免除 120 半額免除 43	全額免除 0 半額免除 43

	猶予申請者数 (人)		猶予許可者数 (人)	
	4月入学	10月入学	4月入学	10月入学
教育学部	2	0	全額猶予 2 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
社会情報学部	1	0	全額猶予 1 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
医学部	2	0	全額猶予 2 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
	4	0	全額猶予 4 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
工学部	15	0	全額猶予 15 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
学部の計	24	0	全額猶予 24 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
工学部(夜間主)	3	0	全額猶予 3 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
教育学研究科 (修士課程)	1	0	全額猶予 1 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
教育学研究科 (専門職学位課程)	0	0	全額猶予 0 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
社会情報学研究科	2	0	全額猶予 2 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
医学系研究科 (生命医科学専攻)	2	0	全額猶予 2 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
医学系研究科 (保健学専攻・前期)	2	0	全額猶予 2 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
工学研究科 (博士前期課程)	6	2	全額猶予 6 半額猶予 2	全額猶予 2 半額猶予 0
大学院修士課程の計	13	2	全額猶予 13 半額猶予 2	全額猶予 2 半額猶予 0
医学系研究科 (医科学専攻)	3	0	全額猶予 3 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
医学系研究科 (保健学専攻・後期)	1	0	全額猶予 1 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
工学研究科 (博士後期課程)	1	1	全額猶予 1 半額猶予 1	全額猶予 1 半額猶予 0
大学院博士課程の計	5	1	全額猶予 5 半額猶予 1	全額猶予 1 半額猶予 0
特殊教育特別専攻科	0	0	全額猶予 0 半額猶予 0	全額猶予 0 半額猶予 0
合 計	45	3	全額猶予 45 半額猶予 48	全額猶予 3 半額猶予 40

平成24年度授業料免除実施状況

	免除申請者数 (人)			免除許可者数 (人)		
	前期	後期	合計(延べ人数)	判定	前期	後期
教育学部	128	123	251	全額免除	66	60
				半額免除	47	55
社会情報学部	65	58	123	全額免除	30	24
				半額免除	26	30
医学部	49	40	89	全額免除	18	17
				半額免除	16	14
保健学科	84	84	168	全額免除	44	34
				半額免除	31	43
工学部	229	250	479	全額免除	117	100
				半額免除	75	114
学部の計	555	555	1110	全額免除	275	235
				半額免除	195	256
工学部(夜間主)	8	6	14	全額免除	3	2
				半額免除	4	4
教育学研究科 (修士課程)	13	16	29	全額免除	4	4
				半額免除	8	10
教育学研究科 (専門職学位課程)	0	0	0	全額免除	0	0
				半額免除	0	0
社会情報学研究科	15	13	28	全額免除	12	8
				半額免除	3	5
医学系研究科 (生命医科学専攻)	6	6	12	全額免除	5	4
				半額免除	1	2
医学系研究科 (保健学専攻・前期)	13	12	25	全額免除	5	5
				半額免除	5	4
工学研究科 (博士前期課程)	162	155	317	全額免除	72	66
				半額免除	78	85
大学院修士課程の計	209	202	411	全額免除	98	87
				半額免除	95	106
医学系研究科 (医科学専攻)	25	25	50	全額免除	18	17
				半額免除	3	7
医学系研究科 (保健学専攻・後期)	6	7	13	全額免除	5	6
				半額免除	1	0
工学研究科 (博士後期課程)	32	28	60	全額免除	25	24
				半額免除	3	4
大学院博士課程の計	63	60	123	全額免除	48	47
				半額免除	7	11
特殊教育特別専攻科	0	0	0	全額免除	0	0
				半額免除	0	0
合 計	835	823	1658	全額免除	424	371
				半額免除	301	377

平成24年度授業料徴収猶予実施状況

	猶予申請者数 (人)			猶予許可者数 (人)		
	前期	後期	合計(延べ人数)	判定	前期	後期
教育学部	2	0	2	全額猶予	2	0
				半額猶予	0	0
社会情報学部	0	0	0	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
医学部	1	0	1	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
保健学科	1	0	1	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
工学部	2	1	3	全額猶予	2	1
				半額猶予	0	0
学部の計	6	1	7	全額猶予	4	1
				半額猶予	0	0
工学部(夜間主)	1	0	1	全額猶予	1	0
				半額猶予	0	0
教育学研究科 (修士課程)	0	0	0	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
教育学研究科 (専門職学位課程)	0	0	0	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
社会情報学研究科	0	0	0	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
医学系研究科 (生命医科学専攻)	0	0	0	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
医学系研究科 (保健学専攻・前期)	0	0	0	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
工学研究科 (博士前期課程)	1	0	1	全額猶予	1	0
				半額猶予	0	0
大学院修士課程の計	1	0	1	全額猶予	1	0
				半額猶予	0	0
医学系研究科 (医科学専攻)	0	0	0	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
医学系研究科 (保健学専攻・後期)	0	0	0	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
工学研究科 (博士後期課程)	0	0	0	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
大学院博士課程の計	0	0	0	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
特殊教育特別専攻科	0	0	0	全額猶予	0	0
				半額猶予	0	0
合 計	8	1	9	全額猶予	6	1
				半額猶予	0	0

学部・研究科										区 分				計							
専攻科	大学院	学 部	教 育 学 部	社 会 学 部	医 学 部	医 学 科	保 健 学 科	工 学 部	工 学 科	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		5 年次		6 年次	
										一 種	二 種	一 種	二 種	一 種	二 種	一 種	二 種	一 種	二 種	一 種	二 種
										32	53	33	47	42	39	37	33				
										15	26	24	30	21	32	20	32				
										12	12	17	19	20	15	17	23	12	26	14	18
32	40	28	44	31	35	47	43														
104	145	86	182	117	166	82	143														
4	9	5	8	5	7	4	7														
199	285	193	330	236	294	207	281	12	26	14	18										
1	0																				
10	3	5	1																		
0	0	0	0																		
2	0	3	0																		
5	3	1	0																		
2	1	3	0	2	0	0	0														
6	5	6	2																		
1	0	1	1	0	0																
109	48	105	45																		
7	1	5	0	5	0																
142	61	129	49	7	0	0	0														
大 学 院 計												278	110	388							

合計 2,484

平成24年度 学部1～3年次生欠席状況調査一覧（前期）

	教育学部	社会情報学部	医学部			工学部			合計
			医学科	保健学科	計	昼	夜	計	
1 年 生 対象者数	名 228	名 104	名 112	名 168	名 280	名 525	名 35	名 560	名 1,172
欠席者数	0	0	1	0	1	6	2	8	9
	0.0%	0.0%	0.9%	0.0%	0.4%	1.1%	5.7%	1.4%	0.8%
2 年 生 対象者数	231	105	132	166	298	554	33	587	1,221
欠席者数	0	3	2	0	2	11	0	11	16
	0.0%	2.9%	1.5%	0.0%	0.7%	2.0%	0.0%	1.9%	1.3%
3 年 生 対象者数	221	119	113	178	291	621	33	654	1,285
欠席者数	0	0	1	0	1	34	0	34	35
	0.0%	0.0%	0.9%	0.0%	0.3%	5.5%	0.0%	5.2%	2.7%
合 計 対象者数	680	328	357	512	869	1,700	101	1,801	3,678
欠席者数	0	3	4	0	4	51	2	53	60
	0.0%	0.9%	1.1%	0.0%	0.5%	3.0%	2.0%	2.9%	1.6%

※ 学生数は、平成24年5月1日現在

※ 休学者数は現員の内数

※ 欠席者数下段は、欠席率

平成24年度 学部1～3年次生欠席状況調査一覧（後期）

	教育学部	社会情報学部	医学部			工学部			合計
			医学科	保健学科	計	昼	夜	計	
1 年 生 対象者数	名 227	名 104	名 112	名 168	名 280	名 525	名 33	名 558	名 1,169
欠席者数	1	3		3	3	17	3	20	27
	0.4%	2.9%	0.0%	1.8%	1.1%	3.2%	9.1%	3.6%	2.3%
2 年 生 対象者数	231	105	132	165	297	548	33	581	1,214
欠席者数	5	5	3	2	5	14	1	15	30
	2.2%	4.8%	2.3%	1.2%	1.7%	2.6%	3.0%	2.6%	2.5%
3 年 生 対象者数	221	119	113	178	291	620	33	653	1,284
欠席者数	1	0	0	0	0	11	1	12	13
	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%	3.0%	1.8%	1.0%
合 計 対象者数	679	328	357	511	868	1,693	99	1,792	3,667
欠席者数	7	8	3	5	8	42	5	47	70
	1.0%	2.4%	0.8%	1.0%	0.9%	2.5%	5.1%	2.6%	1.9%

※ 学生数は、平成24年11月1日現在

※ 休学者数は現員の内数

※ 欠席者数下段は、欠席率

平成24年度学生教育研究災害傷害保険，学研災付帯賠償責任保険加入者数

(平成25年3月31日現在)

学部

(人)

学部	1年	2年	3年	4年	5年	6年	その他(研究生等)	計
教育学部	227	231	223	228	0	0	0	909
社会情報学部	86	90	109	112	0	0	0	397
医学部	100	121	110	106	96	95	0	628
医学科	157	150	154	156	0	0	0	617
保健学科	257	271	264	262	96	95	0	1,245
計	470	494	524	508	0	0	2	1,998
工学部	26	26	30	30	0	0	0	112
昼間コース	496	520	554	538	0	0	2	2,110
夜間主コース	1,066	1,112	1,150	1,140	96	95	2	4,661
計								
合計								

(平成25年3月31日現在)

大学院・専攻科

(人)

研究科	1年	2年	3年	4年	計
教育学研究科	39	38	0	0	77
社会情報学研究科	7	9	0	0	16
医学系研究科	9	3	0	0	12
修士課程	46	33	42	28	149
博士課程	47	32	0	0	79
博士前期課程	6	8	9	0	23
博士後期課程	108	76	51	28	263
計	262	261	0	0	523
工学研究科	21	16	20	0	57
博士前期課程	283	277	20	0	580
博士後期課程	13	0	0	0	13
計	450	400	71	28	949
特別支援教育特別専攻科					
合計					

平成24年度学生教育研究災害傷害保険，学研災付帯賠償責任保険請求種別保険金請求件数

(件)

	学 生 教 育 研 究 災 害 傷 害 保 険						学研災付帯賠償 責任保険	総計
	正課中	学校行事中	通学中	課外活動中	その他	合計		
荒牧地区	2		1	5		8	0	8
昭和地区	1			4		5	0	5
桐生地区	6	2	4	3	1	16	0	16
太田地区		1	1		1	3	0	3
合計	9	3	6	12	2	32	0	32

平成24年度通学証明書発行枚数

(枚)

荒牧地区		昭和地区		桐生地区		太田地区		合計
電車	バス	電車	バス	電車	バス	電車	バス	
475	346	124	58	227	0	69	0	1,299

平成24年度学生旅客運賃割引証発行枚数及び主な発行理由

(枚)

	正課	帰省	就職	課外活動	見学	旅行	傷病・治療	計
荒牧地区	17	855	733	860	248	78	1	2,792
昭和地区	98	2,469	335	1,656	203	190	10	4,961
桐生地区	107	1,700	1,134	642	152	143	3	3,881
太田地区	0	42	12	7	0	0	1	62
合 計	222	5,066	2,214	3,165	603	411	15	11,696

整理 番号	クラブ・サークル名	主な活動(所属)地区				区分
		荒牧	昭和	桐生	太田	
1	荒牧ジャズ研究会	○				文化部
2	E. S. S (English Speaking Society)	○				文化部
3	囲碁・将棋部		○			文化部
4	泉の会(障害児ボランティアサークル)	○				文化部
5	映画研究会		○			文化部
6	SRC	○	○	○	○	文化部
7	E∞gg[えっぐ]		○			文化部
8	エレクトーン部		○			文化部
9	演劇部テアトル・ヒューメ	○				文化部
10	音楽研究会			○		文化部
11	合唱サークル Pico		○			文化部
12	気象天文研究部	○	○	○	○	文化部
13	教育サークル・青竹	○				文化部
14	Guit's (アコースティックギターサークル)		○			文化部
15	クラシックギター部	○				文化部
16	グリークラブ(合唱サークル)	○		△		文化部
17	ボランティアサークルGUNVO	○				文化部
18	群馬大学折紙研究会"Origin"	○	○	○		文化部
19	群馬大学政治研究会	○				文化部
20	軽音楽部		○			文化部
21	劇団アラムニー	○				文化部
22	国際医療ボランティアの会(FORS)		○			文化部
23	国際交流サークルBeyond	○				文化部
24	群馬大学混声合唱団	○				文化部
25	茶道部	○				文化部
26	CG研究会(カードゲーム研究会)	○				文化部
27	写真部(荒牧)	○		○		文化部
28	写真部(昭和)		○			文化部
29	写真部(桐生)	○		○		文化部
30	手話さーくる でんでんむし	○	○			文化部
31	書道部	○				文化部
32	GA研究会(ゲーム・アニメ)	○				文化部
33	GMA(中学生のネット見守り活動サークル)	○				文化部
34	G. K. オールスターズ(ビッグバンドジャズ)	○		○		文化部
35	G-unit(ファッション系サークル)	○				文化部
36	情報保障サークル てふてふ(学生とティーカー交流)	○				文化部
37	群馬大学吹奏楽団	○				文化部
38	スタジオガブリ(影絵サークル)	○				文化部
39	聖書研究会		○	○		文化部
40	たんぽぽ(ボランティアサークル)	○				文化部
41	東洋医学研究会		○			文化部
42	AAA☆KIDS(トリプルエーキッズ)		○			文化部
43	ド学連(MD-PhD勉強会)		○			文化部
44	美術愛好会		○			文化部
45	ビリヤード部		○			文化部
46	ピアノ部		○			文化部
47	ファンタスティック(手芸部)	○				文化部
48	フィルハーモニックオーケストラ部	○		○		文化部
49	フォーク・ロック愛好会	○		○		文化部
50	Fore-Bridge Orchestra(FBO)(ビッグバンドジャズ)		○			文化部

平成24年度 クラブ・サークル一覧

整理 番号	クラブ・サークル名	主な活動(所属)地区				区分
		荒牧	昭和	桐生	太田	
51	FLOW Orchestra & Chorus	○	○			文化部
52	Voice Cream (アカペラサークル)	○	○	○		文化部
53	ボランティアサークル群大アドバンス[Advance]	○				文化部
54	ボランティアサークル With	○				文化部
55	ボランティア団体 Share the Earth	○	○	△		文化部
56	漫画研究部	○		○		文化部
57	マンドリン・ソサエティ	○	○	○		文化部
58	メサイア管弦楽団・合唱団	○				文化部
59	モダンジャズ研究会(医学部)		○			文化部
60	モダンジャズ研究会(理工学部)			○		文化部
61	野外教育研究会(アウトドア系教育サークル)	○				文化部
62	八木節同好会			○		文化部
63	野草を食べる会		○			文化部
64	夢のわたらせ なないろ号(ボランティア企画団体)		○			文化部
65	落語・コント研究会	○		○		文化部
66	ラジオ同好会			○		文化部
67	LAMP(イベント企画団体)	○				文化部
68	LEADS(小児糖尿病サマーキャンプボランティアサークル)		○			文化部
69	ロボット部			○		文化部
70	YMCAクラブ	○				文化部
71	R. F. C (スノーボード)	○		○		運動部
72	合気道部	○	○	○		運動部
73	アメリカンフットボール部	○				運動部
74	医学部サイクリング部 医輪(いちやり)		○			運動部
75	医学部★ダンスサークル		○			運動部
76	医学部フットサルサークル		○			運動部
77	Et's(バスケットボール)		○			運動部
78	エスケープ(硬式テニス)	○				運動部
79	空手道部	○		○		運動部
80	環境プロセススポーツ愛好会			○		運動部
81	弓道部	○		○		運動部
82	弓道部(医学科)		○			運動部
83	弓道部(保健学科)		○			運動部
84	球遊会(バレーボール)	△	○			運動部
85	クライミング部	△		○		運動部
86	群馬CRAFT(サッカー・フットサル)	○	△	△	△	運動部
87	剣道部	○	○	○		運動部
88	剣道部(医学部)	○	○			運動部
89	Get's(サッカー)		○			運動部
90	硬式テニス部	○		○		運動部
91	硬式テニス部(医学部)	○				運動部
92	硬式野球部	○		○		運動部
93	ゴルフ部(医学部)		○			運動部
94	サイクリング部	○		○		運動部
95	サッカー部(全学)	○				運動部
96	サッカー部(医学部)		○			運動部
97	サバゲーサークル			○	○	運動部
98	少林寺拳法部	○		○		運動部
99	G.M.R(各種スポーツ)			○		運動部
100	G☆バンビーズ(バスケットボールサークル)			○		運動部

平成24年度 クラブ・サークル一覧

整理 番号	クラブ・サークル名	主な活動(所属)地区				区分
		荒牧	昭和	桐生	太田	
101	自動車部	△		○	△	運動部
102	柔道部(荒牧)	○	△			運動部
103	柔道部(理工学)			○		運動部
104	準硬式野球部	○				運動部
105	準硬式野球部(医学部)		○			運動部
106	杖道部		○			運動部
107	水泳部	○	○	○		運動部
108	全学スキー部	○	○	○	○	運動部
109	スキー部(医学部)		○			運動部
110	Seven Stars (フットサル)	○				運動部
111	ソフトテニスサークルRough	○		○		運動部
112	ソフトテニス部	○		○		運動部
113	ソフトテニス部(医学部)		○			運動部
114	体操部	○	○	○	○	運動部
115	卓球部	○		○		運動部
116	卓球部(医学部)		○			運動部
117	大東流合気柔術部	○				運動部
118	ダンス部	○				運動部
119	ツバサFCコーチングスタッフ	○				運動部
120	軟式野球サークル アウィル	○		○		運動部
121	ハンドボール部	○				運動部
122	Ricer care (バイク部)			○		運動部
123	馬術部	○				運動部
124	バスケットボール部	○				運動部
125	バスケットボール部(医学部)		○			運動部
126	バスケットボール部(理工学部)			○		運動部
127	バドミントンサークルVash		○			運動部
128	バドミントン部	○		○		運動部
129	バドミントン部(医学部)		○			運動部
130	バレーボール部(全学)	○				運動部
131	バレーボール部(医学部)		○			運動部
132	B-STYLE(ストリートダンス)	○		○		運動部
133	Vit'z(ダブルダッチ)		○			運動部
134	ファーストブレイク(バスケットボールサークル)	○				運動部
135	フラダンスサークル po'aloma			○		運動部
136	フリースタイルバスケット・フットボールサークル	○	○	○	○	運動部
137	V. B. C. 桐生(バレーボール)			○		運動部
138	保健バレーボール部		○			運動部
139	borderless(卓球サークル)	○				運動部
140	ボウリング愛好会	○		○		運動部
141	メモリアルテニス部	○				運動部
142	ラグビー部(全学)	○		○		運動部
143	ラグビー部(医学部)		○			運動部
144	陸上競技部	○		○	○	運動部
145	陸上競技部(医学部)	○				運動部
146	レスリング部	○				運動部
147	Let's Met's(野球サークル)		○			運動部
148	ONE WAY(バレーサークル)	○				運動部
149	ワンダーフォーゲル部	○	○	○		運動部

平成24年度北軽井沢研修所利用状況

(延人)

使用月	群馬大学			その他の大学			一般	幼児以下	利用者 人数
	教員	職員	学生	教員	職員	学生			
5月									0
6月									0
7月	16	1	44				4	1	66
8月	13	2	30	5		12	22	2	86
9月	17		102				13		132
10月									0
計	46	3	176	5	0	12	39	3	284

平成24年度学部卒業生の進路状況（9月卒業を含む）

H24卒 平成25年5月1日現在

学 部 区 分	卒 業 年 度	卒 業 者 数 (A)	進 学 者 数					就 職 者 数											就 職 率 (E) E=C/(A+B-D) ×100				
			大 学 院 ・ 専 攻 科	他 大 学 学 部 等	研 究 生 等	各 種 専 修 学 校 等	留 学	計 (B)	業 種 別 内 訳														
									教 員						医 療 機 関	一 般 企 業	公 務 員	自 営 業		人 左 欄 以 外 の 等 法			
									幼	小	中	高	特 別 支 援	そ の 他									
教育学部	H24	222	36	0	1	1	0	38	1	58	51	9	12	0	1	11	19	0	1	163	3	18	98.2
	H24	122	3	0	0	1	0	4	1	0	0	0	0	0	2	80	15	0	7	105	5	8	95.5
医学部	H24	94	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	91	0	0	0	0	91	0	3	100.0
	H24	167	14	0	0	5	0	19	0	0	0	0	0	0	131	0	13	0	0	144	0	4	100.0
工学部	H24	530	312	0	3	0	2	317	0	0	0	1	0	0	1	164	20	1	0	187	7	19	96.4
	H24	28	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	23	0	0	0	23	1	3	95.8
計	H24	1,163	366	0	4	7	2	379	2	58	51	10	12	0	226	278	67	1	8	713	16	55	97.8

① その他(D)欄は、留学生の帰国、各種試験準備者、家事従事、不明である。

平成24年度学部卒業生の就職先

【教育学部】

■学校教育

〈国立小学校〉

群馬大学附属小学校

〈公立小学校〉

片品村 上里町 渋川市 大泉町 太田市 前橋市 深谷市 さいたま市 伊勢崎市 草津町 富岡市
高崎市 矢板市 桐生市 新潟市 館林市 いすみ市 榛東村 藤岡市 東松山市 みどり市 三条市
筑西市 土浦市 掛川市 玉村町 桶川市 佐野市

〈国立中学校〉

群馬大学附属中学校

〈公立中学校〉

上里町 桐生市 前橋市 東吾妻町 鴻巣市 みどり市 安中市 高崎市 玉村町 太田市 秩父郡
北本市 渋川市 いわき市 明和町 板倉町 御殿場市 伊勢崎市 宇都宮市 水戸市 深谷市
千代田町 吉岡町

〈公立特別支援学校〉

東京都 神奈川県 埼玉県 群馬県 群馬県(学校事務) 高崎市 桐生市

〈公立高等学校〉

群馬県 群馬県(学校事務) 栃木県

〈私立学校法人〉

学校法人 東京農業大学

■幼児教育

〈公立幼稚園〉

日立市

■国家公務

文部科学省

■地方公務

群馬県(一般行政事務)	群馬県警察	前橋市役所
高崎市役所	渋川市役所	伊勢崎市役所
安中市役所	足利市役所	千代田町役場
邑楽町役場	軽井沢町役場	中央児童相談所一時保護所
東部教育事務所		

■医療・福祉業

前橋赤十字病院

■その他法人等

群馬県生涯学習センター NPO法人群大クラブ

■企業

東京フットボールクラブ(株)	前橋ゼミ	(株)トレック ヨダゼミ
(株)オンワード樫山	クリエイション・アイセイ	(株)JIN
中央労働金庫	AOKI ホールディングス	資生堂(株)
ディエスケーパーソナルスクール高崎校	(株)ジャンプジャパン	

平成24年度学部卒業生の就職先

【社会情報学部】

■地方公務

群馬県	前橋市役所	前橋市消防局
渋川市役所	太田市役所	富岡市役所
深谷市役所	由利本荘市役所	大館市役所
宇都宮市役所	三郷市役所	栃木県警察
市川三郷町役場	阿賀町役場	寄居町役場

■医療・福祉業

戸田中央医科グループ (株)ベネッセスタイルケア	深谷中央病院	(株)エムダブルエス日高
-----------------------------	--------	--------------

■幼児教育

学校法人竹美学園 ちくみ幼稚園

■その他法人等

前橋商工会議所	社会福祉法人 群馬県社会福祉協議会	群馬県国民健康保険団体連合会
---------	-------------------	----------------

■企業

JA東日本くみあい飼料(株)	JA前橋市	日本郵便(株)
大和ハウス工業(株)	(株)ヤマト	(株)一条工務店
住友林業(株)	NSKニードルベアリング(株)	日本板硝子(株)
東京カリント(株)	(株)協和	(株)ヤマニ熱工業
(株)プレミアムエージェンシー	(株)フォー・ジェイ	(株)スリーアイ
(株)シースタイル	コンピュータロン(株)	(株)システムエグゼ
(株)アプロ	(株)エス・シー・シー	エスピーエス(株)
(株)創和ビジネス・マシンズ	(株)ゼンリン	(株)NSD
(株)新興マタイ	(株)システムブレイン	(株)日本事務器
サンデンシステムエンジニアリング(株)	(株)ジーエークロッシング	(株)スタイラジー
(株)ネットウェブ	(株)ベルパーク	(株)進研アド
ぐんぎんシステムサービス(株)	(株)プロトコーポレーション	(株)ソフティ
(株)Klar	(株)ホンダロジティクス	(株)サカイ引越センター
東日本旅客鉄道(株)	東日本旅客鉄道(株)高崎支社	(株)メガネトップ
(株)ワークマン	(株)ノジマ	ネットトヨタ群馬(株)
(株)AOKI	トヨタ自動車販売	キャノンシステムアンドサポート(株)
(株)ベルク	(株)群馬銀行	(株)東和銀行
足利銀行(株)	(株)長野銀行	(株)東日本銀行
(株)山形銀行	(株)親和銀行	(株)松家ホールディングス
ケイアイスター不動産(株)	群馬セキスイハイム(株)	日本駐車場開発(株)
群馬県住宅供給公社	(株)ウィルレイズ	(株)アルファ
(株)オメガコンサルタンツ	穂苅清一事務所	是澤知宏税理士事務所
(株)天坊	(株)ニューコーポレーション	(株)ホテルセントパレス倉吉
NEXUS(株)	国立大学法人 千葉大学	国立大学法人 長岡技術科学大学
(株)グロブリッジ		

平成24年度学部卒業生の就職先

【医学部 医学科】

■医療・福祉業

群馬大学医学部附属病院	伊勢崎市民病院	桐生厚生総合病院
日高病院	富岡総合病院	済生会前橋病院
前橋赤十字病院	群馬中央総合病院	国立病院機構高崎総合医療センター
高崎総合病院	藤岡総合病院	東京医科歯科大学病院
東京女子医科大学病院	立川相互病院	東京都立松沢病院
東京大学医学部附属病院	東京臨海病院	多摩北部医療センター
東芝病院	国家公務員共済組合連合会虎の門病院	日本医科大学附属病院
順天堂大学医学部附属病院	国立病院機構 災害医療センター	東京都立広尾病院
NTT東日本関東病院	JR東京総合病院	関東労災病院
横浜労災病院	横浜市立市民病院	横浜市立大学附属病院
横須賀共済病院	埼玉共同病院	君津中央病院
総合病院国保旭中央病院	那須赤十字病院	足利赤十字病院
自治医科大学附属病院	筑波大学附属病院	JA長野厚生連 佐久総合病院
諏訪赤十字病院	組合立諏訪中央病院	相澤病院
聖隷三方原病院	北海道大学病院	大崎市民病院
石川県立中央病院	第二岡本総合病院	

【医学部 保健学科】

■地方公務

群馬県	前橋市	渋川市
太田市	桐生市	東京消防庁
横浜市	深谷市	古河市

■医療・福祉業

群馬大学医学部附属病院	医療法人育生会篠塚病院	伊勢崎市民病院
前橋協立病院	群馬県立小児医療センター	前橋赤十字病院
利根中央病院	老年病研究所附属病院	群馬中央総合病院
北関東循環器病院	桐生厚生病院	太田記念病院
公立富岡総合病院	わかば病院	済生会前橋病院
群馬県心臓血管センター	榛名荘病院	沼田脳神経外科循環器科病院
医療法人日高会日高病院	群馬県立精神医療センター	内田病院
医療法人石井会石井病院	中央群馬脳神経外科病院	介護老人保健施設 平成苑
太田福島病院	介護老人保健施設 平成苑	株式会社 アルプ
日本大学医学部附属板橋病院	東京大学医学部附属病院	総合母子保健センター 愛育病院
東京医科歯科大学附属病院	東京女子医科大学病院	NTT東日本関東病院
国立国際医療研究センター	慶應義塾大学附属病院	順天堂大学医学部附属順天堂医院
河北総合病院	横浜市立大学附属病院	三井記念病院
聖路加国際病院	上尾中央総合病院	鶴巻温泉病院
みさと健和病院	狭山病院	深谷赤十字病院
埼玉県立小児医療センター	三郷中央病院	武蔵嵐山病院
光の家療育センター	亀田総合病院	籠原病院
千葉大学医学部附属病院	国際医療福祉大学附属病院	栃木県医師会
自治医科大学附属病院	済生会三条病院	足利赤十字病院
つくば記念病院	長野赤十字病院	相澤病院
長野県立須坂病院	長野市民病院	佐久市国保浅間総合病院
佐久総合病院	あさかホスピタル	石巻赤十字病院
太田総合病院	角谷リハビリテーション病院	石和共立病院
井戸田整形外科医院	武市クリニック	

平成24年度学部卒業生の就職先

【工学部】

〔昼間コース〕

■地方公務

群馬県(行政)	群馬県警	高崎市役所
伊勢崎市役所	富岡市役所	藤岡市役所
東京都	警視庁	埼玉県
栃木県	栃木県(化学職)	茨城県
長野市役所	青森県	一関市役所

【工学部 応用化学・生物化学科】

■学校教育

白鷗大学足利高等学校

■医療・福祉業

社会福祉法人しんまち元気村

■企業

マレーシア富士電機社	川研ファインケミカル(株)	(株)小倉呉服店
わらべや日洋(株)	(株)群馬銀行	山崎製パン(株)
日東金属工業(株)	(株)Global Assist(ベスト学院グループ)	(株)フルヤ金属
(株)ネオキャリア	(株)ナカポーテック	北芝電機(株)
三福工業(株)	TPRサンライト(株)	アロン化成(株)
(株)スリーボンド	しげる工業(株)	日東金属工業(株)
カワチ薬品(株)	群馬ヤクルト販売(株)	三甲(株)
(株)ミツバ	(株)大協精工	(株)アベックス
医学部受験専門予備校YMS講師	(株)ゲイン	イビデン(株)
アドバンテックグループ	光洋産業(株)	富士ゼロックス群馬(株)
片平金物株式会社	(株)リニカル	農協
(株)ラムラ	富士山の銘水(株)	山岸製作所
柴田科学(株)	栗田煙草苗布製造(株)	アース環境サービス(株)
日清医療食品(株)		

【工学部 機械システム工学科】

■企業

伊勢崎ガス(株)	伊藤製パン(株)	マックス(株)
ヤマハ(株)	櫻金属金属(株)	(株)アートテクノロジー
(株)ナカヨ通信機	プログレステクノロジー(株)	(株)古川製作所
(株)カインズ	関上農機商会	フジテック(株)
(株)山田製作所	山形航空電子(株)	キャタピラー・ジャパン(株)
明治機械(株)	(株)キリウ	YKK AP(株)
(株)遠藤製作所	(株)アタゴ製作所	(株)柳田鉄工所
キヤノン(株)	コンピュータロン(株)	(株)千代田製作所
京三電機(株)	岡部工業(株)	カナイ石油(株)
小倉クラッチ(株)		

【工学部 環境プロセス工学科】

■企業

(株)やまひろ	日研総業(株)	国際衛生株式会社
岩井機械工業(株)	(株)日立ハイシステム21	滝沢ハム(株)
(株)北日本銀行	平成理研(株)	森六テクノロジー(株)
小山農業協同組合	日軽新潟(株)	アカオアルミ(株)
(株)サイサン	トッパンプラスチック(株)	(株)キンセイ産業
東海ゴム工業(株)		

平成24年度学部卒業生の就職先

【工学部 社会環境デザイン工学科】

■企業

足利ガス(株)	(株)森本組	東日本旅客鉄道(株)
佐田建設(株)	栃木セキスイハイム(株)	(株)ピーエス三菱
日本道路(株)	東テック(株)	日本上下水道設計(株)
日本コンクリート工業(株)		

【工学部 電気電子工学科】

■企業

アイ・シー電子工業(株)	巴産業(株)	(株)TGK
セントラルエンジニアリング(株)	三羽工業(株)	(株)上野振興公社
(株)アサヒ	(株)松村電機製作所	(株)三洋製作所
(株)山田製作所	クシダ工業(株)	三桜工業(株)
(株)アドテックス	富士通テレコムネットワークス(株)	P&G(株)
(株)産業経済新聞社	(株)東精エンジニアリング	三恵技研工業(株)
澤藤電機(株)	キャノンプレジジョン(株)	(株)ニュートン・フィナンシャル・コンサルティング
(株)ナブアシスト		

【工学部 情報工学科】

■企業

(株)ジーシーシー	東急不動産(株)	(株)システックス
(株)両毛システムズ	(株)シーテック	コンピュータロン(株)
木浪内装	(株)リコー	クロスイメージング(株)
(株)アルトナー	杉原エス・イー・アイ(株)	SETソフトウェア(株)
(株)TSP		

【工学部 生産システム工学科】

〔昼間コース〕

■企業

(株)ディスコ	大日本印刷(株)	富士古河E&C(株)
(株)メイテック	東京パーツ工業(株)	足利小山信用金庫
(株)山田製作所	澤藤電機(株)	(株)アテックスホールディングス
(株)エヌ・ティ・ティ エムイー	NECエンジニアリング(株)	club style
三菱自動車工業(株)	(株)高崎共同計算センター	(株)ワークエントリー
サンデン(株)	(株)栃木ニコン	システム・アルファ(株)
キャノンモールド(株)	(株)トラスト・テック	菊地歯車(株)
静甲(株)		

〔夜間主コース〕

■企業

(株)日立エンジニアリング・アンド・サービス	富士重工業(株)	星野物産(株)
秋田ダイハツ販売(株)	豊丸総合産業(有)	(株)長島エンジニアリング
高木金属工業(株)	タカテック(株)	東邦工業(株)
合資会社 オリエンタル	(株)静岡鐵工所	(株)キクヤ電機
日特エンジニアリング(株)	(株)トラスト・テック	トッパンコンテナー(株)
矢崎化工(株)	しげる工業(株)	スバルシステムサービス

【工学部 応用化学科】

■企業

前畑産業(株)	カイハラ(株)
---------	---------

3 学生受入センター

3.1 はじめに

学生受入センターは、オープンキャンパス、高等学校・大学連携授業等を積極的に実施し、各高等学校に向け本学のアドミッション・ポリシーの広報活動を行った。同時に、大学ホームページや各種大学受験案内などに入試情報を掲載し、広報活動を活発化した。また、各種イベントへの参加、高校訪問、外部広報誌の活用等による種々な宣伝活動も積極的に行った。

本報告書では、学生受入センターの2012年度における業務内容とその実績について報告する。

3.2 オープンキャンパス等

1) オープンキャンパス

平成24年8月4日（土）～5日（日）に、荒牧キャンパスでオープンキャンパスを開催した。これらの日は、これまでの6年間の広報に於いて「群馬大学はオープンキャンパスを8月の第1週の土曜日と日曜日に開催する」と案内してきた5回目の実施日にあたる。1日目は主に医学部・工学部、2日目は教育学部・社会情報学部を対象とした大学紹介・説明を行った。これまでと同様に、群馬・栃木・埼玉・新潟・長野の全高等学校を対象に、あわせて5県706校に案内した結果、延べ3,218名の参加者があった。

なお、当日実施したアンケート調査では、95%の参加者から参加して良かった旨の回答が得られたこと等から、本行事の意義を確認することができた。

2) 模擬授業・出前授業及び大学見学

平成19年度から基本的に学生受入センターに集約することにより、効率的な運用を図った。その結果、59高等学校に模擬授業・出前授業を実施し、17の高等学校が本学を見学した。

3) 進学相談会

本事業も上記2)と同様、平成19年度から基本的に学生受入センターに集約して行うこととした。今年度、関東地区の会場を重点的に、延べ30回の進学相談会に参加し、延べ964名余りの受験生、保護者等に対して入試広報を行った。さらに効果的な入試広報を行うため、地域や主催者別に各会場のデータを収集のうえ、受験生の特性について分析を行った。

4) ホームページ広報

本学ホームページに掲載する受験生向け情報の整理・見直しを行い、ユーザビリティの向上を図った。また、広報室と連携して、大手の受験産業関連企業が運営する進学情報ウェブサイトに入試情報を掲載し、より広範な広報活動を行った。

5) 学生受入方針の広報

オープンキャンパス、大学見学会及び進学相談会等の際、入試広報誌等を用いた学生受入方針（アドミッション・ポリシー）の積極的な説明を行った。なお、上記によるPR効果については平成24年度入学者を対象にしたアンケート方式で調査したが、その結果は各学部の学生受入方針（アドミッション・ポリシー）の更新に役立てることができた。

3.3 入学者の追跡調査

入試の状況、各種アンケート及び入学後の成績等、入学者の追跡調査結果については、平成 24 年 12 月に入学選抜方法研究報告書を発行し、次年度以降の入試改革に役立てることとした。

3.4 その他

群馬県教育委員会の要請を受け、高大連携推進協議会に参加し、県内各種高校の教員と高大連携の進め方について意見交換を行った。

また、群馬県高大連携フォーラムに参加し、高大連携に関連する教育の専門家の講演を聞いた後に、高大接続の望ましい在り方や高大連携の具体的な方法などについて情報交換を行った。

4 健康支援総合センター

はじめに

健康支援総合センターは平成 18 年 4 月に保健管理センターから改組された学生の健康管理を目的とした、大学教育・学生支援機構の 1 センターとして位置づけられた組織である。そしてその業務範囲、特に教職員の健康管理に関わる範囲については平成 20 年度に総務部との協議で確定された経緯が有る。その協議で業務範囲が確認された後に健康支援総合センターとしての最初の業務報告書が平成 19 年度版として公表されたのである。

具体的には大学の独法化に伴い教職員の健康管理は学校保健安全法よりも厳しい労働安全衛生法に則るべきであることから、たとえば旧保健管理センターの医師に課されていた荒牧事業場の保健管理医業務（保健管理センター規程第 6 条）は荒牧事業場の産業医の業務とされた。これにより荒牧事業場の保健管理医業務は健康支援総合センターの業務から削除され（健康支援総合センター規程）、健康支援総合センターは学生のための施設となったのである。これにより、健康支援総合センターは旧文部省が目指した、大学への保健管理センター設立の趣旨の姿（保健管理センターの設置について）に復したのである。

今回の報告は健康支援総合センターとしては平成 19 年度報告書から 6 回目である。この 6 年間に健康支援総合センターの活動は第 1 期、第 2 期中期計画に従い、大学執行部、特に大学理事である石川健康支援総合センター長の下に着実に確実に発展をしてきた。

しかし、健康支援総合センターは未だ整備の過程にあり、配置されている医療職が絶対的に不足している。この状況に対しては第 1 期中期計画で改善されるべき課題であったが、第 2 期中期計画案として引き継がれ進行中である。

配置人員が不足であっても健康支援総合センターは学生の健康の保持増進に有用な事項については、実施できる形でとにかく事業を立ち上げることを主眼に進展を図ってきている。

今回は平成 24 年度の健康支援総合センターの活動を報告するが、この報告書から皆さんが健康支援総合センターの業務実態と抱えている課題を知り、併せて業務に対する健康支援総合センターの工夫と姿勢を感じていただければ幸いである。

4.1 平成 24 年度年間業務実施概要

健康支援総合センターの業務は前年度の運営委員会で審議されて決定されている（平成 24 年度業務）。その定例的な業務の報告は順次述べるとして、定例的業務とは別に平成 24 年度に行った二つの事業と、長年の懸案事項が二つ解決に向かつて進展がみられたのでこの事を報告したい。

下記の 4 事項である。

- ①荒牧キャンパス昭和キャンパスでカウンセリング対応できる曜日を増やすことで学生への便宜を向上させた。
 - ②発達障害の可能性がある学生への支援策を障害学生支援室のスタッフと連携し様々試みた。
 - ③健康診断の日程作成作業に教育基盤センターとの協議の場が設置された。
 - ④昭和キャンパスへの看護師の配置（週に 19 時間）が継続される事が決定した。
- それぞれについて詳しく報告したい。

- 1) 昭和及び荒牧キャンパスにおける学外カウンセラーによるカウンセリング対応回数及び曜日の拡充。

これまで、荒牧及び、昭和キャンパスでは、鈴木臨床心理士（学外）による週 1 日の相談日をもうけていた。しかし、曜日が固定されており、授業や実習等の兼ね合いで利用しにく

い場合がある、違うカウンセラーにも相談してみたい、お昼時に相談したい、といった要望も上がっていた。そこで、現在のカウンセリング能力を維持しつつ、限りある予算内でできる試みとして、昭和及び荒牧キャンパスで隔週2－3時間、お昼時を含める相談日を設け、それぞれ別の新たなカウンセラーに対応いただくことにした。昭和は谷田部カウンセラー、荒牧は諸星カウンセラー（後期から）である。利用実態を分析し、来年度の予定に生かしていく方向である。

2) 発達障害学生への支援策

春の健康診断で、発達障害のサポート希望の有無を聴取し、既に告知され自己認知されている学生の実態を把握し、可能な範囲でのサポートを試みた。また、少数ではあるが、親からの相談を受け入れ、学内でできる対応策を家族面談の形で対応した。学部教員からの要望に応え、学生面接及び指導、診断や対応策の助言、実習や学習に関する意見書の提出、など、多岐にわたる関与を行った。障害学生支援室教員（霜田先生）と綿密な連携をとり対応を行った。

3) 健康診断の日程作成作業に教育基盤センターとの協議の場の設置

健康診断は学校保健安全法により6月までに完了させねばならないこと、医学部附属病院の医師の協力が必須な事から短期間に終了させなければならないという制約があった。このため健康診断は在学生においては新学期が開始される春休み中に行うように日程を変更してきた経緯があった。しかし、新入生については入学式が終了してからでないと学生証が配布されず、学生証に記載されている学籍番号で個人を識別する仕組みになっている健康診断は入学式前に行くことは不可能であった。このことから健康診断と教養教育の授業は平行して行われる事となり、教養教育の授業を担当する先生方の協力が不可欠であった。この状況でも例年の新入生の健康診断受診率はほぼ100%であった。しかし学生および教養教育担当の先生方双方から健康診断と授業の平行実施は不都合であるとの声がよせられていた。そこで健康支援総合センターの長でもある大学教育・学生支援機構長から教育基盤センター運営委員会でこの課題に対する改善策を審議するように取りはからって頂くことができた。その結果として学生支援課の御努力による学籍番号の早期配布が可能となる事及び教育学部の在学生の健康診断を授業開始後にずらせる事を介して平成25年度の健康診断では入学式前に新入生の健康診断を終了できる見通しがつき、健康診断と教養教育の平行実施を避ける事ができる日程案を作成することができた。その日程の決定のために第15回の運営委員会がメール会議で開催された。この事を経験して教養教育の授業と健康診断の平行実施を避ける具体的な方策について教育基盤センターでの認識が高まり、平成26年度の改善された健康診断日程の作成へと繋げていく予定である。

4) 昭和キャンパスへの看護師（健康維持・向上相談員）の配置の継続決定

この昭和キャンパスへの医療職の配置は平成23年10月から配置され、平成24年度の試行配置の経過を見て24年度中に継続配置について審議するとの経緯であった。24年度の第16回運営委員会において継続配置が決定された。

以上、平成24度に行われた定例業務以外の主な健康支援総合センターの活動を報告した。

以後に定例業務の報告をするが、最初にご理解頂きたいのは平成19年度の業務報告書で述べたように健康支援総合センターの業務の原則は前橋地区の学生が対象範囲であって、桐生地区、太田地区の学生は含んでいない、両キャンパスの工学部の学生の保健管理は附属学校がそうであるように工学部が委嘱する非常勤学校医によってなされることになっているのである。

しかし、健康診断時における内科診察、胸部レントゲン撮影検査の経費の支払い、学外臨床心理士によるカウンセリング業務及び平成22年度から開始したキャンパス・ソーシャル

ケースワーカー業務に限っては全学一体的に健康支援総合センターが行っている。これは非常に特異な業務態勢である。この業務形態を理解するには本学の学生への健康管理に対する各学部の対応の歴史を知らなければならないが、ここではそれについては触れない。

このような歴史的に負の財産を背負っているという困難は有るものの、健康支援総合センターはわずかずつつではあるが、学生の健康支援事業を確実に拡大しながら高度化してきている。以後、平成 24 年度の定例業務内容について順次報告したい。

4.2 学生定期健康診断

4.2.1 及び 4.2.2 学生の定期健康診断状況

平成 24 年度の学生定期健康診断は、整理番号 1 及び整理番号 2 に示す日程で行われた。この日程は平成 23 年 7 月 11 日に行われた第 12 回健康支援総合センター運営委員会（委員長：石川 治健康支援総合センター長 教育・国際交流担当理事）において承認されたものである。学生の定期健康診断日程は翌年の胸部レントゲン撮影車の配車を 7 月中には学外の業者に予約しなければならないことから例年、前年度の 7 月中には運営委員会に諮り決定している。

また、学生定期健康診断には医学部附属病院から半日を 1 回と算定して延べ 32 名（桐生地区派遣の医師を含む）の医師の派遣の協力を頂いた。また、検査及び診察補助を目的に看護師を 1 日 1 回と算定し、健康支援総合センター経費で前橋地区の健康診断に延べ 42 名を学外機関から雇い入れた。

4.2.3 及び 4.2.4 学生定期健康診断受検状況

整理番号 3 及び整理番号 4 に示すとおりである。学部学生の受検率は前橋地区では全体で 94.0%，桐生地区では全体で 88.4%と極めて良好である。この受検率は全国的にもトップレベルである。学部別では教育学部 98.9%，社会情報学部 92.5%，医学部医学科 82.8%，医学部保健学科 96.3%，工学部 1 年 97.5%，工学部昼間 2 年以上 88.9%，工学部夜間主 67.9%と工学部夜間主以外は 82%以上の受診率であった。

1 年生だけを見ると教育学部 100%，社会情報学部 100%，医学部医学科 97.3%，医学部保健学科 99.4%，工学部 97.5%とほぼ全員が例年と同様に受検した。健康診断日程表で明らかなように健康診断時間は、教養教育の講義時間と平行して行われており特別に休講措置は取られてはいない。それにもかかわらず例年 1 年生のほぼ全員の健康診断がなされ続けているという事実は、教養教育の授業を担当された先生方の学生の健康診断受検行動に対する多大な理解と御協力の賜と考えられる。本学における学生の健康診断が医学部附属病院の先生方の献身的協力により成立していることをも念頭に、教養教育の授業担当の先生方の引き続きの御協力を御願いたい。

大学院生の受検率は、医学系研究科の受検率が 18.0%と極端に低値であった。医学系研究科の院生は医療機関に就業している社会人が多く、所属先の医療機関で健康診断を受けているので大学での健康診断の必要を要しないとの可能性もあるが、今後何らかの方法で所属先での健康診断の実績を含めて実質的受検率を上げることが望まれる。医学系研究科には外国人留学生が多く、彼らは他の医療機関での受検の機会もなく、感染性肺結核症の発生をみたことでもあるので、健康支援総合センターとしては留学生にたいしては後の 4.3 の項で述べるようにクオンティフェロン TB 検査をして結核感染のチェックはしているが発病に関しては胸部レントゲン検査が欠かせないので、外国人留学生の大学院生については指導教員の受検への特段の御協力をお願いしたい。

4.2.5 学生定期健康診断における疾患別要観察者数（前橋地区）

前橋地区の定期健康診断時、問診だけで明らかにされた特に管理を要すると判断された病態と該当学生数を整理番号5に示す。特に突然死の原因となりうる先天性心疾患やWPW症候群が5名に見つかることは注目に値する。また、ここ数年は治療中の糖尿病が必ず見つかるようになってきている。腎性糖尿は尿糖陽性から精査で診断された者であり、毎年数名が新たに診断される。また、健康診断時にうつ病や統合失調症と申告する学生が出て精神科、心療内科にて加療中の学生数が16名と捉えられるようになってきたことは最近の傾向であり、社会の精神疾患への理解が進んだのかもしれない。今回は資料に示すように延べ928病態が明らかとなった。これらの病態を有する学生には、健康診断日の最後に健康支援総合センターの内科医が総合判断し健康診断の事後指導を兼ねて各人に簡単な指導を行っている。本人が希望する場合には医学部附属病院を含めた医療機関を照会（当該学生には医療機関の受付時間とアクセス法を記載したパンフレットを渡す）したり、紹介状を作成して渡したりしている。特に気管支喘息を持つ学生については必ず主治医を持つようにと近くの喘息専門外来を有する医療機関に紹介している。照会をしたり、紹介状を発行したりする学生数は合わせて毎年80名程度である。近年は簡単な病態や返答を要しない症例については医療機関の案内にとどめて紹介状の発行は省略しているので発行部数は減少している。このように多くの病態が健康診断を契機に学生に改めて自覚されることは学生にとっても好ましく、適切な指導が受けられる機会が提供されたことにもなる。本学の定期健康診断が学生の健康の保持増進に寄与している証左である。また、この作業が本学の学生の定期健康診断受検率が驚異的に高く、高学年でも落ちない一つの要因ともなっていると判断される。

4.2.6 学生定期健康診断時に発見された異常者数と事後指導結果（前橋地区）

学生の定期健康診断で異常値を呈した数と二次検査の結果を整理番号6に示す。まず対象者には二次検査を健康診断日の直後に行う。二次検査でも異常値が出た場合は医学部附属病院を含めた医療機関での精密検査のための紹介状を発行している。心疾患については、高校生までの検診時における診断技術の高度化で保健管理上問題になる異常が学生の定期健康診断で新たに発見されることは殆ど無い。しかし、尿潜血、尿蛋白や高血圧に関しては診断能力が心臓ほどは高度化していないので診断がつかないという者が若干ではあるが残る。最後の手段として経過観察となるが、健康診断を受けた最終的な判断が、要経過観察では継続して健康診断を受けようとする学生の意欲を削ぐことになるので、卒業までにはきちんとした診断を付けさせたいと苦勞をしているところである。具体的には最終学年では紹介状を医療機関に発行して、卒業後の健康管理上の指導を含めての精密検査をお願いしている。また、学校保健上最も注意すべきは胸部異常陰影が肺結核である者を確実に検出することである。そのために健康支援総合センターでは健康診断で胸部異常陰影が疑われた学生に対しては、精密検査を受けるよう再三にわたり勧告する。最終の手段としては学生が正月に帰省することを予測して、正月前に保護者宛に、精密検査を受けることを、保護者からも勧めて頂く旨の依頼文を郵送している。ここまでして精密検査を受けない者に対してはもはや打つ手が無く、大学としては管理責任を果たしていると考えている。

心電図の検査においてはWPW症候群（心臓の刺激伝導系の奇形に起因する不整脈の1種）の扱いに特別の配慮をしている。健康診断時に不整脈の診断歴のある学生で安全な不整脈との確定診断がついていない者については、まず全員が心電図検査を健康支援総合センターで受け、病的な場合には改めて専門医療機関を紹介している。WPW症候群については、全員について健康支援総合センターで心電図を取り、WPW症候群について教授（内科医）がガイダンスし心電図を渡し常時携帯するように指導し専門医を紹介し、心臓カテーテルアブレーション術（刺激伝導系の一部を焼却する治療法）の適応について判断を受けるように勧めている。

健康支援総合センターでは、平成6年度からBMI（体格指数）が25以上の者を肥満者とし、該当者に呼びかけて早朝空腹時での血糖値、インスリン値、血中脂質の測定を健康診断事後

指導業務に位置づけて実施している。平成 24 年度は 22 名が受検した。検査結果は全員に説明し、後記する肥満教育プログラムへ勧誘した。肥満教育プログラムは健康診断後に開始し年間を通して行っている。その成績、効果については下記に示す全国大学等保健管理研究集会に発表し論文数編にまとめている。肥満対策は、我が国の保健施策上の重要な課題であり、平成 20 年度からはいわゆるメタボ健診と称される特定健診として行政レベルで肥満対策が開始された。このような情勢をふまえて若年成人である大学生への肥満対策は学校保健上でも重要な課題であると健康支援総合センターは捉えている。

大学生の健康の保持増進に取り組む健康支援総合センターの課題は多岐にわたるが、本学ではそのために配置されている教職員は極めて限られている（全国の同等の学生数を擁する他大学と比較して配置職員数は最低レベルである）ことから、必要不可欠な課題に対して順に教職員の能力を判断しつつ教職員を配置しなくてはならない。学校保健としては授業の成立を破壊する結核をはじめとする感染症の集団感染の発生の防止が最大の任務であるが、次は学業を中断に追い込む可能性のあるメンタルヘルス対策であり、国策となった肥満対策である。メンタルヘルス対策としては、施設に配置されている医療担当者の人的条件（人数及び能力）から、有症学生の早期発見にむけてのスクリーニング方法の充実と医療機関への受療促進が重要項目である。早期に対応することで、不登校や休学、退学などの発生を防止できると考えられる。

以上の考え方を健康支援総合センターの運営委員会で承認していただいて現在の業務形態を形成してきた。

4.2.7 健康診断時における精神保健調査

本年度の精神保健調査は、前述したように、気分変調、精神病兆候、食行動異常をふくめた心身の問題を早期に発見することを目的に、従来の方法を統計学的に解析し、新たなチェックリストを改編した。本チェックリストの有用性や関連する解析結果については、後述のように学会発表としてまとめている。

本年度の結果を整理番号 18 に示した。これまでの慣例に従って、新入生を対象とした調査と、在学生を対象とした調査を分けて実施した。実施する検査方法は毎年改良を重ねており、得られた検証結果の一部は学会で発表した。ちなみに要医療とは医療機関での投薬治療が必要と判断された者、要カウンセリング者とは医療機関で投薬の必要はないが引き続き健康支援総合センターで面接を継続的に行うケース、その他随時の相談を強く推奨する学生に区別した。既に医療やカウンセリングを内外の機関で受療しているものは、括弧内に別途記載した。

新入生を対象とした調査結果は、資料表上に示すとおりである。健康支援総合センター准教授を中心に医学部附属病院精神科神経科医師及び健康支援総合センターの学外臨床心理士により面接を行った。医学部附属病院精神科神経科医師には定期健康診断内科診察の代替としてご協力をいただいているが、学生の健康診断への応援としては高頻度であり、紙面を借りて神経精神科教室に深く感謝申し上げる。平成 24 年度は新入生 1,220 名のスクリーニングを行い、要面談者 59 名を検出し、33 名に面談を施行、医療機関紹介 4 名、要カウンセリング者 4 名、随時の相談推奨 13 名を検出した。

在学生の精神保健調査も前述したように、改変されたスクリーニング調査票の簡易版 GUMI への記入方式で行い、面談と診断は健康支援総合センター准教授が中心となり、昭和、桐生、太田の各キャンパスに出向いて行った。平成 24 年度は 4,146 名を対象として 109 名を検出し、50 名面接を行い、要医療者 4 名、要カウンセリング者 11 名、随時の相談推奨 16 名を検出した。面接数、要医療者はほぼ同じか微増、通院中の 5 名を考慮すると、メンタルヘルスの重要性が強調される結果となった。

今年度も、抑うつ状態のみならず青年期に問題となる精神症候をなるべく早期に対応することを目指して、2 次健診で面談と助言、医療への紹介を行った。

4.3 外国人留学生健康診断状況

外国人留学生の特別健康診断を毎年11月頃に行っている。平成21年度からは留学生の結核感染の有無を検査するクオンティフェロンTB検査と引き続きのメンタルヘルスのスクリーニング検査を行った。日本人では全く発見されない感染性結核が留学生では過去に3名が発見されたこと、及び結核感染をツベルクリン検査と比較してより適切に診断できる検査法であるクオンティフェロンTB検査が一般化されたという二つの理由から、第8回健康支援総合センター運営委員会の議決を経て、クオンティフェロンTB検査を開始した。荒牧キャンパス、昭和キャンパスで1回、桐生キャンパスで2回、1回の検査に3から5時間をかけて行っている。対象者は4月から本学に在籍となった留学生及び平成23年度の検査対象でありながら検査を受けなかった者とした。

受診率及び検査結果を整理番号7に示す。今回も国際交流課による受検対象者への通知の徹底をしていただくという協力のおかげで受検率は97.9%とほぼ完全で、陽性者が9名(9.6%)、擬陽性が4名(4%)であった。陽性者、擬陽性者は次のように指導した。4月に胸部レントゲン検査を受けて異常が無い者は毎年必ず胸部レントゲン検査を受けるように指導した、それ以外の者は医療機関を紹介した。

陽性率ではあるが、医学部1年生への検査では陽性者が2%弱であったことから外国人留学生の陽性率は日本人学生の数倍はあるようである。よって本検査の継続は当分は必要と判断される。

この検査結果は日本人の医学部学生を対照として医学部臨床医学講座から論文として報告された(Tohoku J. Exp. Med., 230: 87-89, 2013)。

なお、今回のメンタルヘルス・スクリーニングは前述した在学生のために毎年改良を行っている検査方式の英語版を用いて行った。2次面接者を3名抽出し、1名は精神科医と面接し、大きな問題なく助言にてフォロー、その他は都合により桐生キャンパスのカウンセリングや留学生センターの相談窓口に関する情報提供を行った。

4.4 ウイルス性疾患抗体検査

本学では附属病院での臨床実習を安全に行うための教育上の安全配慮策として医学部が主体で平成18年度から医学部の新生全員に対して麻疹、風疹、水痘、ムンプス(流行性耳下腺炎)、B型肝炎に対する抗体価を測定して陰性者にワクチンの接種を行うこととなった。具体的には、採血検査及び麻疹、風疹、水痘、ムンプスのワクチン接種は医学部附属病院感染制御部が、抗体価検査は同検査部が行っている。B型肝炎ワクチン接種は医学部の委嘱により健康支援総合センターが行っている。整理番号8に示すようにワクチン接種前のB型肝炎ウイルス抗体陽性者は1.8%であり、全員が保健学科の編入学生であった。

麻疹、風疹、水痘、ムンプスの抗体検査の結果を整理番号8に示す。話題の麻疹に対しては約3.7%が陰性であった。国によって平成20年度から開始された第4期の麻疹ワクチン接種が効果を発揮してきたように思われる。流行を抑制するには疫学的には人口の95%が抗体を有する必要があるとされているので、本学の医学部ではほぼ満足すべき状態であると判断される。これら抗体が陰性の者に対しては医学部附属病院感染制御部がワクチン接種を行った。

この検査値の経年変化については医学部臨床医学講座から論文として報告された(Jpn. J. Infect. Dis., 66, 411-415, 2013)。

この事業に関わる経費は全額新生の負担で行っている。新生に対する検査及びワクチン接種の意義の説明は医学部の判断で行っており、ワクチン接種に関わる個別指導及び副反応への対応は健康支援総合センターで行っている。

4.5 健康支援総合センター利用者等

健康支援総合センターで行った健康相談人数、件数、内容について報告する。学外のカウンセラーによる業務は別の項（整理番号 19）で報告する。

4.5.1 利用者数

健康支援総合センターの利用件数を所属学部別に分類した結果を整理番号 9 に示す。桐生キャンパス所属の学生数は荒牧キャンパスで研究をしたり、クラブ活動で荒牧キャンパスに来ている時に利用した者の数である。それぞれ月別に集計して表示した。年間延べ 815 名の利用があった。延べの計算ではあるが、この利用数は前橋地区の学生の約 4 人に 1 人が利用したことになる。大学の保健施設としては十分に機能している状態と判断される。

4.5.2 利用件数

利用件数を健康相談、精神保健相談、健康診断書の発行の 3 つに分類し月別に集計した結果を整理番号 10 に示す。

この表での健康相談は応急処置を含むからだの健康相談としてまとめている。

健康診断書は各キャンパスから自動発行されること、及び就職時の提出が義務づけられなくなったことから健康支援総合センターからの発行数は激減している。しかし、様式が決められている健康診断書については手書きをして発行しておりその数は 19 通であった。

学校保健安全法に定められている（健康診断で行う検査項目）以外の検査項目についての記入を求められる診断書については健康支援総合センターでは作成できないので所属学部の担当部署を適して医療機関で作成していただくように指導している。多くは教育学部の教員としての就職や医学部学生の研修病院のマッチング試験時に提出を求められる健康診断書であるが、最近は当センターに作成を依頼に来る学生は減少している。

4.5.3 疾病領域別利用者数

疾患領域別利用者数を月ごとに集計した表を整理番号 12 に示す。精神科 315、呼吸器系 159 が圧倒的に多数であり、外科・整形外科 116、内分泌・代謝系 50、と続く。呼吸器系 159 はほとんど、がいわゆる風邪である。

精神科は 315 と去年の 1 割増である。内訳は精神科医 162、カウンセラー 143 で、医療機関への紹介が 15 で、カウンセラーの対応数が 30% 増加した。昨年度と同様、身近なテーマに関するカウンセラーによる心理相談、より複雑な問題に対する精神科医の診断面接及び精神療法、さらには重度慢性化に至る前の早期医療機関受診、というトリアージの流れが確立されつつあることを示している。なお、整理番号 14 に示すキャンパスごとの相談数内訳で、工学部学生が荒牧キャンパスで 45 名、桐生キャンパスで 18 名あるが、前者は主に 1 年生が対象で、校舎には准教授のみを含めており、カウンセラーによる相談は整理番号 19 カウンセリング数にカウントしてある。いずれにせよメンタルヘルス支援に関するシステムを工学部や医学部においても拡大することは、今後の重要な課題と考えられる。

外科・整形外科 116 名は外傷、捻挫が殆どである。風邪と外傷の利用者が約 275 名で全体の約 33% を占めている。この分野は応急処置として看護師が主に対応している分野である。内分泌・代謝系 50 名は健康支援総合センターの医師が内分泌、糖尿病の専門医であることからこの分野については外部の医療機関に任せることなく健康支援総合センター医師が継続的に学生との相談を行っているからである。この分野は前年度と比較して大幅に利用数が減少したが同一人の定期的な受診の回数を減らして自己管理に任せるといった試行を行ったことによる。その成果は平成 24 年度の関連学会に発表した。

風邪や外傷という応急処置ではない利用者が約 7 割を占めていることは本健康支援総合センターの医師やカウンセラーたちが学生の日常の健康相談機関として十分に機能していることを示唆しているものと判断できる。

4.5.4 医療機関紹介の診療科分類

健康支援総合センターから他の医療機関へ紹介した患者の紹介先を診療科毎に分類して月毎に集計した表を整理番号 13 に示す。精神科を含めてのべ 120 回の紹介をしている。大学が 35 週開講しているとして 1 日あたり 1 人程度が医療機関への紹介を要する学生が健康支援総合センターを訪れたことになる。応急処置までが医療行為として期待されている健康支援総合センターとしては妥当な数であろう。これだけ多数の紹介数があるということは健康支援総合センターが学生にとって良い健康相談機関であることを示しているものと考えられる。

紹介先は全科に及ぶが、外科・整形外科 32 名、皮膚科 14 名が目立つ。これは健康支援総合センターの医師に外科系がいないことと、学生にとってちょうど相談しやすい疾患であることの二つの理由からだと考えられる。

4.5.5 薬剤別処方日数

健康支援総合センターで処方した薬剤の量を投与日数で集計し、整理番号 16 に示す。合計 799 日分を処方した。解熱・鎮痛剤、感冒剤が 7 割弱を占めている。応急処置として処方できるとすればこうなるであろう。補液についても経口摂取可能な状態では行わず、経口摂取が不可能な状態では医療機関に転送することとしたので利用は無くなった。また、昨今、向精神薬については厳密な管理使用が法律で規定されており、該当薬品は扱っていない。

4.5.6 常備薬使用数

上記の内容を使用薬剤毎に月毎に集計して整理番号 17 に示す。錠剤は 1 錠、軟膏等外用薬は 1 本 1 瓶を 1 単位として算定した。総合計 1,994 単位中で感冒薬である PL 顆粒が 855 単位と圧倒的に多い。次が解熱鎮痛薬 671 単位、これらのほとんどは抗生剤と合わせて主に上気道感染症に使用したものである。次いで整腸剤、抗胃炎剤の合計が 240 単位で続く。次いでシップ剤の 46 単位となる。これら 4 種類の合計が 1,965 単位と処方の 9 割を占めている。この事実は応急処置だけを行い継続的な加療を行わない大学内での医療機関としての機能を明確に表している。

また、年間 1,994 単位の処方数は学生の応急処置用の医療施設として健康支援総合センターが十分機能していることを表していると考えられる。

基本的には生活指導や肥満教育などの保健指導業務やカウンセラー業務には薬剤は使用されないの、ここに挙げた数字だけでは健康支援総合センターの診療内容の全体を知ることにはできないが、応急処置を求めて利用する学生の疾患の質と割合が類推できる興味深い統計である。

4.6 健康相談・精神保健相談

4.6.1 健康相談・精神保健相談の対応内容

健康相談をからだの健康相談とこころの健康相談に大きく分けて対応毎に月毎に集計した結果を整理番号 11 に示す。

この表では精神保健相談は健康支援総合センター内での利用者数（主に荒牧、昭和キャンパス）を示し、精神科医によるものを「准教授」、学外カウンセラーによるものを「カウンセラー」と表した。「カウンセラー紹介」は学外のカウンセリング施設への紹介をさす。健康支援総合センターでは学校医である産科婦人科医に定期的に完全予約制でレディースクリニックを開催していただいているのでその利用数を示した。数は少ないが、健康支援総合センターの医師としては専門的判断が困難であり、専門医での治療が必要かどうか迷っている婦人科受診をためらっている女子学生たちにとっては極めて大切な外来となっている。

救急転送は 6 件であった。救急転送の原則は前橋市の救急車での医学部附属病院への搬送

であるが、場合によってはタクシーによる輸送を行っている、その際には看護師が添乗することになっている。

4.6.2 精神保健相談者数

健康支援総合センター内で行った精神・心理相談者数を学生の所属キャンパスに分類し、月毎に集計して整理番号 14 に示す。精神科医である准教授と 2 名の学外カウンセラー（10 月より開始された太田キャンパスでのカウセリングは桐生工学部に含む）、及びキャンパスごとの業務を合計して集計している。

准教授カウセリングは、総数が赴任前の状況より激増しており、平成 24 年度は平成 23 年度と同様数で高止まりである。平成 24 年度は平成 23 年度と比較して、カウンセラーによる総数は 143 と 30% 増加した。一方で、医療機関への紹介は、相変わらず 15 と減ってはいない。以上より、相談の総数は増加したが、カウンセラーが抱えていた事例で、医療機関の関与が必要な重度もしくは複雑慢性化したケースが適切に准教授への相談受診につながり、結果として医療機関とスムーズな連携がとれつつあることを示唆している。

なお、学生支援センターの学生相談・生活部会が毎年 2 回行う学生の欠席状況調査の結果で、担当教員から精神科医との面談が必要と判断された者に対して准教授が精神保健相談を行っており、本人が来所した事例ではその数を含めている。ただし、実際は数に含まれないものの、学生本人に対する以上に、家族との頻回の電話相談、教員との頻回の面談やメール相談を繰り返していることを指摘しておきたい。それ以外にも教職員との電話やメール相談が少なからずあり、家族からの電話問い合わせや、家族のみとの家族面談も増えている。

今後とも精神保健相談者数は量、質共に増加、重症化することが予測されるのでカウセリング時間の増加は避けられないと判断される。

4.6.3 精神保健相談内容

相談に訪れた動機を 5 つのカテゴリーに分類し、月毎に集計して整理番号 15 に示した。総数は 366 と昨年度より増加した（3%）。心体の不調を動機に訪れる者がほとんどであるが、修学上の問題や対人関係を動機とする学生も多い。実際の来談原因内訳は、部活動や学内外の対人関係、進路就職、家族問題、性格の悩みなどが重複し、その内容も多岐にわたる。診断も、うつ病、統合失調症、不安障害、摂食障害と多様で、その多くは適応障害圏と考えられた。

一方で、主訴の基盤として発達障害、もしくは自閉スペクトラム特性を少なからず有している学生が、さまざまな対人コミュニケーションや集団行動、修学上の困難を抱え、2 次的な心身不調を呈する事例も多かった。こうした学生のほとんどは、発達障害的個性に関する確定診断を行うには、発育養育家族歴など情報が乏しく、横断的な主訴を通じて特性を推測し、助言や指導を行う以外手立てが少ない。むしろ、教職員や友人など周囲に対するコンサルテーション（構造化や視覚化などのかかわりの工夫）が有用で、実際そうした助言工夫が有用だった事例も多かった。

表示していないが、イーティング・クリニックとして対応した事例は例年数名で、運動部に関連する体重管理の悩み、高校から続く食行動の乱れ、ストレス緩和として機能してしまう食行動異常などが主訴であった。当初イーティング・クリニックを相談窓口としつつ、その後一般的なカウセリングや継続相談、時に受療に至る事例もあった。食行動の悩み（ダイエット、過食、嘔吐など）を契機として、抱えている様々な問題にとりくむ糸口になった可能性がある。また、数名は医療機関にもつなげており、摂食障害の早期発見・対応に役立つと考えている。この活動については 24 年度の関連学会で結果を発表した。

健康支援総合センターではメンタルヘルスのサポートの案内及びメンタルヘルスの自己管理を目的として、「メンタルヘルス部門」のインターネット・ホームページを開設し、自己チェックプログラム、カウセリング案内、メンタルヘルス通信などの情報配信を随時行う

事業を准教授が平成 22 年より開始し継続していることが精神保健利用者数の増大に繋がっている。

また、同様に准教授が平成 22 年度から、身長体重測定値から病的な感じが疑われる学生（BMI17 以下）に対しては健康啓蒙パンフレットを作成し配布するとともに、食と体型に関する問題（ダイエット、過食、嘔吐、やせ薬など）に特化したイーティング・クリニックを開設し、摂食障害関連問題の予防と啓発、早期対応を開始し継続している。このクリニックが有効であることは上述したとおりである。

4.7 カウンセリング状況

4.7.1 学外臨床心理士による心理カウンセリング数

この業務は健康支援総合センターの業務として平成 19 年度から学内全 3 キャンパスで開始したものである。利用者数は整理番号 19 のとおりである。開設時間は荒牧、昭和キャンパスがそれぞれ週に 1 日と隔週に 2 及び 3 時間、桐生キャンパスが週に半日を 2－3 回、太田キャンパスで隔週半日（3 時間）である。

昨年度に比し利用者数や利用回数はほぼ横ばいであった。数ではなく質的に、対応の難しい相談が増えているという臨床心理士からの報告があり、さらなる意識の向上が求められる。特に、ひきこもりで家族にさえもうまく関われない場合、退学してしまい大学とのつながりも切れてしまうケース、当人及び家族に問題意識が無く精神保健サービスそのものにアクセスしない場合、などがそれである。

一方で、昭和・荒牧キャンパスでは、カウンセリング業務時間が決められた曜日にしか行われず、授業や実習の都合で受けられない学生がいることが指摘されている。荒牧キャンパスでは准教授カウンセリングがそれを補完しているが、昭和キャンパスから荒牧まで来所するのが難しい場合もあり、昭和キャンパスでのメンタルヘルス対応の充実が今後の課題の一つである。

なお、教職員に対するカウンセリングは、緊急的なガイダンスや窓口的対応に限っても年間に 13 回あった。この事業は他の職員が身近に勤務し、学生が頻回に訪れるような場所で、精神的悩みを抱えた教職員が安心して相談できうるとは考えにくいという問題が有る。また、投薬検査が十分でない状況では医療事故等の危険もあり、守秘義務や適切な医療提供に鑑みてもデメリットが多い。よって、可能な限り外部の心理相談機関（県労働安全衛生センターなど）や心療内科・精神科等の医療機関で診療を受けるように助言している。今後は大学として教職員のメンタルヘルスへの真摯な取り組み、たとえば適切な外部機関（EPA など）が必須である。精神疾患での休職数増加や労災、自殺予防の社会的動向を見ても明白である。

4.8 教員による教養教育への参加等教育への参加状況

健康支援総合センターの教員は教養教育の講義を担当している。具体的には例年のように健康学原論の中で前期に教授、准教授がそれぞれ 90 分の講義を 5 回行った。

教授は「大学生に必要な保健知識（酒の健康学、たばこへの対応、避妊と性感染症、依存症）」、准教授は「大学生のメンタルヘルス、摂食障害について」をテーマに 1 年生を対象に講義を行った。1 回につき約 300 名の学生を相手に 1 コマで大量かつ複雑な内容を講義する必要から、一方的に知識を伝えるだけの講義となっている。学生も講義中の私語や入退室が極めて多く、基本的な聴講マナーに問題が多いのも事実である。

大学生の保健管理を専門とする健康支援総合センターの教員としては、学生が是非とも身につけて欲しい事項は多々あるが 1 年生全員（約 1,300 名）に一律に教えるとなると時間的にも人的にも余裕の無い健康支援総合センターの教員体制では現在の講義形態をとらざるを得ない。以後のことはほとんど実現の可能性は無いが、教養教育の中で保健や自己防衛や

自己管理や障害者やセクシャルマイノリティとの共生など社会人として生きていくための基本知識をきちんと伝えるという目的での講義がなされるのが理想であり、その方向で現在の講義形態が改善されるべきである。

また2月20日に学務部主催の第28回クラブ・サークルリーダーシップ研修会において、教授が「急性アルコール中毒を防ぐために」と題して90分間の講演を行った。

その他准教授は、医学部医学科2年生「人の成長と発達一脳と心の発達」(1コマ)、同6年生「実践臨床病態学:児童青年期に食行動異常を呈する心身医学的病態」(1コマ)を行った。また、准教授は放送大学群馬学習センター非常勤講師として、「医療からみた臨床心理」の対面授業を担当した。

4.9 教員による健康管理に関する調査研究業務

教員による健康管理に関する調査研究業務の結果は、論文及び学会発表として公表した。

健康支援総合センターの教員の健康管理に関する調査研究は、健康支援総合センター規程の第3条第5項に「健康に係る調査及び研究に関すること」と規定されているように業務であり、大学の教員が任意にテーマを選んで、自由に行う教官研究費や科学研究費や奨学寄付金での研究活動とは異なりその活動は運営経費で賄われるべきものであるが、その額はわずかである。

I：教授分

論文発表：

- 1；肥満大学生におけるソフトドリンク摂取量は増加しているか

大島喜八，上原 徹，八重樫聡子，小野里清美

CAMPUS HEALTH 49(1): 196－198, 2012

学会発表：

- 1；保健施設内の看護職による簡単な支援を中心に据えた肥満大学生に対する減量指導の効果

大島喜八，上原 徹，八重樫聡子，小野里清美，剣持久美華

群馬大学健康支援総合センター，同工学部保健室，同医学部学生健康支援室

第50回全国大学保健管理研究集会 2012年10月17－18日 神戸

- 2；新入生に対する摂食障害スクリーニングと早期対応の試み

上原 徹，大島喜八，上原 徹，八重樫聡子，小野里清美，剣持久美華，鈴木志津，大須賀英理，諸星聡美，谷田部美佳，酒井晃洋

群馬大学健康支援総合センター

第50回全国大学保健管理研究集会 2012年10月17－18日 神戸

科学研究費による研究:

- 1；「最終教育機関である大学で行うメタボリック症候群数増加阻止ストラテジーの立ち上げ」挑戦的萌芽研究 課題番号24650439 研究代表者

II：准教授

1. 著書

- 1) 上原 徹:14章 家族への対応「摂食障害治療ガイドライン」(日本摂食障害学会監修，ガイドライン作成委員会編集)，p221-228，医学書院，東京，2012

- 2) Uehara T (edt). Psychiatric Disorders-Trends and Developments, In Tech, Croatia, December, 2011

- 3) Uehara T, Ishige Y, Suda M : . Dissociative tendency, anger expression, and frontal activation during a verbal fluency task. IN Psychiatric Disorders-Worldwide Advances (Uehara T, edt), p69-84, In Tech, Croatia, 2011

2. 論文

- 1) Taki Y, Suda M, Aoyama Y, Narita K, Kameyama M, Uehara T, Fukuda M, Mikuni M: Micropolygyria in an Infant Born to a Patient with Severe Anorexia Nervosa : A Case Report. International Journal of Eating Disorders, Volume 45, 3 : 447-449, 2012
- 2) 上原 徹, 大島喜八, 鈴木志津ほか: 新入生に対する摂食障害スクリーニングと早期対応の試みー Campus Health, 49 (印刷中)
- 3) 上原 徹: 摂食障害についてミニマム心理教育, パネルディスカッション「女性アスリートの3徴の解決策を考える」, 日本臨床スポーツ医学会誌, 21 (印刷中)
- 4) 上原 徹: 摂食障害と衝動制御ー2つの視点から. シンポジウム「摂食障害の万引きをめぐって」. 精神神経学雑誌 (総会特集号電子版), SS243-256, 2012
- 5) 須田真史, 上原 徹: 摂食障害の脳画像研究. 医学のあゆみ, 241, 655-660, 2012

3. 学会発表

- 1) Uehara T, Ishige Y, Fukuda M : Bipolar mood tendency and frontal activation using a multichannel near infrared spectroscopy. World Psychiatric Association (WPA) Regional Meeting-Mental Health and Disaster : Beyond Emergency Response. Bali, Indonesia, September 13-15, 2012
- 2) 福田正人, 武井雄一, 青山義之, 上原 徹, 三園雅彦: うつ病のイメージングバイオマーカー (NIRS) うつ病はどこまで客観化できるのか?, 34 回日本生物学的精神医学会, 神戸, 9月28日, 2012
- 3) 福田正人, 武井雄一, 青山義之, 上原 徹, 三園雅彦: NIRS の原理と先進医療の制度. シンポジウム NIRS の基礎と限界, 34 回日本生物学的精神医学会, 神戸, 9月29日, 2012
- 4) 上原 徹, 大島喜八: 新入生に対する摂食障害スクリーニングと早期対応の試み 第50回全国大学保健管理研究集会, 神戸, 10月17-18日, 2012
- 5) 上原 徹: 摂食障害についてーミニマム心理教育, パネルディスカッション「女性アスリート3主徴の解決策を検証する」, 第23回日本臨床スポーツ医学会, 横浜, 11月3日, 2012
- 6) 上原 徹, 大島喜八ほか: 「食・体型・体重のこだわり」に関するセルフチェックは摂食障害スクリーニングに有用か?ー大学在校生を対象にした検討. 第32回日本精神科診断学会, 沖縄, 11月22・23日, 2012
- 7) 上原 徹: 気分障害の家族心理教育. (招聴講演) 第6回大分精神医療フォーラム, 11月16日, 2012

4. 研究会・学会などでの活動

Eating Disorder Research Society (certified member)

児童青年精神医学会評議員・認定医

スポーツ精神医学会評議員

精神科診断学会評議員

日本摂食障害学会評議員

心理教育家族教室ネットワーク運営委員

群馬精神医学会世話人

日本精神神経学会専門医制度委員会試験委員

4.10 健康支援総合センター所属教職員等

健康支援総合センター所属の教職員及び学校医は「平成 24 年度学校医・カウンセラー」のとおりである。平成 24 年度はこれらのスタッフで業務を行った。カウンセラーは学内のカウンセラーとして学外の臨床心理士が不在時の精神科救急にも対応していただいている。精神科医は学生の定期健康診断時の新生入生及び在学生のメンタルヘルスクリーニングをしていただいている。また、付属病院精神神経科学教室には夜間及び週末の学生の精神科救急に対応していただいている。

4.11 健康支援総合センター主催の委員会等

下記の会議を主催した。

- 1) 第 14, 15 回 健康支援総合センター運営委員会
議題は各健康支援総合センター運営委員会次第のとおりである。
運営委員会の議題については平成 19 年度より健康支援総合センターから審議希望事項を各学部呼びかけて募っている。
15 回はメール会議で行った。
- 2) 第 16 回 健康支援総合センター運営委員会
議題は健康支援総合センター運営委員会次第のとおりである。
この委員会で決定された健康支援総合センターの業務内容が 25 年度の業務として実施される。
- 3) 平成 24 年度 (第 15 回) メンタルヘルス研究会 (9 月)
「復学復職に向けた支援リワークデイケアの実際」をテーマに中泉メンタルクリニック院長の黒崎成男先生を招いて荒牧キャンパスのミューズホールで講演会を行った。学内外から、およそ 50 名を超える参加者をいただいた。別途講演録 DVD を作成し、後日配布した。
- 4) 群馬県内大学等保健管理担当者会議 (9 月, 2 月)
群馬県内の大学, 高専の保健管理担当実務者及び事務担当者の出席により開催した。
第 8 回 群馬県内大学等保健管理担当者会議
9 月 27 日に荒牧キャンパスで開催 15 校 18 名が参加した。
全国大学保健管理研究集会等各種研究会の報告, 「健康支援総合センターミニガイド 2013」について協議した。
情報交換: 障害学生手帳を所持している学生への対応, 健康診断の事後処理, 保健室の利用状況について
第 9 回 群馬県内大学等保健管理担当者会議
2 月 15 日に荒牧キャンパスで開催し, 15 校 17 名が参加した。
各種研究集会の報告「健康支援総合センターミニガイド 2013」について協議した。
情報交換: 常備薬について
講演会: 大島教授「肥満学生への対応について」
上原准教授「摂食障害スクリーニングと早期発見の試みについて」

4.12 平成 24 年度健康支援総合センター運営委員会委員

平成 24 年度の健康支援総合センター運営委員会の委員名は健康支援総合センター運営委員会名簿のとおりである。

4.13 健康支援総合センターの全国委員会等出席

下記の委員会等に健康支援総合センターの教職員が出席した。学内には同様の機能と責任を有する教職員が存在しない健康支援総合センターの教職員にとっては、下記のそれぞれの会への出席は、組織の機能の維持、発展を図るための研修、情報交換として必須である。

- 1) 第 50 回 全国大学保健管理研究集会
教授、准教授、看護師が出席、発表 開催地：神戸 10 月 17 日～ 18 日
- 2) 平成 24 年度 国立大学法人保健管理施設協議会総会
教授がセンター長の代理で出席 開催地：神戸 10 月 19 日
- 3) 第 50 回 全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会研究集会
教授、看護師が出席 開催地：東京 8 月 1 日、2 日
- 4) 平成 24 年度全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会
保健・看護分科会運営委員会
看護師 3 回出席 8 月 1 日：東京、9 月 20 日：東京、1 月 26 日：東京
- 5) 平成 24 年度 全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会幹事会
教授が出席 8 月 1 日：東京

4.14 学内諸会議への教職員の出席

教職員は下記の学内会議へ出席した。

- 1) 学生支援センター学生相談・生活部会
教授が委員として出席した。
- 2) 大学教育・学生支援機構連絡会議
教授が委員として出席した。
- 3) 荒牧事業場安全衛生委員会
産業医を併任している教授が毎月 1 回出席した。

4.15 学内行事実施に伴う救護業務

下記の学内行事に教職員が救護活動を行った。

- 1) 教育学部体育大会
- 2) 社会情報学部スポーツ大会
- 3) 群馬大学オープンキャンパス
- 4) 教育学部、社会情報学部推薦入学試験
- 5) 関東甲信越地区国立大学法人等職員採用試験
- 6) 日本語留学試験
- 7) 大学入試センター試験
- 8) 個別学力検査（前期、後期）
- 9) 学位記授与式

4.16 出版・広報活動

平成 24 年度は下記の出版、広報活動を行った。

- 1) 「健康ミニガイド（2011 年度ぐんま版）よりよいキャンパスライフを送るために」を発行した。
先に示した群馬県内大学等保健管理担当者会議が編集した大学生の保健必須事項をまとめて冊子にしたもので新入生全員に（1,300 部）配布した。

- 2) 「群馬大学大学教育・学生支援機構報告書健康支援総合センター」の平成 22 年度の原稿を作成して提出した。
- 3) 学生全員に健康支援総合センター案内と自己管理用の携帯用カードを作成し配布した。

4.17 社会貢献活動

健康支援総合センターの教員は専門性を生かして下記の社会貢献活動を行った。
准教授

外部委員やコンサルテーション、嘱託医

- 1) 県立ぐんま学園嘱託医師（児童青年精神医学）
- 2) 国立のぞみの園診療所非常勤医師（児童青年精神医学）
- 3) 群馬県社会福祉審議会児童福祉専門部会委員・児童虐待専門部会
- 4) 放送大学非常勤講師（群馬学習センター面接授業担当）
- 5) 前橋家庭裁判所委員会委員

4.18 その他の活動

- 1) 荒牧事業場の事務局の職場巡視
産業医を併任している教授が原則的に月に 1 回（年に 10 回）行った。
- 2) 若宮事業場安全衛生委員会への出席
産業医を併任している教授が出席した。

4.19 キャンパス・ソーシャルケースワーカーの活動

キャンパス・ソーシャルケースワーカーは平成 22 年 6 月から桐生キャンパスに配置され、欠席調査で検出されるなどで担当教員からの連絡が付かない状態の学生、休学中の学生など大学との関係が取れていない学生を担当の教員に結びつける作業を行った。対象学生は担当教員及び担当カウンセラーから依頼のあった者とした。平成 24 年度は 19 名の学生への対応の要求が出された。結果は 14 名の学生については成果があり、5 名については現在介入継続中である。介入した学生数は多くはなかったが、担当の教員からは非常に助かっているとの評価である。事実、過半数の学生には有効であった。しかし 25%程度については問題の解決には至っておらず、この程度の効果が本アウトリーチ型支援の限界かもしれない。幸いにも依頼した教員からは良好な評価を得ているので、今後とも更なる介入の工夫と技術の向上を図りながら経験を蓄積することにより機能の向上をめざしていただきたいと考えている。

4.20 健康維持・向上相談員活動

本事業は 23 年の 10 月から開始された。本学の 3 キャンパスうちで医療職が配置されていないキャンパスは昭和キャンパスだけであったことから、学生に対する平等な保健サービスを希望するとの医学部からの要望により、第 2 期中期計画が前倒しされる形で昭和キャンパスに週に 19 時間ではあるが毎日正午から午後 4 時まで（金曜日は 3 時まで）看護師が健康維持・向上相談員として配置された事は先に述べた。

病院の感染制御部が行う医学部学生へのインフルエンザワクチン接種時の医師への補佐や学生へのカウンセラーの誘導や週末に受診できる医療機関の情報提供や休養ベットの効果的な利用について健康維持・向上相談員は効果的に機能した。昭和キャンパスで生活をしている学生にとっては午後の昼休みを利用して様々な医療情報を簡単に確実に得られるという新

たな財産を得たことになり今後の利用は確実に増加すると考えている。

健康支援総合センターと健康維持・向上相談員とは電話、電子メール、テレビ電話で常時連絡が取れているので、健康維持・向上相談員が必要な情報は健康支援総合センターの医師や看護師から即座に受け取ることができるようになっている。また、昭和キャンパスで必要な医薬品や衛生用品などは以前から、随時健康支援総合センターの看護師を通して充足されるような仕組みになっている。

4.21 健康支援総合センターの抱える問題点と改善の方向性

以上平成 24 年度の健康支援総合センターの業務報告を行った。5 年前の平成 19 年度の報告書の中で解決可能事項として下記の 4 項目を挙げさせていただいた。

- 1) 学生の定期健康診断時の胸部レントゲン撮影経費は健康支援総合センター経費からではなく実費の全額を大学が直接支払う方式とする。
- 2) 工学部・大学院工学研究科キャンパスでの学外臨床心理士による実施時間の増加
- 3) 昭和キャンパスへの医療職の配置
- 4) 外国人留学生の感染性肺結核対策の徹底

問題点は平成 24 年度には、ほぼ解決しており、2) については今後の方向として後述する。

1) については胸部レントゲン検査経費を含めた前年度の実績に応じた健康診断経費が健康支援総合センターの予算として配分されるようになって実質的に解決できた。

2) については平成 22 年度から隔週に半日ではあるがキャンパス・ソーシャルケースワーカーを配置し平成 23 年度からは毎週に拡大すること、及び平成 24 年度からの学外カウンセラーの時間の拡大をすることで大きな進展をした。しかし、桐生キャンパスにおけるメンタルヘルス対策は抜本的な解決には至っていない。この点に関しては今後の課題として後述する。

3) については平成 23 年 10 月から昭和キャンパスに週に 19 時間（4 時間 4 日間、3 時間が 1 日）看護師を「健康維持・向上相談員」として配置することができ、さらに平成 24 年 7 月開催の第 14 回健康支援総合センター運営委員会において平成 25 年度以降の配置が決定されほぼ解決した。

4) は平成 21 年度に開始された、新たに本学に席を得た留学生に対してクオンティフェロン TB 検査を毎年行うことで問題が全面的に解決された。

次に 2) の課題、すなわち桐生キャンパスにおけるメンタルヘルス対応の改善についてである。この問題については前述したようにこの 5 年間に大きな進展が見られた。

しかし、将来的には桐生キャンパスに常駐する精神科医を新たに配置すべきである。カウンセラーは、クライアントである学生の成長を促すことで課題の解決を図るという業務の性質上関われる対象が原則的に学生に限定されているので、学生の単位の認定に関わる事柄に対して担当の教員へは直接には関われない。よって、カウンセラー業務が、学生の修学遂行により効果的に発揮されるためには、どうしても教員とカウンセラーとの間に双方の責任と義務とを理解し、病態をよく理解し、将来の予測がつく精神科医の仲立ちが必要になる。そして、この仲立ちは事務職員ではとうてい無理である、その事がここ数年の経験で明らかになってきたからである。

また、日常的に一人の精神科医がキャンパス内に居ることになれば学生が日常生活時間を変更することなく相談ができるようになる。精神科医にとってもキャンパス内の学生の生活の詳細が理解できるようになるのでより個別的、特異的な対応が可能となり、より高い効果が期待できるのである。この事は極めて重要な事柄である。この桐生キャンパスへのメンタルヘルス対応員の常駐配置計画を第二次中期計画としてあげてある。定員としての配置が困難であれば桐生キャンパスに一人の非常勤の精神科医を週に半日 3 回から 5 回程度の配置を目指すのが具体的な解決策であろう。

その解決策の具体化は容易ではない。その困難性については前回の平成 23 年度の業務報告書の最後の項で「群馬大学における学生の健康管理の改善策を具体化する上での構造的弱点」として述べた。

さらに今回は具体化に向けての方向性について述べてみたい。

一つは桐生キャンパスでの保健室の業務態勢の強化を図る事である。現在の保健室の業務を強化する委員会を開催しその中で精神科医の新たな配置が必要となる事を工学院として決定する。そしてその実現に関しては大学の協力を仰ぐという方向性を明確にすることである。

また、一つには、大学で協力するために学務部長が工学部の学生支援係長の業務を掌理する機能を明確にすることである。

現状では工学部の学生の保健管理体制の事務責任者は工学部事務長である。工学部事務長は学務部長の下部には位置していない、また、健康支援総合センターとは独立した工学部保健室を持つ工学部の学生支援係長は健康支援総合センターのセンター長の下部には位置していない。よって、工学部の学生の健康管理上の問題は大学全体の問題として認識されにくい事務構造になっているのである。

この事を打開して前進を図るには学務部長が何らかの形で工学部の学生の健康管理に対して直接に責任を持つ仕組みづくりが重要と考えられる。

以上、本学の学生の健康管理上の問題点と改善の方向性について述べた。

特に 21 年度に作成された第二次中期計画には改善策の具体案が明記してある。大学の執行部の先生方には、今回の報告書の中で述べられている第二次中期計画をじっくりとご覧いただき、健康支援総合センターの組織としての実態をまずは正確に認識して頂き、あるべき将来の姿をイメージしていただき財政的支援を賜りますようによろしくお願いいたします。

4.22 健康支援総合センター資料集

平成24年度 業務

1. 健康支援総合センターの主体業務

月	業 務	対 象	内 容
通年	応急処置	突然発症の傷病 学生・教職員	医師・看護師による応急処置
	健康相談(身体的及び精神・心理的相談)	有症状の学生・教職員及び要継続管理の学生の一部	センター職員による治療、検査、保健指導、カウンセリング、医療機関紹介
	生活習慣病対策指導	肥満学生	センター教授による、採血検査、血糖検査、医療機関紹介による臨床検査、定期的保健指導
	カウンセリング	有症状の学生・教職員及び要継続管理の学生の一部	学外委嘱臨床心理士によるカウンセリング、医療機関紹介 ※桐生地区は半日週3回 荒牧、昭和地区は各週1日 ※太田地区は半日(15時～18時)週1回
		昭和キャンパス所属の有症状の学生・教職員及び要継続管理の学生の一部	医学科各2名の教員によるカウンセリング、医療機関紹介
	指導に低反応である学生を担当する教員への助言・相談	桐生キャンパス内の助言・相談希望教員	センター精神科医によるメンタルヘルスに関する個別的助言・相談 希望者の有る時に1カ月に1回を限度に桐生キャンパス内で実施
	ホームページによりメンタルヘルス情報の配信	全教職員	センターの精神科医を中心に、大学におけるメンタルヘルスに関する啓蒙的記事を1カ月に1回程度更新
	キャンパスソーシャル・ケースワーカーの配置	工学部学生	半日週1回 学外臨床心理士による就学支援
	健康維持・向上相談員の配置	医学部学生	半日週5回 学外看護師による健康相談
4月	レディースクリニック	有症女子学生	月1回程度 専門の学校医による
	新入生オリエンテーション	全学部の入学生	健康支援総合センターの案内 学外カウンセラーの紹介
	健康調査	入学生および編入生	健康状態記録票による調査
	学生の定期健康診断	教育学部、社会情報学部 医学部、工学部1年	既往歴、メンタルヘルスアンケート調査、身体計測、血圧測定、検尿、内科診察、胸部X線間接撮影「健康白書2010」作製用データ処理
	2年生以上学生へのメンタルヘルススクリーニング(アンケートで)	アンケートにより抽出された在学学生	医師による面談・カウンセリング、医療機関への紹介
4月～2月	B型肝炎ワクチン接種	医学部1学年生のウイルス抗体陰性者	3回は全員に接種、3回接種後の陰性者に4回目の接種を行い終了
4月～10月	学生の定期健康診断 二次検診	要再検者	血圧測定、学生検尿、心電図、医療機関紹介、未受検者への連絡
5月	新入生メンタルヘルススクリーニング	健康状態記録表により抽出した入学生及び編入生	医師による面談・カウンセリング、医療機関紹介
10月	外国人留学生の特別健康診断	4月から活動を開始したり指名した外国人留学生	3キャンパスで採血し、クオンティフェロンT B検査を行う
8月～2月	群馬県内大学等保健管理担当者会議	群馬県内の大学、高専の保健管理担当者	大学等における保健管理の主に事務上の問題解決に向けての研修、情報交換、事業を目的に年に2回の会議を開催
11月～2月	メンタルヘルス研究会	学内カウンセラー、厚生補導関係教職員、県内大学等の厚生補導関係教職員、メンタルヘルス担当関係者、学生	学外専門講師による講演と県内関係者連携会議

2. 刊行事業

健康支援総合センターの案内原稿作成，新入生用健康管理用リーフレット作成

新入生用「健康ミニガイド」作成，メンタルヘルス研究会報告書作成，群馬大学大学教育・学生支援機構報告書に執筆

3. 諸会議

月	名 称	回数	主 な 議 題・備 考
4 月	健康支援総合センター運営委員会 (必要に応じて開催する)	随時	年度業務計画案等 学生定期健康診断日程表作成等 学生定期健康診断受検状況報告等 次年度学生定期健康診断日程等 概算要求関係・学内要求事項等 中期計画案・報告等
3 月	学生支援センター学生相談・生活部会	適時	専任教員が委員として出席
	大学教育・学生支援機構連絡会議	適時	センター長・副センター長が出席

4. 講義

「健康学原論」教養教育学生を対象にセンター医による講義（健康管理学）

90分間の講義を合計10回程度行っている。

5. 健康情報の発信

感染症、中毒など緊急の保健情報を全学に周知掲示する。

6. 研究集会等

名 称	回 数	出 席 者
全国大学保健管理研究集会	年1回	教員・看護師
全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会	年1回	教員・看護師
北関東・甲信越地区メンタルヘルス研究協議会	年1回	教員・看護師
フィジカル・ヘルス・フォーラム	年1回	教員（内科医）
国立大学法人保健管理施設協議会総会	年1回	センター長
全国大学保健管理協会総会	年1回	教員
全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会保健看護分化学会運営委員会	年3回	看護師
北関東甲信越地区メンタルヘルス研究協議会運営委員会	年3回	教員（精神科医）
全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会	年1回	教員・看護師
全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会幹事会	年2回	教員
全国大学保健管理協会評議員会	年1回	教員

7. 学内行事等に伴う協力事業

月	行 事	対 象	内 容
4 月	(入学式)	学生・教職員・保護者等	救護
	群馬大学新任教員説明会	新任教員	学生へのメンタルヘルス対応法講話
5 月	関東甲信越地区国立大学法人等職員採用試験	受験者	救護
7 月	教育学部体育大会	教育学部の学生及び教職員	救護
	社会情報学部編入学試験	受験者	救護
8 月	大学説明会	参加高校生	救護
10月 (11月	新規採用職員研修	新規採用職員	健康管理講話/メンタルヘルス講義
	教職員の定期健康診断	荒牧地区(事務局・図書館・教育学部・社会情報学部)放送大学	身体計測、血圧測定、検尿、血液検査、心電図、内科診察、胸部X線間接撮影、便潜血、喀痰等検査時の器材および会場の提供
	社会情報学部スポーツ大会	社会情報学部の学生・教職員	救護
	(生涯生活設計セミナー)	45歳以上の職員及び特に参加を希望する者	講演(健康管理プラン)
	推薦入学試験(教育・社会情報学部)	受験生	救護
	12月 (定年等退職予定者説明会)	定年等退職予定者	保健講話(健康管理)
1 月	大学入試センター試験	受験生	救護
1 月 (3 月	身体に障害を有する入学志願者との事前相談	該当受験希望者	受験可否の判断
	個別学力検査(前期・後期)	(教育・社会情報)学部受験生	救護
	学位授与式	卒業生、教職員、保護者等	救護

() は必ずしも例年とは限らない。

8. 産業医業務(教授が荒牧事業場の産業医を兼ねている)

内 容	回 数	業 務 内 容
職場巡視	毎月1回	職場巡視と巡視記録の作成
荒牧事業場安全衛生委員会出席	毎月1回	産業医としての提言
若宮事業場安全衛生委員会出席	毎年1回	産業医としての提言
上沖事業場安全衛生委員会出席	毎年1回	産業医としての提言

9. 学内教育・広報活動等の協力業務等

寄稿：学内情報誌等の依頼により健康支援総合センターより全学生、教職員向けに活動状況および健康管理情報を掲載

講演：上記7. 以外に各学部より依頼の教員および学生向けのメンタルヘルス対応や健康管理に関する講話

10. 地域貢献事業

地域の各種団体の依頼により、教員が講演会等の講師や健康管理業務に参画する。

整理番号1

平成24年度 前橋地区学生定期健康診断日程表

受付時間 実施日	午 前		午 後		対象数(概数)
	9 : 0 0 ～ 1 0 : 1 5 (7 5 分)	1 0 : 1 5 ～ 1 1 : 3 0 (7 5 分)	1 3 : 0 0 ～ 1 4 : 1 5 (7 5 分)	1 4 : 1 5 ～ 1 6 : 0 0 (1 0 5 分)	
4. 2 (月)	医学部（医学科・保健学科）2年		医学部（医学科・保健学科）3年		午前400人 午後400人
	医学部 医学科 5年				合計800人
	大学院 医学系 2～4年				
4. 3 (火)	医学部（医学科・保健学科）4年		社会情報学部2年	社会情報学部3年	午前435人 午後350人
	医学部 医学科 6年				合計785人
	大学院 医学系 2～4年				
4. 5 (木)	教育学部 2年		教育学部 3年		午前355人 午後350人
	教 育 学 部 4 年				合計705人
	(国語・社会 ・英語)	(数学・理科 ・技術)	(音楽・美術 ・保健体育)	(家政・教育・教育 心理・障害児教育)	
4. 6 (金)	社会情報学部 4年				午前295人 午後335人 合計 630人+α
	教育学部 1年		特別支援教育特別専攻科 大学院 教育学1～2年		
			社会情報学部 1年		
			社会情報学部3年次編入生		
			大学院 社会情報学1～2年		
	予 備 日				
4. 9 (月)	工 学 部 1 年				午前255人 午後275人
	生産システム	社会環境デザイン	応用化学 ・ 生物化学	機械システム (M2)	合計530人
	環境プロセス				
	機械システム (M1)	情報工学		電気電子	
4. 10 (火)	医学部 保健学科1年 (検査・理学・作業) ワクチン接種用採血あり	医学部 保健学科1年 (看護) ワクチン接種用採血あり	医学部医学科1年 ワクチン接種用採血あり		午前235人 午後205人
	大学院 医学系 1年		医学部医学科2年次編入生 医学部保健学科3年次編入生 ワクチン接種用採血あり		合計 440人+α
	予 備 日				

- 健康診断項目：既往歴、身体計測、血圧測定、検尿、胸部X線撮影、内科診察、アンケート。
- 健康診断会場：健康支援総合センター
- 原則として割り当てられた日程で健康診断を受けてください。都合の悪い方は、予備日を利用して受けてください。
- 健康診断を受けないと健康診断書の発行はできません。
- 学部第1年次生の健康診断日程については、当該年度の教養教育授業時間割により、同一健康診断日の範囲内で変更する場合がある。

平成24年度 桐生・太田地区学生定期健康診断日程表

場所	項目	検査日	時間	対象	対象数(概数) 2,800人
桐生 キャンパス	胸部X線撮影 及び 検尿	4/10 (火)	9:00～11:30 13:00～16:00	大学院生 4年生	810人
		4/11 (水)	9:00～11:30 13:00～16:00	大学院生 2年生・3年生	810人
		4/12 (木)	9:00～11:30 13:00～16:00	2年生・3年生 大学院生	810人
	内科診察 及び 計測	4/17 (火)	13:00～17:00	3年生・4年生	610人
		4/18 (水)	13:00～17:00	2年生・大学院生	610人
		4/19 (木)	13:00～17:00	2年生・大学院生	600人
		4/20 (金)	13:00～17:00	3年生・大学院生	610人
太田 キャンパス	全 項 目	5/9 (水)	18:15～19:30	夜間主学生	130人
		5/10 (木)	10:10～12:00	昼間学生・大学院生	240人

- ・クラスごとの実施割振りは、平成24年度前期授業時間割表により決定する。
- ・授業の空き時間を活用し、全ての実施時間が授業と重なった場合は休講措置とする。

1) 健康診断項目

4月10～12日 アンケート・胸部X線撮影・検尿

4月17～20日 既往歴・身体計測・血圧測定・内科診察

5月9・10日 アンケート・既往歴・胸部X線撮影・検尿・身体計測・血圧測定・内科診察

2) 健康診断会場

4月 桐生キャンパス体育館及び7号館

5月 太田キャンパス教室

整理番号3

平成24年度 学生定期健康診断受検状況（荒牧・昭和地区）

	対象者数	血圧測定・尿検査・内科診察		胸部X線撮影	
		受検者数	受検率	受検者数	受検率
学 部 合 計	3,235	3,040	94.0%	3,038	93.9%
大学院等の合計	573	197	34.4%	192	33.5%
合 計	3,808	3,237	85.0%	3,230	84.8%

対象者数は平成24年4月1日現在の学生数とし休学者は除いた。

受検率は小数点第二位を四捨五入

上記の他に、教育学部研究生2名・特別聴講生6名、社会情報学部研究生1名・特別聴講生7名、医学部特別聴講生2名、工学研究科1年2名、工学部4年生8名が受検した。

<学部学生>

		対象者数	血圧測定・尿検査・内科診察		胸部X線撮影		
			受検者数	受検率	受検者数	受検率	
教育学部	1年	228	228	100.0%	228	100.0%	
	2年	231	228	98.7%	228	98.7%	
	3年	219	217	99.1%	217	99.1%	
	4年	239	233	97.5%	233	97.5%	
	合計	917	906	98.8%	906	98.8%	
社会情報学部	1年	104	104	100.0%	104	100.0%	
	2年	104	93	89.4%	93	89.4%	
	3年	119	113	95.0%	113	95.0%	
	4年	137	119	86.9%	119	86.9%	
	合計	464	429	92.5%	429	92.5%	
医学部	医学科	1年	112	109	97.3%	109	97.3%
		2年	123	116	94.3%	116	94.3%
		3年	113	93	82.3%	92	81.4%
		4年	116	67	57.8%	67	57.8%
		5年	97	76	78.4%	76	78.4%
		6年	96	84	87.5%	84	87.5%
		合計	657	545	83.0%	544	82.8%
	保健学科	1年	167	166	99.4%	166	99.4%
		2年	162	157	96.9%	156	96.3%
		3年	172	160	93.0%	160	93.0%
		4年	172	166	96.5%	166	96.5%
		合計	673	649	96.4%	648	96.3%
	合 計		1,330	1,194	89.8%	1,192	89.6%
工学部	1年	524	511	97.5%	511	97.5%	
学部合計		3,235	3,040	94.0%	3,038	93.9%	

<大学院学生>

			対象者数	血圧測定・尿検査・内科診察		胸部X線撮影		
				受検者数	受検率	受検者数	受検率	
教育学研究科	修士課程	1年	24	24	100.0%	24	100.0%	
		2年	25	23	92.0%	21	84.0%	
	専門職学位課程	1年	18	18	100.0%	18	100.0%	
		2年	17	3	17.6%	3	17.6%	
教育学部特別支援教育特別専攻科			13	12	92.3%	12	92.3%	
合 計			97	80	82.5%	78	80.4%	
社会情報学研究科	修士課程	1年	14	12	85.7%	12	85.7%	
		2年	16	11	68.8%	11	68.8%	
	合 計		30	23	76.7%	23	76.7%	
医学研究科	医科学専攻	修士課程	1年	12	10	83.3%	10	83.3%
			2年	6	4	66.7%	4	66.7%
		博士課程	1年	58	15	25.9%	15	25.9%
			2年	41	6	14.6%	6	14.6%
			3年	56	8	14.3%	5	8.9%
			4年	105	10	9.5%	10	9.5%
	合 計		278	53	19.1%	50	18.0%	
	保健学専攻	博士前期課程	1年	54	25	46.3%	25	46.3%
			2年	48	11	22.9%	11	22.9%
		博士後期課程	1年	13	1	7.7%	1	7.7%
			2年	8	1	12.5%	1	12.5%
			3年	45	3	6.7%	3	6.7%
		合 計		168	41	24.4%	41	24.4%
合 計		446	94	21.1%	91	20.4%		
大学院等の合計			573	197	34.4%	192	33.5%	

平成24年度 学生定期健康診断受検状況(桐生・太田地区)

区 分			対象者数	内科診察・計測		胸部X線撮影・検尿		
				受検者数	受検率(%)	受検者数	受検率(%)	
工 学 部	昼 間	2年	546	498	91.2	504	92.3	
		3年	612	505	82.5	524	85.6	
		4年	554	509	91.9	505	91.2	
		昼間計	1,712	1,512	88.3	1,533	89.5	
	夜 間 主	1年	34	28	82.4	28	82.4	
		2年	31	20	64.5	20	64.5	
		3年	33	21	63.6	21	63.6	
		4年	36	22	61.1	22	61.1	
		夜間計	134	91	67.9	91	67.9	
	学 部 計		1,846	1,603	86.8	1,624	88.0	
	工 学 研 究 科	修 士	1年	345	332	96.2	331	95.9
			2年	364	341	93.7	347	95.3
修士計			709	673	94.9	678	95.6	
博 士		1年	30	20	66.7	21	70.0	
		2年	27	11	40.7	10	37.0	
		3年	51	22	43.1	22	43.1	
		博士計	108	53	49.1	53	49.1	
研 究 科 計		817	726	88.9	731	89.5		
合 計		2,663	2,329	87.5	2,355	88.4		

※対象者数は、4月1日現在の学生数(休学者を除く)

受検率は、小数点第二位を四捨五入

整理番号 5

平成24年度 学生定期健康診断における疾患別要観察者
(継続観察者を含む)

		要 管 理 者			疾患別 合 計
		男	女	合 計	
循 環 器 疾 患	高血圧	2	0	2	30
	高血圧疑い	6	0	6	
	低血圧	0	4	4	
	先天性心疾患	2	1	3	
	WPW	1	1	2	
	心電図異常	0	0	0	
	その他	9	4	13	
呼 吸 器 疾 患		1	0	1	1
消 化 器 疾 患		3	4	7	7
腎・泌尿器疾患	慢性腎炎	1	0	1	11
	IgA腎症	2	0	2	
	蛋白陽性	0	0	0	
	潜血陽性	2	1	3	
	その他	2	3	5	
代 謝 疾 患	肥満	214	104	318	701
	やせ	127	248	375	
	1型糖尿病	2	0	2	
	腎性糖尿	4	1	5	
	その他	1	0	1	
内 分 泌 疾 患	バセドウ氏病	1	4	5	8
	橋本病	1	1	2	
	その他	0	1	1	
血 液 疾 患		0	4	4	4
神 経・筋疾患	片頭痛	0	2	2	7
	てんかん	2	1	3	
	その他	0	2	2	
膠 原 病 お よ び 類 縁 疾 患		0	1	1	1
アレルギー性疾患	アトピー性皮膚炎	15	20	35	103
	アレルギー性鼻炎	14	14	28	
	花粉症	16	22	38	
	その他	2	0	2	
精 神 疾 患		6	10	16	16
整 形 外 科 疾 患		4	7	11	11
皮 膚 疾 患		3	4	7	7
眼 科 疾 患		2	0	2	2
耳 鼻 科 疾 患		1	0	1	1
歯科・口腔外科疾患		1	0	1	1
産 婦 人 科 疾 患			17	17	17
合 計		447	481	928	928

平成24年度 学生定期健康診断結果

(1) 身体測定

	受検者数	結 果							
		やせ		正常		肥満			
		BMI 18.6未満	BMI 18.6～24.9	BMI 25.0～29.9	BMI 30.0以上				
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教育学部	986	76	7.7%	792	80.3%	101	10.2%	17	1.7%
社会情報学部	452	62	13.7%	347	76.8%	37	8.2%	6	1.3%
医学部	1,288	168	13.0%	1,026	79.7%	84	6.5%	10	0.8%
工学部	511	69	13.5%	379	74.2%	51	10.0%	12	2.3%
合 計	3,237	375	11.6%	2,544	78.6%	273	8.4%	45	1.4%

(2) 血圧測定

1) 一次検査

	受検者数	結 果					
		正常血圧		高血圧疑い		低血圧症	
		人数	%	人数	%	人数	%
教育学部	986	960	97.4%	24	2.4%	2	0.2%
社会情報学部	452	438	96.9%	13	2.9%	1	0.2%
医学部	1,288	1,260	97.8%	27	2.1%	1	0.1%
工学部	511	485	94.9%	26	5.1%	0	0.0%
合 計	3,237	3,143	97.1%	90	2.8%	4	0.1%

2) 二次検査

	対象者数	結 果				精 密 検 査 結 果			
		正常血圧	経過観察	要精査	未受検	異常なし	経過観察	要治療	結果報告なし
教育学部	24	19	3	1	1	0	1	0	0
社会情報学部	13	13	0	0	0	0	0	0	0
医学部	27	25	0	0	2	0	0	0	0
工学部	26	23	1	1	1	0	1	0	0
合 計	90	80	4	2	4	0	2	0	0

(3) 尿検査

1) 一次検査

	受検者数	結 果		陽 性 項 目 内 訳			
		陽性者数	%	蛋白	潜血	蛋白・潜血	糖
教育学部	986	9	0.9%	2	6	0	1
社会情報学部	452	5	1.1%	1	1	1	2
医学部	1,288	15	1.2%	3	5	1	6
工学部	511	8	1.6%	1	4	0	3
合 計	3,237	37	1.1%	7	16	2	12

2) 二次検査

	対象者数	結 果						精 密 検 査 結 果			
		異常なし	蛋白陽性	潜血陽性	蛋白・潜血陽性	糖陽性	未受検	異常なし	経過観察	要治療	結果報告なし
教育学部	9	7	1	1	0	0	0	0	1	0	1
社会情報学部	5	2	0	1	0	2	0	2	1	0	0
医学部	15	13	0	1	0	0	1	0	1	0	0
工学部	8	5	0	1	0	2	0	2	1	0	0
合 計	37	27	1	4	0	4	1	4	4	0	1

(4) 胸部X線間接撮影検査

	受検者数	要 精 検		精 密 検 査 結 果			備 考
		人数	%	異常なし	経過観察	要治療	
教育学部	984	0	0.0%	0	0	0	
社会情報学部	452	0	0.0%	0	0	0	
医学部	1,283	4	0.3%	3	1	0	
工学部	511	1	0.2%	0	0	1	気胸1名
合 計	3,230	5	0.2%	3	1	1	

(5) 内科診察

	受検者数	要 精 検						精 密 検 査 結 果				
		心雑音		貧血（眼検結膜所見）		甲状腺腫		異常なし	経過観察	要治療	結果報告 なし	備 考
		人 数	%	人 数	%	人 数	%					
教 育 学 部	986	0	0.0%	3	0.3%	0	0.0%	0	0	1	2	鉄欠乏性貧血1名
社会情報学部	452	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	1	0	0	0	
医 学 部	1,288	2	0.2%	2	0.2%	1	0.1%	1	1	0	3	
工 学 部	511	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0	0	0	
合 計	3,237	3	0.1%	5	0.2%	1	0.0%	2	1	1	5	

(6) 心電図検査

健康診断時に心雑音が聴取されず不整脈が理学的に認められたり、過去の心電図検査において異常を指摘されたが確定診断が不明である者を対象とした。

	対象者数	検 査 結 果			精 密 検 査 結 果				
		正常範囲	要精検	未受検	異常なし	経過観察	要治療	結果報告 なし	備考
教 育 学 部	5	5	0	0	0	0	0	0	
社会情報学部	1	1	0	0	0	0	0	0	
医 学 部	1	1	0	0	0	0	0	0	
工 学 部	0	0	0	0	0	0	0	0	
合 計	7	7	0	0	0	0	0	0	

(7) 健康支援総合センターでの精密検査

	受検者数	結 果		
		異常なし	要教育者	要治療
血糖・脂質測定	22	10	12	0
糖 負 荷 試 験	4	0	4	0
合 計	26	10	16	0

異常なし：異常な理学的所見はあるが、精密検査の結果、放置してもよい病態と診断された者

要教育者：治療を直ちに行う程ではないが、センターで健康教育および定期的な医療機関での観察を要すると診断された者。

要 治 療：医療機関での治療が必要と判断された者

整理番号7

平成24年度 外国人留学生健康診断結果

本学では、過去10年間に於いて感染性結核症の学生が3名発生し、すべて外国人留学生であった。そのため、第8回健康支援総合センター運営委員会(平成21年8月3日開催)において、外国人留学生に対しクオンティフェロンTB(結核感染診断マーカー検査)を特別健康診断項目として行うことが決定された。

1. 受検状況

	対象者数	受検者		未受検者内訳
		人数	%	
教育学部	6	6	100%	
社会情報学部	21	20	95.2%	病気のため(1名)
医学部	12	12	100%	
工学部	56	55	98.2%	帰国中(1名)
国際教育・研究センター	1	1	100%	
合 計	96	94	97.9%	

対象者:学部および大学院1年生、学部3年次編入生
平成24年4月以後に入学した研究生・聴講生・特別研究学生・特別聴講学生
昨年度留学生健康診断未受検者(2名)

2. クオンティフェロンTBゴールド検査結果

	受検者数	陰性(-)		陽性(+)		疑陽性(±)	
		人数	%	人数	%	人数	%
教育学部	6	5	83.3%	1	16.7%	0	0%
社会情報学部	20	19	95.0%	1	5.0%	0	0%
医学部	12	9	75.0%	2	16.7%	1	8%
工学部	55	47	85.5%	5	9.1%	3	5%
国際教育・研究センター	1	1	100%	0	0.0%	0	0%
合 計	94	81	86.2%	9	9.6%	4	4%

※今年度 医学部1年クオンティフェロンTBゴールド陽性率 0%

【参考資料:過去3年間の留学生健康診断結果】

	受検者数	陰性(-)		陽性(+)		疑陽性(±)	
		人数	%	人数	%	人数	%
平成21年度	93	83	89.2%	4	4.3%	5	5.4%
平成22年度	165	142	86.1%	11	6.7%	12	7.3%
平成23年度	103	81	78.6%	10	9.7%	12	11.7%

医学部1年 クオンティフェロンTB ゴールド検査 陽性率	
平成21年度	
平成22年度	0.5%
平成23年度	1.6%

3. 医療機関受診結果

	医療機関紹介者数	受診結果		
		正常	潜在性結核として治療	未受診
教育学部	1	1	0	0
社会情報学部	1	1	0	0
医学部	2	1	1	0
工学部	5	3	1	1
国際教育・研究センター	0	0	0	0
合 計	9	6	2	1

陽性者全員は、医療機関を紹介した。疑陽性者は、今年度の健康診断(胸部レントゲン検査)で異常がなければ毎年健康診断を受けるよう促し、健康診断未受検者については医療機関を紹介した。未受診1名は、2月帰国予定であり、自国で精査することになった。

4. メンタルヘルス質問票による精神保健調査

	受検者数	問題なし		要面接者数	
		人数	%	人数	%
教育学部	6	5	83.3%	1	16.7%
社会情報学部	20	20(1)	100%	0	0%
医学部	12	11	91.7%	1	8.3%
工学部	55	51(5)	92.7%	4	7.3%
国際教育・研究センター	1	1	100%	0	0%
合 計	94	88(6)	93.6%	6	6.4%

()はこの1年以内に通院歴のある学生数で内数
要面接者6名中4名は留学生担当教員、2名は健康支援総合センター准教授が面接。
健康支援総合センター准教授が面接した2名は、問題なしと判定。

平成24年度 医学部1年ウイルス性疾患(麻疹、風疹、水痘、流行性耳下腺炎)抗体価検査

検査項目	受検者数	陰性		陽性	
		人数	%	人数	%
麻疹抗体	272	10	3.7%	262	96.3%
風疹抗体	272	17	6.3%	255	93.8%
水痘抗体	272	15	5.5%	257	94.5%
流行性耳下腺炎抗体	272	49	18.0%	223	82.0%

～備考～

- ・1種のウイルスに対して抗体価陰性者は64名(23.5%)
- ・2種のウイルスに対して抗体価陰性者は12名(4.4%)
- ・3種のウイルスに対して抗体価陰性者は1名(0.4%)

* 学科別内訳

学 科	検査項目	受検者数	陰性		陽性	
			人数	%	人数	%
医 学 科	麻疹抗体	107	4	3.7%	103	96.3%
	風疹抗体	107	7	6.5%	100	93.5%
	水痘抗体	107	7	6.5%	100	93.5%
	流行性耳下腺炎抗体	107	17	15.9%	90	84.1%
保健学科	麻疹抗体	165	6	3.6%	159	96.4%
	風疹抗体	165	10	6.1%	155	93.9%
	水痘抗体	165	8	4.8%	157	95.2%
	流行性耳下腺炎抗体	165	32	19.4%	133	80.6%

平成24年度 医学部1年クオンティフェロンTBゴールド検査

受検者数	陰性		陽性		判定不能	
	人数	%	人数	%	人数	%
272	270	99.3%	0	0.0%	2	0.7%

平成24年度 医学部1年B型肝炎ワクチン接種状況

(1) B型肝炎抗体価検査結果(4月)

受検者数	結果			
	陰性		陽性	
	人数	%	人数	%
272	267	98.2%	5	1.8%

(2) B型肝炎ワクチン接種

接種対象者数	接種人数			副作用	
	1回目(6月)	2回目(7月)	3回目(11月)	人数	症状
267	266	264			

整理番号 9

平成 2 4 年度 利用人数

所属学部等		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
荒牧キャンパス	教 育 学 部	24	50	29	45	5	7	26	24	21	15	8	7	261
	社会情報学部	19	25	20	27	11	6	21	15	8	9	5	0	166
	医 学 部	18	20	25	17	2	0	11	9	5	5	3	2	117
	工 学 部	17	23	31	21	0	4	11	16	13	11	2	1	150
	留学生センター	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
昭和キャンパス	医 学 部	13	8	8	11	8	4	6	7	6	8	8	7	94
桐生・太田キャンパス	工 学 部	0	5	3	3	1	2	1	3	6	1	0	0	25
合 計		91	131	116	124	29	23	76	74	59	49	26	17	815

整理番号 1 0

平成 2 4 年度 利用件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
健康相談	71	90	64	82	12	6	43	48	37	33	7	3	496
精神保健相談	17	41	52	41	15	15	32	24	21	16	19	12	305
健康診断書発行	5	3	2	2	0	1	1	2	1	0	0	2	19
合計	93	134	118	125	27	22	76	74	59	49	26	17	820

整理番号 1 1

平成 2 4 年度 健康相談・精神保健相談の対応内容

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	
健康相談	肥 満 治 療	1	0	1	18	1	0	1	10	5	4	2	0	43	
	レディースクリニック	2	0	2	1	0	0	1	1	1	0	0	0	8	
	外 傷 処 置	8	4	2	7	3	1	4	8	2	0	0	0	39	
	検 査	6	2	1	1	0	4	1	10	0	0	2	0	27	
	投 薬	34	49	24	31	7	2	24	14	21	17	3	2	228	
	休養ベッド使用	4	8	3	6	1	0	0	0	1	1	0	0	24	
	健康・保健用器具貸し出し	2	4	1	12	1	0	1	0	0	1	0	0	22	
	医 療 機 関 紹 介	17	21	15	12	1	2	13	8	4	7	3	1	104	
	救 急 転 送	0	2	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	6	
精神相談	カウンセリング (荒牧、昭和分)	准 教 授	9	19	32	26	8	11	13	14	9	9	9	3	162
		カウンセラー	8	22	20	15	7	4	19	10	12	7	10	9	143
	カウンセラー紹介		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	投 薬		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	医 療 機 関 紹 介		1	3	5	1	0	1	0	2	1	1	0	0	15

整理番号 1 2

平成 2 4 年度 疾病領域別利用者数

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
内 科	循 環 器 系	3	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	6
	呼 吸 器 系	20	29	22	19	4	1	17	13	14	16	1	3	159
	消 化 器 系	5	6	3	7	2	0	4	3	6	2	1	0	39
	腎 臓 系	4	1	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	8
	内分泌・代謝系	1	1	4	19	1	0	2	11	5	4	2	0	50
	そ の 他	8	8	14	14	3	1	2	2	5	2	0	0	59
精 神 科		17	42	53	45	17	15	33	24	21	16	20	12	315
外科・整形外科		16	29	15	18	3	1	10	13	4	5	1	1	116
脳 神 経 外 科		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
泌 尿 器 科		1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
耳 鼻 咽 喉 科		2	7	0	1	0	0	2	3	0	2	0	0	17
眼 科		2	3	1	0	0	0	2	1	0	0	0	0	9
皮 膚 科		6	1	5	5	3	0	3	3	2	4	1	0	33
歯科・口腔外科		0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	3
産 婦 人 科		5	3	3	3	1	0	1	2	1	1	0	0	20
合 計		90	133	121	131	34	21	77	77	58	52	27	16	837

整理番号 1 3

平成 2 4 年度 医療機関紹介の診療科分類

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
内科	循環器系	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
	呼吸器系	1	3	4	2	0	0	3	0	0	1	0	15
	消化器系	1	1	0	0	0	0	0	1	3	2	0	8
	腎臓系	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	内分泌・代謝系	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	その他	3	1	2	0	0	1	0	0	0	0	0	7
	精神科	1	3	5	1	0	1	0	2	1	1	0	15
	外科・整形外科	5	5	6	7	0	0	4	3	0	1	1	32
	脳神経外科	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	泌尿器科	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	耳鼻咽喉科	1	3	0	1	0	0	1	1	0	1	0	8
	眼科	2	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6
	皮膚科	2	1	1	2	1	0	2	1	1	2	1	14
	歯科・口腔外科	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3
	産婦人科	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	4
	合 計	19	24	20	13	1	3	13	10	5	8	3	120

整理番号 1 4

平成 2 4 年度 精神保健相談者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
荒牧キャンパス	教育学部	3	5	9	8	0	4	5	4	5	5	4	57
	社会情報学部	6	7	10	9	7	5	11	8	2	2	3	70
	医学部	0	3	7	3	1	0	2	0	0	1	0	17
	工学部	3	11	13	7	0	2	5	1	2	0	1	45
	留学生センター	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
昭和キャンパス	医学部	5	14	10	11	6	4	8	8	7	7	10	98
桐生キャンパス	工学部	0	1	3	3	1	0	1	3	5	1	0	18
	合 計	17	41	52	41	15	15	32	24	21	16	19	305

ほかに教職員の総数 1 0 名に対して応急措置としての精神保健相談を行った。

整理番号 1 5

平成 2 4 年度 精神保健相談内容

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
心理性格	2	4	4	5	1	4	3	3	0	0	2	0	28
対人関係	1	9	8	11	4	6	7	7	4	2	3	1	63
心体の不調	8	24	27	19	6	4	10	8	9	9	10	8	142
修学	5	9	16	12	5	1	17	10	8	4	5	1	93
その他	1	3	8	18	2	0	0	0	3	1	2	2	40
	合 計	17	49	63	65	18	15	37	28	24	16	22	366

1 回の相談につき、相談内容が複数の場合があり。

整理番号 16

平成24年度 薬剤別使用数（処方日数による）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合 計
抗 生 剤	9	12	9	3	0	0	6	3	0	6	0	0	48
解熱・消炎・鎮痛剤	45	48	45	37	14	6	19	18	18	26	0	0	276
感 冒 剤	50	54	40	31	6	6	32	33	23	25	3	5	308
健胃剤・抗潰瘍剤	10	8	3	19	1	0	6	1	2	1	0	0	51
整 腸 剤	3	0	0	0	0	0	2	0	11	0	3	0	19
止 瀉 剤	0	0	0	2	0	0	2	0	6	0	0	0	10
鎮 吐 剤	0	0	0	8	0	0	3	0	0	0	3	0	14
抗ヒスタミン剤	0	0	0	3	0	5	0	0	0	0	0	0	8
精 神 安 定 剤	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
口腔内塗布剤	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
外用副腎皮質ホルモン剤	0	0	1	2	0	0	0	2	0	0	0	0	5
外用抗生剤	4	2	1	2	1	0	2	2	0	0	0	0	14
外用抗ウイルス剤	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3
外用抗ヒスタミン剤	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
外用消炎剤	4	18	3	4	0	0	4	1	2	3	1	1	41
点 眼 薬	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
補 液	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合 計	126	142	103	111	22	17	77	61	62	62	10	6	799

整理番号 17

平成24年度 常備薬使用数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合 計	
ケフレックス	18	18	36	18	0	0	0	0	0	36	0	0	126	153
クラビット	6	9	3	0	0	0	6	3	0	0	0	0	27	
スバラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ボルタレン	108	87	108	63	18	18	45	36	27	63	0	0	573	671
カロナール	18	17	9	9	3	0	6	5	9	1	0	0	77	
インデパンsp	3	2	0	7	0	0	0	1	0	8	0	0	21	
S G顆粒	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
イブ錠（市販薬）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
P L顆粒	152	162	40	93	18	18	96	108	69	75	9	15	855	855
セルベックス	18	24	3	32	1	0	18	1	6	1	0	0	104	104
ラックビー微粒N	9	0	0	0	0	0	6	0	33	0	9	0	57	57
ロペミン	0	0	0	6	0	0	6	0	18	0	0	0	30	30
ブリンペラン	0	0	0	22	0	0	9	0	0	0	18	0	49	49
ジルテック	0	0	0	3	0	5	0	0	0	0	0	0	8	8
セルシン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
デスパ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
リンデロンVG	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	5
デルモベートクリーム	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	3	
ゲンタシン軟膏	4	0	1	2	1	0	2	2	0	0	0	0	12	12
アラセナーA軟膏	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	2
レスタミン	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1
ヤクバンテープ	8	13	3	4	0	0	4	1	6	5	1	1	46	46
タリビット点眼薬	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
生理食塩水	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合 計	345	332	205	261	41	41	199	159	168	190	37	16	1,994	1,994

平成24年度 精神保健調査

(1) 新入生の精神保健調査

新入生の精神保健調査は、入学時提出のメンタルヘルス質問票(新入生版)を基に要面接学生を抽出し、健康支援総合センター准教授、臨床心理士および附属病院精神科医師9名との面接をすすめた。

対象学生は、各学部入学生のメンタルヘルス質問票(新入生版)提出者とし、大学院入学生(医学部・工学部を除く)、特別支援教育特別専攻科、編入生(社会情報学部・医学部・工学部)、工学部夜間1年生を含めた。

	対象学生数	要 面 接		面接を うけた 学生数	結 果				
		人数	%		問題なし	随時の相 談 を推奨	カウンセリング 継 続	医療機関 紹介	通院中
教 育 学 部	269	11	4.1%	6	2	2	1	1	0
社会情報学部	125	8	6.4%	7	3	1	1	2	0
医 学 部	288	11	3.8%	4	1	0	2	1	0
工 学 部	538	29	5.4%	18	6	10	1	0	1
合 計	1,220	59	4.8%	35	12	13	5	4	1

※これまでに精神科、心療内科、神経科に通院歴あり:47名(3.9%)

(2) 在校生の精神保健調査

本調査は、健康診断時に在校生版メンタルヘルス質問票に記入してもらい、要面接学生を抽出し、健康支援総合センター准教授、臨床心理士が面接を行った。対象学生は、荒牧・昭和・桐生・太田地区の健康診断時に在校生版メンタルヘルス質問票を提出した学生とした。

	対象学生数	要面接		面接を うけた 学生数	結 果				
		人数	%		問題なし	随時の相 談 を推奨	カウンセリング 継 続	医療機関 紹介	通院中
教 育 学 部	689	18(2)	2.6%	7	1	3	1	1	1
社会情報学部	318	12(1)	3.8%	7	3	0	3	1	0
医 学 部	984	25	2.5%	17	4	9	2	2	0
工 学 部	2,155	54	2.5%	20	6	5	5	1	3
合 計	4,146	109(3)	2.6%	51	14	17	11	5	4

注：（ ）は、通院中またはカウンセリング中にて、面接除外を希望した学生数で内数

※過去1年間に精神科、心療内科、神経科に通院歴あり:82名(2.0%)

(3) 追記:

質問内容

新入生37項目在校生22項目からなる Gunma University Mental-health Inventory を用い、抑うつ状態、気分変調、精神病像、食行動異常、生活支障度、相談希望、既往歴に加え、今年度から発達障害支援の希望をスクリーニングした。

結果の分析

要面接数は新入生が微減、在校生は微増し、受検率は新入生で微増、在校生は微減した。結果は、随時相談の割合が増え、医療機関紹介は新入生で増加、在校生で減少した。カウンセリング継続数の増加を含め、スクリーニングによる早期対応とフォローアップが図られていると考えられる。ちなみに発達障害支援の希望に関しては、記入ミスや勘違いを除くと新入生 1 名在校生 3 名が適応に相応すると判断された。1 名は経過観察で問題なく、1 名は随時相談を推奨、2 名は本結果記載時現在本人と連絡中である。(なお、本スクリーニングとは別途に、明確な発達障害にて実際にサポートルームが関与している学生が 2 名、精神科医が本人及び関係者、家族に支援しているものが 4 名おり、その他確定診断は行えないものの関連問題にてカウンセリングや受療支援を行っている事例は相当数存在する。)

面接実施状況について

面接施行にあたって、准教授が桐生キャンパスに 4 回、太田キャンパスに 1 回赴いた。臨床心理士は、荒牧昭和キャンパス、桐生太田キャンパスの定期相談日に、学生から希望があった場合面接を施行した。附属病院医師には、荒牧キャンパスに 2 週間にわたって順次来所していただき、新入生の面接をお願いした。

学外臨床心理士による心理カウンセリング数《平成24年度》

～学生～

カウンセリング人数

	4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月		合計	
	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数
実施キャンパス																										
荒牧地区	3	0	11	8	9	2	7	2	3	1	2	1	7	1	4	0	5	2	2	1	3	2	3	0	59	20
昭和地区	5	3	5	1	3	0	2	0	2	0	2	0	4	1	4	1	4	0	4	0	3	0	3	0	41	6
桐生地区	13	6	21	8	16	4	16	3	13	3	8	1	12	3	10	2	11	4	11	3	8	0	8	2	147	39
太田地区	0	0	1	0	2	2	0	0	1	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	7	3
合 計	21	9	38	17	30	8	25	5	19	4	12	2	25	6	18	3	20	6	17	4	14	2	15	2	254	68

新規受付者数は内数

カウンセリング回数

実施キャンパス	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数
荒牧地区	3	15	13	11	3	2	12	5	7	2	7	4	84
昭和地区	5	7	6	4	3	2	6	5	5	5	4	5	57
桐生地区	20	25	27	25	15	10	18	16	14	16	12	14	212
太田地区	0	1	2	0	1	0	2	0	0	0	0	1	7
合 計	28	48	48	40	22	14	38	26	26	23	23	24	360

カウンセリング動機内訳

	4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月		合計	
	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数
心理性格	0	0	1	1	2	0	2	1	1	0	1	0	5	2	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	16	4
対人関係	6	3	11	4	10	2	11	1	5	2	4	0	9	1	8	2	9	3	7	0	5	1	4	0	89	19
心体の不調	9	2	20	8	14	2	13	2	7	1	5	2	12	3	5	1	8	1	11	4	13	1	8	1	125	28
修学影響心理等	13	4	16	4	20	3	13	0	7	1	3	0	11	0	7	0	5	0	3	0	4	0	7	0	109	12
その他	0	0	0	0	2	1	1	1	2	0	1	0	2	1	4	0	4	2	2	0	1	0	4	1	23	6
合 計	28	9	48	17	48	8	40	5	22	4	14	2	39	7	27	3	26	6	23	4	23	2	24	2	362	69

新規受付者数は内数

カウンセリング動機内訳は複数の場合あり

～職員～

カウンセリング人数

実施キャンパス	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数
荒牧地区	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2
昭和地区	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
桐生地区	0	1	3	1	0	0	0	0	1	1	2	0	9
太田地区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合 計	0	2	3	1	0	0	1	0	1	1	3	0	12

カウンセリング回数

実施キャンパス	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数	新規 受付者 数	人数
荒牧地区	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2
昭和地区	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
桐生地区	0	1	3	1	0	0	0	0	1	2	2	0	10
太田地区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合 計	0	2	3	1	0	0	1	0	1	2	3	0	13

カウンセリング動機内訳

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
心理性格	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
対人関係	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
心体の不調	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2
修学影響心理等	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	2	3	1	0	0	0	0	1	2	2	0	11
合 計	0	2	3	1	0	0	1	0	1	2	3	0	13

カウンセリング動機内訳は複数の場合あり

群馬大学保健管理センター規程

(昭和52.7.25制定)

改訂 昭和58.4.1 昭和60.4.1
平成8.4.1 平成10.2.1
平成12.4.1

(趣旨)

第1条 この規程は、群馬大学学則第11条の規定に基づき、群馬大学保健管理センター（以下「センター」という。）に関して必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、学生及び職員の健康の保持増進を図り、その将来にわたる健康の確保に寄与することを目的とする。

(業務)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 学生の定期及び臨時の健康診断を実施すること。
- (2) 職員の定期健康診断等の保健に関する専門的業務の実施について協力すること。
- (3) 身体的及び精神的健康相談に応じ、応急処置又は保健指導等を行うこと。
- (4) 保健思想の普及及び啓蒙等の健康の保持増進上必要な教育・指導を行うこと。
- (5) 健康の保持増進について必要な企画、立案について指導助言を与えること。
- (6) 学内の環境衛生及び伝染病の予防について指導助言を行うこと。
- (7) 保健管理の充実に向上のための調査研究を行うこと。
- (8) その他健康の保持増進について必要な専門的業務を行うこと。

(組織)

第4条 センターに、次の職員を置く。

- (1) 所長
- (2) 専任教官
- (3) 学校医
- (4) カウンセラー
- (5) 技術職員
- (6) その他必要な職員

(所長)

第5条 所長は、本学の教授又は助教授をもって充てる。

2 所長は、センターの業務を掌理する。

3 所長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員を生じた場合の補欠の所長の任期は、前任者の残任期間とする。

4 所長及び専任教官の選考は、群馬大学保健管理センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）の議に基づき、学長が行う。

(保健管理医)

第6条 保健管理医は、センターの専任教官をもって充てる。

2 保健管理医は、センターの専門的業務に従事する。

(技術職員)

第7条 技術職員は、センターの技術的業務に従事する。

(運営委員会)

第8条 センターの円滑な運営を図るため、群馬大学保健管理センター運営委員会を置く。

2 運営委員会に関する事項は、別に定める。

(分室)

第9条 保健管理上必要があるときは、センターに分室を設けることができる。

(事務)

第10条 センターの運営に関する事務は、当分の間、学生部厚生課において処理する。

(規程の改廃)

第11条 この規程の改廃は、管理委員会の議を経て学長が行う。

附 則

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

○ 保健管理センターの設置について

〔 昭和四十一年五月二十日 〕
〔 文部省大学学術局 〕

1 設置の趣旨

保健管理センターは、大学の保健管理に関する専門的業務を一体的に行う厚生補導のための施設として設置し、学生の心身の健康の保持増進をはかることを目的とする。

2 業務内容

保健管理センターにおいては、概ね次のような業務を行うものとする。

- ① 学生の定期及び臨時の健康診断の業務を行うこと。
- ② 学生のため随時健康相談に応じること。
- ③ 学生に対し健康診断の事後措置等健康の保持増進について必要な指導を行うこと。
- ④ 学内の環境衛生及び伝染病の予防について指導援助すること。
- ⑤ 学内保健計画の立案について指導援助すること。
- ⑥ 保健管理の充実向上のための調査研究を行うこと。
- ⑦ その他学生の健康の保持増進について必要な専門的業務を行うこと。

3 施設及び設備

保健管理センターの施設及び設備は、「国立大学における厚生補導に関する基準的な施設・設備（昭和40年2月学生課作成）」に規定する保健管理センターの施設及び設備を標準として整備するものとする。

4 組織及び運営

- ① 保健管理センターは、学部には属しない全学共通施設とする。
- ② 保健管理センターに所長を置き、教授又は助教授をもってあてるものとする。所長は、保健管理センターの所務を掌理するものとする。
- ③ 保健管理センターに所長のほか、教授、助教授、講師又は助手及び技術職員を置くものとする。
- ④ 保健管理センターの運営については、必要に応じ、その審議にあたるものとして保健管理センター運営委員会を置くものとする。

平成24年度 学校医・カウンセラー

学校医(通年)

医学部医学系研究科教授	田村 遵一
医学部医学系研究科講師 医学部附属病院助教	石塚 全(前半) 佐藤 賢(後半)
医学部附属病院講師	前野 敏孝
医学部医学系研究科助教 医学部附属病院講師	内海 英貴(前半) 前嶋 明人(後半)
医学部附属病院講師	五十嵐 茂雄
医学部医学系研究科教授	大嶋 清宏

カウンセラー

医学部附属病院講師	成田 耕介
医学部医学系研究科助教	亀山 正樹

精神科医

医学部附属病院講師	成田 耕介
医学部医学系研究科助教	亀山 正樹
医学部附属病院助教	成田 秀幸
医学部附属病院助教	高橋 啓介
医学部附属病院助教	武井 雄一
医学部附属病院助教	酒井 努
医学部附属病院助教	青山 義之
医学部医学系研究科助教	藤平 和吉
医学部附属病院助教	桜井 剛志

第14回（平成24年度第1回）健康支援総合センター運営委員会次第

1 日 時 平成24年7月9日

2 議 題

○ 協議事項

- (1) 平成25年度学生定期健康診断日程（案）について
- (2) 医学部への「健康維持・向上相談員」の平成25年度以降の配置について
- (3) 各学部等提出の協議事項について
- (4) その他

○ 報告事項

- (1) 平成24年度学生定期健康診断結果について
- (2) 平成24年度学外カウンセラー及びキャンパスソーシャル・ケースワーカーの勤務時間について
- (3) 平成23年度工学部桐生地区キャンパスソーシャル・ケースワーカーの業務実施概要結果について
- (4) 平成23年度健康支援総合センター業務実施データについて
- (5) 平成23年度群馬大学健康支援総合センター中期目標・中期計画実施結果について
- (6) その他

第15回（平成24年度第2回）健康支援総合センター運営委員会次第

1 日 時 メール会議 平成24年8月23日から8月30日

2 議 題

○ 協議事項

- (1) 平成25年度学生定期健康診断日程（案）について

第16回（平成24年度第3回）健康支援総合センター運営委員会次第

1 日 時 平成24年12月 7日

2 議 題

○ 協議事項

- (1) 平成25年度業務計画（案）について
- (2) 平成25年度中期計画に係る実施計画（案）について
- (3) 各学部等提出の協議事項について
- (4) その他

○ 報告事項

- (1) 定期学生健康診断実施に伴う学部1年次生（工学部夜間主コース学生除く）の前学期授業の開始時期の延期要望にかかる教育基盤センター長の回答について
- (2) 平成25年度前橋地区学生定期健康診断日程表の決定及び平成26年度の実施について
- (3) 平成25年度学生定期健康診断における附属病院医師の派遣依頼について
- (4) 平成24年度中期計画実施報告について
- (5) 平成24年度外国人留学生特別健康診断実施結果について
- (6) 平成24年度メンタルヘルス研究会開催結果について
- (7) 国立大学法人保健管理施設協議会及び全国大学保健管理研究集会について
- (8) 群馬県内大学等保健管理担当国会議及び全国保健管理協会関東甲信越地方部会保健・看護分科会運営委員会報告について
- (9) 平成24年度昭和地区「健康維持・向上相談員」の利用状況について
- (10) 平成24年度工学部桐生地区キャンパスソーシャル・ケースワーカーの利用状況について
- (11) 平成24年度カウンセラー，キャンパスソーシャル・ケースワーカーと工学部国際交流
 - ・学生支援委員会委員長等の懇談会について
- (12) その他

第二期中期目標・中期計画に係る6年間の実施予定計画

基本方針

1. 第1期に引きつぎ現有的健康支援総合センターの教職員の能力を活用した学生への健康管理施策の改善を継続する。
2. 学生の健康管理に関する教職員が絶対的に不足している桐生地区についてはカウンセラーの常駐化で対応するようにする。
3. 学生用の医療職が配置されていない昭和地区においては保健師等の配置の可能性について結論を得る。

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
7 メンタルヘルスの充実のために学生に係る精神保健調査・カウンセリング実施評価方法等の調査・検討を行う。	1. 学生定期健康診断における精神保健調査項目の改定を検討する。 2. 精神面等による休学者への精神保健調査を検討する。 3. 留学生への精神保健調査を検討する。 4. カウンセリング実施結果の評価方法等の検討を行う。	1. 改訂した精神保健調査項目により学生定期健康診断に調査する。 2. 精神面等による休学者への精神保健調査を行う。 3. 留学生への精神保健調査を行う。 4. 新たな評価方法によりカウンセリング実施結果の評価を行う。	→	→	→	→
8 健康支援拡充用保健師の配置及びメンタルヘルスの充実のためにカウンセラー（臨床心理士）の担当時間増を図る。		1. 工学部担当カウンセラー等の屋間授業期間中における常駐化を検討する。	→	→	→	1. 工学部担当カウンセラー等の屋間授業期間中における常駐化を図る。 2. 昭和地区健康支援担当保健師等の配置の可能性の結論を得る。
9 健康相談の充実を図る。	1. 教員への精神相談コンサルテーションの試行を行う。 2. メンタルヘルス担当専門者間でのカンファレンスを実施する。 3. 学生のメンタルヘルスに関するピアサポート計画の策定を行う。 4. 群馬県内大学等メンタルヘルス関係者ネットワークの立ち上げを行う。	1. 教員への精神相談コンサルテーションの試行結果の改善を行う。 → 3. 学生のメンタルヘルスに関するピアサポートを試行する。 4. 群馬県内大学等メンタルヘルス関係者ネットワークの活動を開始する。	1. 教員への精神相談コンサルテーションを行う → 3. 学生のメンタルヘルスに関するピアサポートを実施する。 4. 群馬県内大学等メンタルヘルス関係者ネットワークの活動を開始する。 →	→	→	→

平成 2 4 年度

健康支援総合センター運営委員会委員名簿

平成 2 4 年 4 月 1 日

所 属・職 名	委 員			関 係 職 員		
	氏 名	内 線	規定第3条	職 名	氏 名	内 線
センター長・委員長 理 事(教育・国際交流担当)	石 川 治 osamuish@med.	7112	1 号委員	看 護 師	八重樫 聡 子	7161
副センター長 健康支援総合センター専任教員	大 島 喜 八 kihachi@aramaki.	7160	2 号委員			
健康支援総合センター 健康支援総合センター専任教員	上 原 徹 toruaki@	7162	3 号委員			
教 育 学 部 学生支援委員長	西 園 大 実 zono@edu.	7342	4 号委員	教務係長	石 森 正 二	7223
社会情報学部 学 生 委 員 長	税 所 哲 郎 saisho@si.	7523	4 号委員	教務係長	鈴 木 透	7404
医学系研究科医科学専攻 教務部会長	村 上 正 巳 mmurakam@showa.	8550	4 号委員	学事・ 学生支援係長	西 川 二 郎	7796
医学部保健学科 厚生補導専門委員長	山 崎 恆 夫 tsuneoy@med.	8975				
工 学 部 国際交流・学生支 援委員長	山 田 功 yamada@	1563	4 号委員	学生支援係長	朝 比 奈 良 幸	1023
				看 護 師	小野里 清 美	1044
総 務 部 長	堀 川 光 久 mhorij@jim.	7002	5 号委員	人事労務課 専門職員	加 藤 守 平井 大介(後半)	7023
学 務 部 長	池 田 三喜男 mikedata25@jim.	7121	5 号委員	学生支援課長	戸 澤 勲	7135
				副 課 長	後 藤 孝 一	7136
				学生支援係長	中 野 政 一	7138

健康支援総合センター規程

平成 18. 4. 1 制定

(趣 旨)

第 1 条 この規程は、群馬大学大学教育・学生支援機構規則第 3 条第 2 項の規定に基づき、健康支援総合センター（以下「センター」という。）に関し必要な事項を定める。

(目 的)

第 2 条 センターは、群馬大学(以下「本学」という。)の学生及び教職員の心身の健康の保持増進を図ることを目的とする。

(業 務)

第 3 条 センターは、前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 健康診断の企画、立案及び実施に関すること。
- (2) 健康診断の事後処置等に係る指導助言に関すること。
- (3) 身体的及び精神的（カウンセリングを含む。）な健康相談に関すること。
- (4) 応急措置に関すること。
- (5) 健康に係る調査及び研究に関すること。
- (6) 伝染病の予防及び環境衛生に係る指導助言に関すること。
- (7) その他センターの目的を達成するために必要な事項

2 センターは、業務を行うに当たって、必要に応じ各事業場の安全衛生委員会その他関係部局と連携するものとする。

(職 員)

第 4 条 センターに、次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 専任教員
- (4) 学校医
- (5) カウンセラー
- (6) 技術職員
- (7) その他必要な職員

(センター長)

第 5 条 センター長は、学長が指名する理事をもって充てる。

2 センター長は、センターの業務を掌理する。

3 センター長の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、欠員を生じた場合は、前任者の残任期間とする。

(副センター長)

第 6 条 副センター長は、本学の教員のうち学長が指名する者をもって充てる。

2 副センター長は、センター長を補佐し、センター長に事故あるときはその職務を代行する。

3 副センター長の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、欠員を生じた場合は、前任者の残任期間とする。

(専任教員)

第 7 条 専任教員の選考は、大学運営会議の議に基づき、学長が行う。（健康支援室）

第 8 条 保健管理上必要があるときは、センターに健康支援室を置くことができる。

(運営委員会)

第 9 条 センターの円滑な運営を図るため、健康支援総合センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会については、別に定める。

(事 務)

第 10 条 センターの事務は、当分の間、その業務内容により総務部人事労務課及び学務部学生支援課において関係部局と協力して処理する。

(雑 則)

第 11 条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、機構長が別に定める。

(規程の改廃)

第 12 条 この規程の改廃は、大学運営会議の議を経て、学長が行う。

附 則

この規程は、平成 18 年 4 月 1 日から施行する。